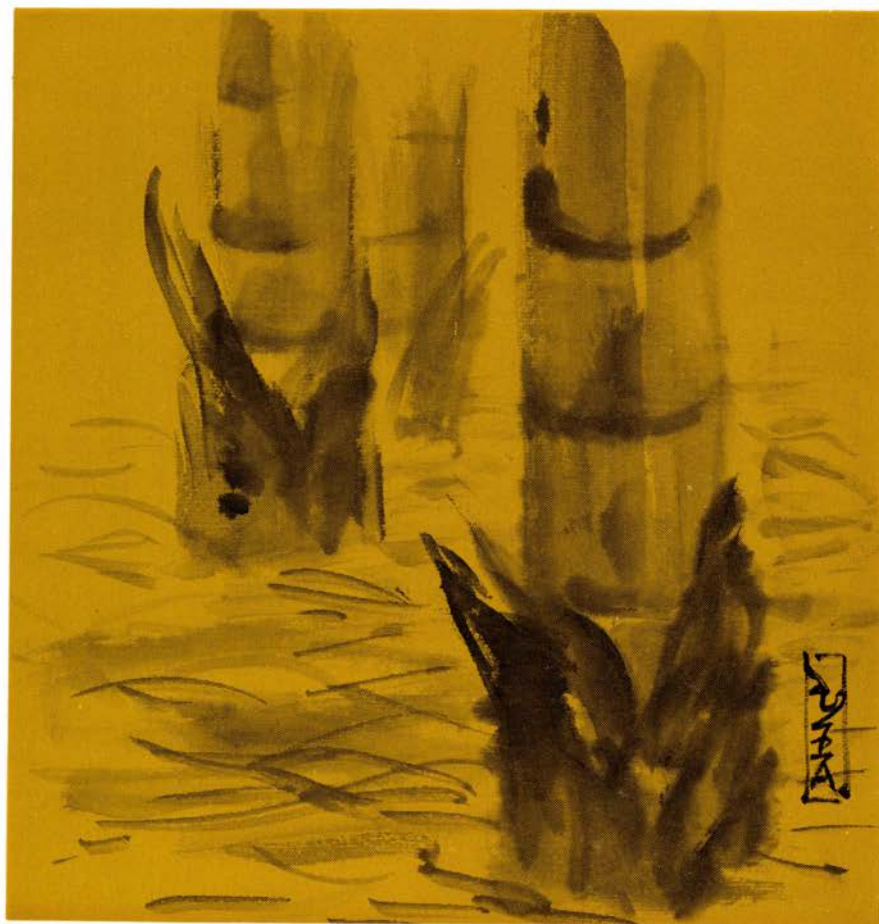


川柳塔

昭和六十二年五月二十一日発行
創刊大正十三年六月一日発行
通卷七二二号



日川協加盟

No. 7 2 1

六月号

麻生路郎二十三回忌 麻生葭乃七回忌
中島生々庵一周忌

追悼川柳大会

日 時 昭和62年7月5日(日)

会 場 高野山 普賢院 TEL 07365 (6) 2131

高野山駅前からバス (大門行又は奥の院前行)
「千手院橋」下車すぐ

◆法 要 (法要に参加される方は前日からお泊り下さい)

◆川柳大会

お 話	金剛峯寺第四百六世座主	森	寛 紹 師
兼 題	「水 草」	山 内	静 水 選
	「福寿草」	高 橋	操 子 選
	「金 魚」	野 村	太 茂 津 選
	「 畳 」	小松原	爽 介 選
	「大 空」	去来川	巨 城 選
	「書 斎」	磯 野	い さ む 選
	「二 階」	西 尾	栞 選

各題2句 締切1時(投句拝辞)

会 費 3,000円

□前日観光(奥の院・大門など) 4日午後1時高野山駅前集合

□宿泊 普賢院 7,000円(川柳塔社宛ハガキで予約して下さい)

◎前々日大阪宿泊を希望される方のために宿舎を用意してあります。

大阪弥生会館 大阪市北区芝田町2丁目4-53

大阪駅中央口を出て北へ歩いて5分。JR西日本本社(元大阪鉄道管理局)
北側。電話(06)373-1841#0

<申込先> 泉佐野市中庄1081-99 阿萬萬の

電話(0724)63-4112

◎会場までの所要時間は南海電鉄ナニハ駅から約2時間です

主 催 川 柳 塔 社

名 句

西 尾 葉

曾て、和歌山市の七面句会へ行っている時に、七面句会の主催者・故中筋三幸さんから、突然「名句とは、どんな句を名句というのでしょうか？」という質問を受けたことがある。余りに唐突であつたのと、まだ曾て考えたことも教えられなかったもので、常識的に「有名な句で、後の世まで人口に膾炙される句である」とおぼろげながら定義したのだが、帰って辞典をひくと、名句とは有名な名高い俳句としか出ていなかったの、安心したような安心しないような変な気持ちで今なお居るのである。

その時の例句をあげて話したが、川

柳では路郎の「俺に似よ俺に似るなと子
を思ひ」と水府の「ぬきすててうちが一
番よいといふ」という句と、俳句では芭
蕉の「閑かさや岩にしみいる蟬の声」「夏
草や兵どもが夢の跡」等は、今でも何か
の時に口になっている。それは句の意味も
よくわかり、五・七・五のリズムもしつ
かりしているからであらう。ふり返って
現代流行している意味もわからず、字余
りの難解句が後の世の人達に膾炙するで
あらうか。現代でも笑い話の一つとして
引用するかも知れないが、それは一抹の
泡となって消えてゆくものである。

川柳文学の五月号に永田帆船氏が良い
エッセイを書いておられる。最後の数行
を拝借してみると「我々は性急に新しい
文化を追うあまり、過去の文化を忘却し
ていないだろうかという反省がある。川

柳を知っていても、過去の川柳の歴史の
重みと厚さをどれほど認識しているだろ
うか。句を作り川柳の名を冠しているな
ら川柳のその過去の文化的意義について
柳人はもっと関心をもつべきであらう」
と慨嘆していられる。全く同感である。

最近川柳を始めた人が、その川柳の重
さも厚さも知らず難解句の一派に迎合し
て、その人達に頭を撫でられると、ひと
かど詩人になったような気で、作者自身
さえよう説明も出来ぬ句を発表して得々
としている。全く言葉の溶接工というて
も然りである。こんな句が、後の世の人
が口にするであらうか。思えば寒い心で
ある。自分の生涯に一句でもよいから、
名句を作りたいという言葉はしばしば聞
く言葉であるが、名句とは後の世の人が
決めてくれるものと思えばよいであらう。

座右の句

役人の子はにぎにぎをよく覚え

(古川柳)

私の句

ほころびを繕い合つて夫婦傘

高須賀 金太

川柳塔 六月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

名 句

鷺羽山川柳句碑由来記

西尾 栞 …… (1)

川柳塔 (同人吟)

本田恵二朗 …… (2)

自選集

西尾 栞選 …… (4)

■川柳太平記 (109) 川柳の群像 房川素生

東野 大八 …… (30)

■連載 誹風柳多留廿六篇研究 (三十一丁)

水煙抄

黒川紫香選 …… (32)

昭和62年度二賞候補作品中間発表

秀句鑑賞

同人吟

市川 鈴魚 …… (55)

水煙抄

久保 正敏 …… (59)

愛染帖

橘高薫風選 …… (56)

鷺羽山川柳句碑由来記

本田恵二朗

島一つ土産に欲しい鷺羽山

瀬戸大橋架設工事が着々と進行している姿を目標に眺める位置に住んでいる私であるが八年程前にサンフランシスコの金門橋をドライブした時、その雄大さに圧倒されたことを思い起し、それと比較して見て、瀬戸大橋の方がはるかに雄大であることを思い知らされている。さて十八年ほど前に瀬戸大橋架設の声が聞え始め、沿岸の各県が競って誘致合戦を開始した。期を同じくして、鷺羽ライオンズの奉仕事業として、名勝鷺羽山に川柳句碑を建立することを私が提案したところ、時の会長が採用され、その企画全般を私に委嘱された。

私は早速に行動開始、鷺羽山に最もふさわしい句を選定することに努め、前掲の句を推薦した。句の作者は親しい柳友難波天童君である。児島生れの明朗爽快な男であるが、句碑完成の時点には惜しくも故人となっていた。私は四国庵治の広大な石山を訪ねて、石材の物色に努めた結果、重量八百貫の石を選定購

へ女性コーナー 茴香の花……………小出智子選……………(60)

■対談 われは月の子顔上げよ……………時実新子・橋高薫風……………(62)

蓬萊山……………布施幸子……………(66)

麦の頃……………栗谷春子……………(67)

初歩教室……………阿萬萬的……………(68)

「海」……………土橋 蛭選……………(70)

一路集「笛」……………中内朱坊選……………(70)

「脈」……………二宮山久選……………(71)

柳界展望…………………………(72)

本社五月句会…………………………(75)

各地柳壇(佳句地10選／森田熊生)……………(79)

■6月各地句会案内 91

■編集後記 93

座右の句

愛してると言えば妻は吹き出した (敏)

私の句

ひきうすを廻せば民話こぼれ落ち

田 中 隆 二

入した。句の染筆は私の敬愛する友である書家三宅素峰先生にお願いし、快諾を頂き、美事に揮毫して下さった。素峰先生快心の作として高く評価されている。

昭和四十三年三月吉日に盛大な除幕式が行われ、時の知事加藤武徳先生にもご臨席下さったことを嬉しく思い起している。なお句碑の設置場所を決めるため、国立公園監督官と市観光課と私の三人で物色して廻ったが、私の住む下津井側の地点で、此処が最適と私は直感したので、監督官にその由を進言したところ賛成を頂き決定した。私が直感したという意味は、この位置に碑を建てると、観光客が碑を背景にして記念写真を撮られるであろう。するとそのバックに瀬戸大橋の雄姿が必ずや見えるようになるであろうと、ひそかに予想し、願望したのが私の真意であって、その時その場所でものした句が次の通りである。

——橋桁に松がはえてる瀬戸の橋——

この橋桁は櫃石島の姿である。政治力がどうあれ架橋の位置は此処以外には無いという意味の随筆を、前記の句と共に、ローカル新聞に掲載して頂いたところ、佳き反響があったことを思い起している。その記事は、私のスクラップブックに貼られて、薄茶色に変色しているが、十八年前に詠んだ句が、今日血の通った生きた句となったことを感無量とする私である。



西尾 栞 選

和歌山市 福本英子

ハイヒールの高さで見ても怪我をする

言い訳のしどろもどろに救われる

春風の噂に鼻炎むず痒い

雑巾を絞れぬ子らのバスタオル

一泊の姑に無用のバスタオル

憎しみを通しきれないお人好し

西宮市 奥田みつ子

種を買う財布は少し大き目に

逢うてきた鼓動のままに惹きざむ

春の風少し不良になろうかな

パイを焼く声も明るい台所

人ひとり信じ切れずに春が逝く

翔びすぎて白に戻れぬ白い鷺

松原市 谷垣史好

大根の白い裸身が眩しくて

六月の気分あやふや西夏文字

大黄河さて箱庭もまた愉し

友だちの友だちだけ嫌な奴

愛すべきは女 御しがたきも女

八尾市 高杉鬼遊

中国の雨期しとひと兵の夢

古書の店ことば乞食の目で漁る

お祭りはよいがどなたが後始末

冷めしと固いこうこが好きやねん

おばはんを誘うすしやは新世界

取扱注意の札を医者がくれ

兵庫県 遠山可住

感情線を仕組むとロボットがさばる

針を持つ膝が崩れて絵にならず

年金へ長距離型の歩をゆるめ

若者よ還れと一本杉が哭く
花屋を回る蜂が一匹街に住み
倒産の庭に桜がいま盛り

竹原市 小島 幸

岬たそがれ若き旅人達歩く
自画像がだんだん他人めく恐さ
僕の自画像子供の部屋に置いておく
ここ一発がどの子にもないそれでよい
父の眼に葦はいつでも揺れている
国鉄という名が好きで一徹で

大阪市 西出 楓 楽

ソプラノよりアルトの説得力に負け
ふところに持っているのはモデルガン
疲れかなまたもテストの夢を見る
ためらわずカモになりますうれしい日
青春の童顔という悩み持つ
自信あるので後姿も見せている

尼崎市 春城 武庫坊

恋をして帽子斜めにかぶってる
均等法女は乳を飲ませます
犬だけが退屈顔の桜狩り
散る花を見ているそっとしておこう
待ちぼうけ桜吹雪に笑われる
パステルの二十四本で春を画く

大阪市 津守 柳 伸

検診をこまめに受けてひとり住む

平凡の良さしみじみと通夜の席
つくすだけつくして怯えない影絵
熱い茶が好きならチで憎めない
お互いの器量を思ってお付き合い
冷凍も知らぬが仏 初鰹

八尾市 宮西 弥生

山里のこころに甘さを悔いている
何もかもお見透し仏の視野の中
いくさには勝たない主義で敵もたぬ
親も子も言い分あって終い風呂
狂いたいときもあろうよ母寝顔
やさしくなった父の言葉が気にかかる

和歌山市 西山 幸

寝ころんで時計の音を聞いている
朝晩の鏡をさむい眼でみつめ
日めくりの薄さを逃げる術がない
楽屋裏きつと誰かが見ているぞ
ペンペン草は花屋の花に憧れる
長い電話で言わずもがなのことを言う

八尾市 宮崎 シマ子

花を褒めそれから続いている御縁
逢うて来て鏡にさえも嘘を言う
姑看とる嫁も春眠には勝てず
夫婦して歩幅の違うもどり道
伊良湖岬自然な貝をみつけたら(伊良湖にて)
恋路ヶ浜椰子は南の人を恋う

高知県 赤川 菊野

切れ味がよすぎる女でまだ一人
どこからが余生か長い道歩く

ふところ手竜馬を真似てみたけれど

その先は分つていても聞きたがり

明日をみるメガネを丸くまるく拭く

隠居部屋出来たと嫁が言うてくる

桜井市 岩本 雀踊子

腹切りを二度した履歴書かいている

株の値にかかわりのないめし茶碗

十匹になると強気になるメダカ

両方の耳をつつきに来た噂

平田市 久家 代仕男

大根の花が大気の汚染消す

職場では牌の手捌き役立たぬ

不干渉の皆も築き同居する

同居してからのリズムを組みたてる

値下がり的大豆豆腐は未だ元値

岡山県 土居 耕花

花終る財布の中も皆終る

咲いたとも散るとも言わぬ梨の花

絞られる事を菜の花まだ知らず

怒らして無声映画の中に居る

熊本市 有働 芳仙

その辺り一周りして下駄を履き

単身赴任五尺の体の捻子ゆるみ

庭の隅蒲公英何を訴える

お土産が途中下車する所があり

姑の城が落ちない台所

下関市 石川 侃流洞

故郷は沢庵でいいコシヒカリ

道祖神村の民話を語り継ぐ

推理した噂刑事が来てあわて

針包丁駄目でピアノを弾いている

河岸変えてもとの話へ逆戻り

答は一つ四月始めの汽車に乗る

耳栓をすればよかった口車

丹精の花の素行がおさまらず

不思議にも涙の似合う白い足袋

牛肉で練習をする電気メス

寝屋川市 江口 度

フルムーン桜前線追いつづけ

ラッパ水仙兵隊蜂の羽の音

それにしても高すぎるゴッホの絵

売上税反対が行く花吹雪

よそゆきの首で見合の席にいる

逆光へ思慕のあせりを見抜かれる

ふる里に湖があり美味しい飯

米子市 小西 雄々

父の樹へ浮かれた跡が見あたらぬ
上役のきめた序列に異議があり
茄子胡瓜トマト自然にかえりたい

倉敷市 稲田豊作

箒目の見える神苑歩を正す
瀬戸の月良寛囃子の輪が踊る
金欠病これが私の持病とは
邯鄲の夢かと祖父が寝呆けてる
悪友の見舞いが一番元気づけ

今治市 越智一水

沈黙は敗北となる世の流れ
退職をしても税金つきまとい
退職へ妻を見直す宿浴衣
腕時計はずしてつかれ取戻し
ひな祭り妻が幼い声を立て

大阪市 西森花村

肩の凝る日も後家は負けられぬ
お賽銭先銭ですよと音を立て
交通渋滞車も恋も捨てよとや
虎の子は虎俺の子は失業者
孫の土産親の毒見が未だ続く

羽曳野市 榎本吐来

嫁に出す話秒針動き出す
国鉄挽歌昭和がやがて遠くなる
放逸や三日見ぬ間の銀杏の芽
吉野山花と土産屋競い合い

花を観る人花に暮しを賭ける人

東京都 増田次章

だんだんと飾りがとれる同窓会
株を買う札束ナフタリンの匂い
ブライドを捨てろと再職のガイド
虫のいい電話が三年ぶりの声
ポケットベル一日鳴らぬ日の孤独

大阪府 藤田頂留子

北庭で明るく咲いてくれた花
大師の灯今日のお礼申し上げ
人生は片道切符とひとり言
去年より万部のカニが小さく見え
不器用になって非難のほかわす

和歌山市 松原寿子

砂時計一途な夢が堕ちてゆく
優しい胸からもらった熱い約束よ
本音すこし紅の彩からこぼれ落ち
逢えた日の檸檬の香りに刻がある
夢ひと夜ガラスの靴が踊り出す

京都市 山本規不風

ブラジルの旅

イグアスの滝で情けの虹に逢う
落した財布届けた黒人の手を握る
サンバ踊ってリオの旅愁と窓の月
世界一の滝を空から見て無聊
字が無いというインカ遺蹟に残る恋

近江八幡市 前川 千賀子

コンコースで終日子らを見ぬ恐怖

歩道橋春のかけらもなく暮れる

花の闇嘘つくことを教えられ

雪柳の清い童画と黄昏れる

道教えやさしい道を選ってくれ

鳥取県 川崎 秋女

明暗の一夜をさくら散り急ぐ

チューリップ咲けども夫の失語症

忘れぬひと言風の道をゆく

一コンマ下げたら吹いた温い風

花輪より生花と遺言には書こう

米子市 政岡 日枝子

三面鏡顔が四ツも写っている

角々で父の蒔いた種子と会う

肩車父は泣いていたのかも

赤い服ジョークにしてはきつすぎる

わがままな耳に淋しい祭笛

富田林市 田形 美緒

公園に朝昼夜の顔があり

ちぎれ雲桜吹雪と道行きで

甘酒に酔うてる夫と恙なし

善人の話が好きな番茶なり

ばあちゃんに茶飲み仲間と言うお方

富田林市 藤田 泰子

その時はきつと思っていた小指

どこまでが冗談かしら四月馬鹿
日々多忙公園に棲むキューピット
東の間の出来ごと二人は共白髪
憧れに兄と呼びたい人が欲し

西宮市 林 はつ絵

あくせくと騒ぐこの世の台所
田の見える小山に亡父を休ませる
杉木立産土神の狛犬も老い
故郷に友情が待つふきのとう
何だかんだと貧乏神が出て行かぬ

美禰市 安平次 弘道

虚々実々勝てば官軍とは哀し
粉飾をして自分史が続かない
錯覚をしても極楽へは行けぬ
二者択一女の愛に幅がない
フライパンの上で亭主を踊らせる

笠岡市 松本 忠三

有り体に話す鬚りのないままに
魂胆を握りつぶしてやるもよし
神様でないから何とも言えませんが
考えが古い謗りへふり向かず
知る人ぞ知る泣言は嫌いです

倉敷市 小野 克枝

障害の友へ笑いの種を分け
武器持たぬ女九官鳥が好き
宣告を明日に伸ばす医者の情

鏡には見せぬ女のはかりごと
肩書きを取ると傾く父の塔

堺市 高橋 千万子

内緒です例外ですとだまされる
目印が刻々変りゆく都会

駐車場確保それからめしにする
いらだっているタクシーに乗った悔い
まっとうに鳴くほどカラスうとまれる

島根県 西村 早苗

是非というメモ退社のベルが鳴る
うまいなと他人がほめる嘘一つ

いい夢の余韻が残るタマゴ焼き
疑ってうたがい続けた中の愛
逢いにゆく小さな駅をいくつ過ぎ

島根県 堀江 正朗

人間の顔見たくなる花の宵
かばい合いながらつまづく音も聞き

盃と見えたあの日をよく語り
音だけで積む空想は胸に置く
爪切って心やすらぐ朝の風

奈良市 宮口 笛生

風邪を引くそんな暇ありません
働ける幸五時起きの苺取り

冷や奴貧乏性に育ってる
昼からの酒も肩書き持つ名刺
一日を花見につぶす日を作る

岡山市 時末 一灯
電話ベル闇を集めてのしかかる
近道でエリート路傍の石を見ず

気の強い女いえいえ均等法
五月晴バカンス無題のまま終る

打明けぬことを背中に見てしまい
四つん這いになって児の視野たしかめる

島根県 小砂 白汀
まるすぎと摺みどころのない怖さ
裏道へ通ずる路はあけてある

これだけになったね同窓通夜がえり
舌出してあんたの後を従っていく

米子市 林 荒介
入り陽して街も河口もひといろに
自転車も春の光りに乗せてやる

冷静になればなんでも無い嘶
生きたとは吃水線にある予感
網の破れて村の掟も散り散りに

今治市 矢野 佳雲
中年で電車の席がまだ取れぬ
じいちゃんが好きとは可成り出来た奴

誘われて太郎も次郎もする署名
父さんに逆らいなやと涙ぐみ
紅一点などと飯場のおばあさん

唐津市 久保 正敏
少女A父の酒乱を見た日から

校長も受験の子には只の親

飄々と無冠の酒に酔うて生き

さまになる女があつてこそ春

地下実験モグラ行末考える

唐津市

田口虹汀

海底を知らぬ海月の高軒

糟糠の妻が隣で欠伸する

凡人のお蔭標的にはされぬ

峠越えたベッドに朝の陽が当る

釈尊の素肌に春の風が吹く

島根県

堀江芳子

盲夫の手引いてて花に酔えますか

働ける喜び朝の艶布巾

会釈して一本道の温かさ

斐伊川と桜は夫の眼底に

履き馴れた靴に温みがたまつてゐる

寝屋川市

稲葉冬葉

この街に誇る八景さだまりぬ(寝屋川市)

言い訳を決してしないから恐い

鉢巻が似合う子供でたのもしい

自立して祈りが遠くなつてゐる

百年の不作と妻に言わせない

鳥取市

森田熊生

私にも人生がある靴がちび

あかぎれの母にも長い長い道

指切りの指から温い血をもらう

わらべ唄試験知らない素直な瞳

ぬか漬けをまぜてゐる母の指が好き

松原市

佐藤藤子

学園の街で気になる五月病

子育ての燕をみてるひとりばち

やせ我慢してる鏡の目があかい

思い過しのお風呂の水があふれている

万病にきく温泉で湯にあたり

和歌山市

牛尾緑良

時々を受けておきたい妻のジャブ

桜散る樹と花片と私だけ

花冷えのそれから母へする電話

雑兵は雑兵なりに背を正す

本当の愛を不倫の名で汚す

松江市

恒松叮紅

ワープロで来た温もりのない宛名

朱を引くと少し自慢がしたくなる

新婚が隣へ越して灯がともる

老いらくの恋を邪魔する花粉症

罪もないのに日の丸を目の仇

京都市

松川杜的

名曲へ猫も尻つぽを動かさず

桜ちりちり深くとざして京の寺

陰陽石おごそかに注連張つてある

焼板の温き先祖の家に住む
移り香が怖くて亡母の桐ダンス

大田市 藤田 軒太楼

双方の顔をつぶさぬ気の配り

卵焼く香いに朝寝が下りてくる

ライバルは彼だと知ったデートの日

究極は若さにゆずる老いを知り

孫三つ冷蔵庫あける智恵がつき

高槻市 辻 白溪子

同居でも気ままにさせておく昼寝

レジャーまたホテルへ着いて雨が止む

小銭だけ損してパチンコ見切りつけ

定量の酒が越えてる雨やどり

冥想の正座へ和尚がくしゃみする

米子市 野坂 なみ

おしゃべりがしたくて風邪をおして出る

お金では買えないものを大切に

分身へ小さな光となり切ろう

馬鹿になり安全地帯に住んでいる

頑張れよそこまで許す事はない

綾瀬市 大山と金

こっそりとベルト緩める鍋に坐し

黙っては食えないものか河豚料理

月給の殆んどローンに持ってかれ

吸いかけのたばこ勿体ないがバスが来る

還暦や親の偉さがわかりかけ

神戸市 仲 どんたく

花の道ドンキホーテは夢に乗る

冬抜けて駢蕩の夜の香に泳ぐ

病人へテレビの春が開花する

流水のうしろ姿を春が追い

半眼の仏陀が夢を咀嚼する

柳井市 弘津柳慶

激辛へ新人類の見栄があり

熱弁を押し止められて疎ましく

アルバムの思い出遙かに独り言

脇役がしゃしゃり出て来て揉めている

それからの義理が重たく背にかかり

鳥取市 両川 洋々

開けゴマの呪文が妻にだけ効かぬ

終章できつと笑える夫婦です

胸の中覗くと味方だれも居ず

ロボットよお前に未来などあるか

ノルマますます増えて鉛の靴をはく

米子市 林 瑞枝

カレンダーの赤いサインは女の秘

ゴム風船迷うことなく風に乗り

てんでん手毬ポケットの鍵踊る

仲直りの鍵はボトルの底にある

網の目を抜けて鱗を光らせる

弘前市 田 中 叶

子供等が見ていて妻の肩を揉む
その時も女のとこにおった父
婿どのに行く自衛隊を辞めたあと
思い出す一度バイトに来た娘
春の雪高校生となる二人

京都市 都 倉 求 芽

初恋の女が金借りに来た戻り寒
今日こそは本音吐きたい四月馬鹿
水中花コップの中の嘘を抱く
過去はみな笑い話につくり替え
野球から読む日株からの日凡人で

大阪市 本 間 満 津 子

観る人の心によせて桜散る
他人ごとで済まぬ明日の紙おむつ
なに着ようなに喰べようかも励みなり
単細胞だから狂わず生きている
手間かけた味が心にしみてくる

岡山市 川 端 柳 子

酒止めて酒の元気を恋しがり
ある決意ただいま忠告止めました
いまは黙って最敬礼をしておこう
後日談あちこち出来た水溜り
ひとりで読む便りポケッに入れている

藤井寺市 吉 岡 美 房

一年生兎の耳で聞いている
金魚鉢春の光を朱に染める
鳩時計鳴って平和が怖くなる
膝枕財布のことは言うまいぞ
口答え大事な人が出来たよう

尼崎市 春 城 年 代

入園の門の桜と孫を撮る
五百円硬貨の愚痴も消えて来て
駅からの矢印は喪の家に着く
右腕になって下さい仁王さま
針仕事の母にご先祖聞いておく

大阪市 吐 田 公 一

満員電車までがなつかし定退日
焼け石と知りつつ情の水をかけ
生きている喜び一字ずつ写経
反抗期思案に余る糞糸
細胞が似てる夫婦のケチ同士

和歌山市 堀 端 三 男

ひっそりとしたし孫も来てほし
嘘ひとつ入れて話が盛り上がる
きりきり舞いさせて旅立つハネムーン
両方の顔立て違う人に入れ
山焼きの煙にきつね雨が降る

唐津市 仁 部 四 郎
世渡りも嘘も下手だが丈夫な歯

赤ん坊のあくびに三時の茶がはずむ
生あくび嚙んでテレビはまだ消えず
若人よペンの強さを信じよう

暴走のペンに庶民は失明す

倉吉市 奥谷弘朗

善人の手の内たわいなく読まれ

芸のある方が出世の宮仕え

世知辛い世間を泳ぐ知恵をねる

義理がたさ人の情にほだされる

意欲満々と快適に踏むペダル

呉市 林野甦光

これしきは一会の客の気配りで

味方とも敵とも盃伏せている

ストーリーにない人妻という奇抜

別け隔てなくてポストは口を開け

レイアウト若い日の顔入れておく

倉敷市 野田素身郎

選挙には活気づく過疎の村

和服姿が一際目立つ通勤車

当てて当てられ運転うまくなり

人事異動出るも残るも酒地獄

酒が好きナツメロが好きママが好き

大阪市 天正千梢

それなりの面子日陰の暮しとて

「端的に言えば」と男青い酒をつぎ

塩を食うてから深追いに気づき
老いて尚消しごむに吸取り紙
執行猶予あと半年はおとなしく

唐津市 浜本義美

眠り度いための酒だよ許されよ

エリートも凡人なみに惚けてくる

酔うている胸の扉は開けたまま

親が敷くレール外した日の不覚

春うらら音を忘れた山の里

松江市 柳楽鶴丸

ドレスの妻へメガネを拭くゼスチュア―

六法全書が喋ってる聞き流そ

鶴丸を鶴男が意見しています

妻からは想像出来ぬ女文字

忍従のボタン妻は掛けたまま

兵庫県 辻文平

年金が妻に手錠をかけられる

這えば立て立てばいそいそ親離れ

子がみんな女房についていた別居

逃げ道の一つ見付けた咳払い

手鏡へ自分の嘘に酔いしれる

西条市 片上明水

噴水の高さが変わり園も春

悠々と泳げる里の空の鯉

ふたりきり膳の始末も静かなり

チューリップ散つて童話の種が尽き
玄関の靴飛び込んだままの幅

竹原市 森井菁居

虚飾無用みんな本来無一物
やぶれかぶれになると聞こえる天の声
リラックスしてもジャンプは出来難し
僕が主役で筋書の無いドラマ
成人保険こつこつ掛けて親なりし

大阪市 神夏磯道子

六月のポストに傘が欲しくなる
一人でも紅茶のうまい曲という
馴れるのが恐いトンネルの長い闇
三指にダイヤ隣に来て坐り
ニューファッション射れるものなら射って見よ

松江市 舟木与根一

国鉄の桜の儘で無人駅
団子食う都合にあわす花見かな
もの頼む台詞の間違い気が付かぬ
ふり仮名で無理やり読ます名付親
週休二日内需縮小する財布

堺市 中川滋雀

悪人になれぬサクラの散るばかり
思い出のページ閉ざした手が憎い
ファックスの余白に理由が足してある
パジャマでは会えぬ鏡の身づくろい

回覧板回しそびれた妻の留守

米子市 田中亜弥

地蔵さまの縁の花はかかされぬ
菜の花は明るい空がよく似合う
許すまでのいきさつ長い私小説
聞く耳を持たぬ二人でかわいそう
罪の無い話を買いにデパートへ

島根県 神原秀子

ふるさとの花のトンネル胸に抱き
病院へゆく街行きのバスにのり
遠廻りしてからみえて来たあかり
野あざみの色に迷えばささる棘
いやですぬ気持ばかりが先走る

鳥取県 新家完司

てふてふが信号無視でいっちゃった
自然食とは母の乳房のことだろう
うまそうな肉だがねずみ取りだろう
葦の髄にコレステロールが溜っている
春愁やなんにもせず五十一年

豊中市 田中正坊

歯一本男一びきふりまわし
廃止線知らずに咲いた桜草
六月や太郎が築く薔薇の城
父の日の父が戦記を語りつく
人並みの生活でよしフライパン

鳥取県 土橋 螢

長寿梅が咲いたわたしの誕生日

珍客にパートの妻を戻らせる

牡丹白し嘘を言うのをやめました

力一ばい涙を出してみてごらん

ほんものの馬鹿になるのは難しい

島根県 錦織 文子

こんな時いつもおんなじ唄が出る

泣きごとはよそうよ桜まつさかり

花の風女の胸に触れたがり

負けて勝つ私へ私が拍手する

芽ぶくものみな倅せな夢を持つ

大阪府 黒田 真砂

頼られる方がやせてる不公平

耳鳴りの底で秘策を練って居る

又一つ嘘を重ねた花の冷え

もう近いや未だ遠い終着駅

妊結婚

双鶴が今羽ばたいて光る風

羽曳野市 田中 隆二

辞令時期また残塁の中に居る

冗談にしては淋しいことを言う

学校が休みになってバス座れ

人聞もさくらも八分咲きがよい

むつかしい話はしない春の酒

和歌山県 寺田 裕美

青葉風女鱗を光らせる

居直った男の顔が負けている

お多福の面で修羅場をきりぬける

雑草の花は軍手でむしられる

唇の動きを見つめあう訣れ

和歌山市 内芝 登志代

好きなのになぜか燃えないすみれ草

嫁がせて猫を抱く日が多くなり

生字引の叔母に逝かれた雨の午後

そして今日生きる私にハッパかけ

古時計母娘の苦勞を見て刻む

岡山県 嘉数 兆代賀

おんな坂独りの視野に雨季つづく

四期当選嘘も上手になりました

駐在は不在電話が鳴っている

負けて勝つころへ五月の空が晴れ

思うこと多し与党もわたくしも

玉野市 小谷 仙山

仏の描く下絵に鬼の顔がある

いろはにほそれから先は子にまかす

末吉を信じて蟻の列にいる

母親か女か三面鏡に聞いて見る

大胆な男に泣きボクロがひとつ

松原市 玉置 重人

J R 味は変らぬ駅のそば
究極の夫婦空気になつてゐる

レトロブームもつと年寄り大切に
さよならのキスを地下鉄見でしまい
春や春産湯の孫が光つてゐる

神戸市 山口 美穂

ベンチの老母へ風がやさしく語りかけ
よい疲れ楽しい眠りの旅に出る
花の命のたとえを知らず今を咲く
ワイングラスの喝采うれしくいっている

明日のために睡魔と争うのはよそう

鳥取県 金川 満春

喜寿過ぎてせくなあせるなあわてゐるな

喜寿過ぎて心で笑い聞き流す

喜寿過ぎて角をたてない様にする

喜寿過ぎて人の顔色よく見える

喜寿過ぎて和の大切も心得る

米子市 石垣 花子

街の灯も道連れにして駅消える

庭の松喋っちゃならぬ話聞く

猿の老い気付かぬ振りの猿回し

その次に大事な人が一人居る

寝屋川市 宮尾 あいき

お土産は土堤に芽生えた草よもぎ
雨予報せめても一度花の下

葬送歌のリズムではなびら流れゆく
咲くもよし散るも又よしおぼろ月

大和高田市 岸 本 豊平次

試着室高い方のも着てみるとく
差し掛けてもろうて急ぐとも言えず
焚き火の輪背から背に話しかけ
立志伝二階借りから筆起し

姫路市 人見 翠 記

屋上は新入社員の新背広
七十七尚矍鑠として学徒たり（生涯大学に入学）

余生とやこれからという刻を得し

亡き夫の余命を大事に引き継がん

箕面市 坪田 紅葉

春休み我が家のリズムくるい出す

亡夫と来た温泉宿の同じ部屋

紫の花にこだわり夢をみる

無欲でもやっぱりほしい玉手箱

宝塚市 丸山 よし津

ふたりが二つ気ままな時計持つてゐる

講義よりバイトが楽し大学生

もの一つのけると見える探しもの

駅新装通勤時間少し殖え

大阪市 大塚 節子

二階から夫婦喧嘩の音がする
じゅんさいのとらえどころや椀の箸

叩かれて香の増した木の芽のせ
制服に身体を合した一年生

宇部市 平田実男

十二支で聞かれ本当の齢を言い
成金の強味歩の気持ち捨てず
檜山へ乗り替駅が混んでいる
合格の夜から遠慮のない笑い

大阪市 長谷川春蘭

アルミ貨が陽の目を浴びて募金箱
思い出が川の流れに一つある
少年倶楽部読みふけたも昔の日
街角のビルの片隅春日射し

米子市 寺沢みどり

平行線歩きつづける馬鹿な靴
湖のうねり別れた娘を想う
鉄キラキラ職人ほどの欲はなし
二人だから夜道もやがて歌になる

高槻市 竹内花代子

団地の桜で満足してる老母の足
たこ焼と一緒に焼かれる花吹雪
手作りの惣菜嬉し風邪見舞
辰之助の急死を語る風邪見舞

岸和田市 福浦勝晴

梅雨空へ生産性のない欠伸
大空の下でせこましい喧嘩

ふところが温いとみんな阿呆に見え
悪酔いが星の滴で醒めかける

和歌山市 若宮武雄

二拍子のリズムに乘れぬ生きる道
花束を受けて崩れた喜寿の顔
絢爛の牡丹匂いが物足りぬ
愛という字をいとおしむ春のペン

大阪市 柳原静香

春愁や物みな萌えて老い深し
宇野千代に笑われそうな春炬燵
花の下孤独の影が従いて来る
梅さくら城は孤独の影を持つ

堰原市 岩井本蔭棒

産院の隅で加害者かしこまり
曲芸のさすが夫婦という呼吸
物を食うほかは開かぬ黙秘権
日の丸を出すにも替否問う世相

守口市 羽原静歩

風雪がこんなお酒にしてしまい
神撰の筍たっぷり拌まれる
水無月の虹を見ている菖蒲園
ケースバイケース裏町の裏話

岡山県 小林妻子

大関の不調は持病がよくある手
青春は鉄砲弾の下で消え

雨が降る鉄板焼の椎茸さ
半世紀小皿に妻の味が沁み

出雲市 園山多賀子

疑心暗鬼二日も続く菜種梅雨

塩輪の瞳いとしい程に土の思慕

二心持たぬ桜は夜半に散り

蒲公英の不倫を運ぶ思慕の風

出雲市 小玉満江

濡れた傘私は一番後で出る

街並も変つて故郷遠くなり

ふところの手帳は知ってるしのび逢い

薬局の子も直らないアレルギー

名古屋市 越村枯梢

花時計けだるく春の陽を浴びる

疲れ果ててピエロは花の下に寝る

不精髭伸びて男の顔になる

人間の挽歌ビーポー駆け巡る

倉吉市 渡辺菩句

遠くへ行きたい地球儀まわして

地球儀みていると宇宙人は僕

あの地蔵はどんな手相をしてたかな

さくら一個ひらいてみせる春の風

東大阪市 森下愛論

アベックの歩調が狂うホテル街

仲裁の顔を立てます呑み直し

札のシワ伸ばしてタバコ一つ買い
夜桜の席取り時間外手当

唐津市 山口高明

昔公に頼んだ息子落ち零れ

社の人事女将が先に知っている

水雷で泳いだ海で魚獲る

退院へ看護婦ひとり引き抜かれ

富田林市 松本今日子

短冊に書けばやさしい筆のあと

年金はみんな歯医者が持つて行く

新しいビルに記憶をためられる

声かけた男は道をきいただけ

和歌山市 福井桂香

母の手の丸みに似てるよもぎ餅

約束をかわすと燃えなくなった指

意地っ張り愛を拒んでいる背中

家出した娘を憎むまい菜種梅雨

米子市 菅井とも子

網の目を抜けた魚は追わないで

老母の掌に今も変らぬ鮎がある

好きになつてからは無口になつて来た

教会の誓い忘れるほど生きた

出雲市 板垣夢酔

自動車のライト男女を離れさせ

ジロジロと見られて禁煙車と気付く

二人だけの秘密オームに盗まれる
貧乏人儲けも出来ず損もせず

大阪市 河井 庸 佑

まざまざと力関係見せつける

敗因を糧に万全の策を立て

誤解また誤解を生んでそれっきり

何しても逆に逆にと出る落ち目

八尾市 山 下 みつる

誤ってシャッターを切り大手柄

子育てを誤るママの虚栄心

簡単にハガキで税をもってこい

八百よろず神は宇宙で多忙なり

松原市 小 池 しげお

優先座席ともっと大きく書いて欲し

気の合う仲居がおった箸枕

痛くないことにされてる男の子

悪運が強い雨まであがつてき

川西市 松 本 ただし

純情をこの齢になり振り返る

対岸の灯はこちらより明るそう

上に上ある世を素直に生きるだけ

ジョーカーを引く指先のマニキュア

岡山市 井 上 柳五郎

一泊が限度か老いの旅疲れ

絵心のすこしハリ絵へはずむ老い

自分の菌嚙めるしあわせかみしめる
安サラー妻に内職からひけ目

寝屋川市 平 松 かすみ

白山のお守り受けて娘が帰り

ポストまで歩いただけの雨続き

どこがどう悪かったのか全快す

老眼で都合よいとこだけを見る

和泉市 西 岡 洛 醉

三年坂古都の戦さはまだ続き

くしゃみひとつ他人の噂が背を射す

南窓姦しいけど温い部屋

靴揃う妻に丸さが増えた朝

大阪府 坂 口 公 子

老人手帖掌中にして騒がしき

紅バラの棘まで愛してまいつてる

愛くるしい仕草で物にする狸

能面を売り物にしてたじろがぬ

米子市 光 井 玲 子

気を許すたびにつまづく石がある

今わたし赤いポストと仲良しだ

読み終えて月と二人になっていた

あの時は寡黙な老父が光ってた

寝屋川市 岸 野 あやめ

辞書繰ってろくな字のない女偏

鍵に鈴つけて私も年かしら

自画像のバックは淡いむらさきに
訣れ来た横顔を打つ花吹雪

河内長野市

井上喜醉

釜のメシ食べた仲でも恋は別

恥かいて居直る強さ親ゆずり

念入れる妻の化粧ヘクラクション

名城の庭へ似合わぬ販売機

唐津市

浜本久仁於

花まつり釈迦も甘茶の露天風呂

宗祖忌や一山末寺花霞

旅うれし法華太鼓の響く宿

蓑虫の眠れぬ耳へ風の私語

交野市

山本テルミ

口笛も吹こう合格通知来る

紫の恋で終った花大根

学歴へ一步踏み出すランドセル

遠い娘の想いが月と語らせる

岡山市

山本玉恵

極楽とんぼをどこまで運ぶ春の風

願い一ぱい感謝一ぱいの花手桶

弾む日も有って老母の手毬唄

一寸のんびりした友が居て旅無し

尼崎市

奥山美智子

花ことば抱いて女のひとり旅

受胎告知女の性が拒めない

化身した女と出逢う途中下車
男にも思うことあり髭を剃る

仙台市

川村映輝

心配をかけまい嘘で胃が痛む

呉越同舟売上税で一致する

掛け違ったボタンスムーズには戻らない

退屈の無い人生もつまらない

出雲市

原独仙

金鎖り雑種の恋は許されず

血が騒ぐそんな七十顔の艶

杖ついてまだ妾宅に用があり

空想と追慕と孤独の炬燵抱く

鳥取県

森山盛桜

本当は味方が欲しい鬼瓦

節穴の目玉を誰が笑えよう

小指許して女の孤独感つものる

地図にない湖だから死ぬそう

岸和田市

古野ひで

傷みもつ同士がそそぐ春の水

挽回はもう出来ませぬ古稀迎え

現実のくらし待ってる旅帰り

旅帰り余韻が続く二、三日

岸和田市

原さよ子

焼き肉の匂いも混ぜて花の寺

お参りも華やぐ桜のトンネルで

同い年何か話が弾んでる

浅はかな行為と自分に言い聞かせ

岡山県

荻野 鮫虎狼

選挙戦済めばやっぱり妻と僕

頼まれて仏も困る事があり

遍路みちやっぱり女が先に行き

有意義でない一日を大事がり

島根県

松本 はるみ

デスマスク不遜な話も聞いており

洞窟に五百羅漢のうす笑い

灯ともし頃蛙の声は生れつき

晩酌に少し理屈をつけて呑み

島根県

石田 清泉

難病もすぐに水子のせいにされ

親鸞の垢にもなれぬ日の怠惰

見も知らぬ縁者にされた地方選

腹の底見透かされてる生ま返事

出雲市

吉岡 きみえ

どさくさに忘れていました四月馬鹿

さよならは小箱に入れて明日を待つ

片便りリングの花はまだ咲かぬ

丸木橋その手にすがり渡り終え

七尾市

松高 秀峰

当選で妻子の鼻まで高くなり

底辺に生きて人情厚い人

世界一高いお米でまだ赤字
大声で内緒話をする女

米子市

青戸 田鶴

花曇りくらい話に目をそらす

花吹雪今日の出会いを大切に

時々内緒話しに友と会う

先輩に出会うといつも萎縮する

和歌山市

後藤 正子

詰問をして困らせる影法師

くたくたに疲れて眠るのも手段

躓いた私を乗せぬ縄電車

いまさらを確かめたくて川渡る

大阪市

北勝 美

反対の後はどうする売上税

間引かれる種もまいてる老いの指

白蓮に誘われ雨の寺の門

病妻と見てるテレビ桜散る

寝屋川市

柴田 英壬子

香水の土産軽くて気が利いて

ときめきがふつつ木遣り聞いている

小銭ない人の割り勘立て替える

誠実をたたえ連翹まつ盛り

大阪市

江城 修史

啄木忌運命線と対話する

かきたてて生きねばならぬ残り火よ

足跡を残せる道が父にない
掌を合わす時人間の素直なる

大阪市 古川 美津枝

ひとり静やさしいその手でいけてゆく
人生の縮図をみせる泥の海
万札を客がすかしてからくれる

芦屋市 竹中 綾珠

餅つき器でついた餅です家庭の和
恥多い余生を子等に励まされ
肖二の肖像はほ笑んで見つめてる

羽曳野市 中村 優

北方領土返さぬ笑顔どう思う
還暦で読心術が冴えてくる
ウインドに花屋が春を活けている

西宮市 西口 いわゑ

星流れ秘密一つを持て余し
ロボットに弾むハートを教えたい
春うらら恋の靴音高くなる

福岡県 横地 雅風

ひっそりと入院電波のように村
しますよりしましょう注射痛くない
手摺ある方を歩いて万が一

出雲市 園山 よし子

心掛けいや運がよかっただけのこと
渡り鳥湖畔の人情抱いて発つ

まだ少し女気六十路人見知り

米子市 茂理 高代

逢いたくて湖ばかりみつめてる
好きだから馬鹿になるほど月を見る
恋人が出来てお喋り多くなる

吹田市 茂見 よ志子

装いの街で欲望押さえかね
空晴れて今日こそ殺虫剤を撒く
豆の蔓のびて薬の手すがりつき

大阪市 中西 兼治郎

金になる肩書一つもない名刺
ゆっくりと歩きサンドイッチマン疲れ
たんぽから足跡消えて行く田植

姫路市 丁坪 サワ子

蜂の巣をつついて男が持つ自信
ポスターの顔で決める浮動票
もう一度デッカイ夢を四月馬鹿

諫早市 原田メイシユン

おとなりが売れてわが家を値踏みする
上を見て歩けば水溜りに足とられ
重大な話ジュースでは切り出せず

鳥取県 羽津川 公乃

春の野に女長閑な水鏡
夫婦茶碗洗う幸せ噛みしめる
外孫に会う汽車賃の五万円

鳥取県 松下 たつみ

減産の帰休と知らず羨まれ

自信ない演技助走でけつまずき

事ここにいたって悪人言葉選る

静岡県 渥美 弧秀

余生また青い鳥にも見捨てられ

皿洗う妻のハミング春を呼び

ロボットにもう使われる考案者

町田市 竹内 紫鏑

円高の異変を語る墓参り

時計ばかり見る上役と長い縁

まだボケぬ五分で二段詰将棋

貝塚市 行天 千代

染井吉野今年も会えた幸福よ

朝の床離れたくない十八度

衣替え形見の帯をめてみる

岡山県 岩道 博友

自信ある言葉が敵を連れて来た

先生の異動悲しむ桜散り

横断陸橋高さを見てから止めにする

和歌山市 山川 克子

頼まれもせんのにちよっかい出したがる

そのうちに敵か味方が解る筈

ごきぶりがもういいかいと台所

羽咋市 三宅 ろ亭

坊守りは鐘撞いてから朝仕度
当落のあと平和な町が荒れ

古里の森に抱かれて溶けてくる

奈良県 宮川 古都路

釣竿は上へかみへとにぎり川

ねぎと鴨遊び相手にそつはない

同窓会浮気相手に孫がある

高槻市 川島 颯云児

半世紀ピエロで生きた父の靴

晩年の眼鏡きれいに拭いておく

父の跡背負うた荷物重すぎる

茨木市 井上 森生

如何様に世は進もうと酒は酒

待っているのは玄関の灯りだけ

ともかくも酒もグルメも好き同士

西宮市 瀬尾 六郎太

好き嫌い思えば思わる心あり

その土地のにおいブンブンのど自慢

ゴルフ行勇んで行けば雪の園

芦屋市 上田 佳秋

こだわりがはつきり出てる玉子焼

下駄箱がきのうの嘘を言いたがる

近道はひとに教えぬことにする

姫路市 中塚 遊峰

おしゃべりのインコお昼に「オイシイカツ」

ひな壇へ揺り籠寄せる初節句
金貨しの店へ雇った招き猫

和歌山市

神平狂虎

旅に身を置き一片の雲となる

酒に爛れ情けにただれ瘦せる月

海はきらきら泣きに來た日も無口なり

浜田市

佐々木裕

今日の意気やはりここまでワンカップ

知っている嘘にうなづく妻に負け

ほんのりと色気仕事にもそつが無い

鳥取県

林露杖

歌は下手皿は上手に叩きます

極楽へ一人旅立つ花の雨

大動脈瘤よ俺も老人医療だよ

岸和田市

清野こう

再入院夫を涙の目で送る

突然の訃報悲しや菜種梅雨

漫画字で少女が書いたラブレター

岸和田市

芳地狸村

欲ばりが並んだ朝のパチンコ屋

核汚染明日がこわいと星の私語

ドル安のハワイで肌を焼いている

大阪市

板東倫子

立読みで財テク法に強くなる

貧乏な頃も良かった日本国

接点がなくても暮すしかない夫婦

大阪市

塩田新一郎

諦観が酔うた時だけ悟ってる

おどかすなエイズ円高売上税

胸さわぎミシンに黒い糸かかり

岡山市

二宗吟平

四国遍路

即吟の一句投じて列を追ひ

無事息災祈って写すのぞき井戸

八つの苦を離れて軽い十楽寺

兵庫県

脇田米朝

草に寝て雲雀のささやき聞いている

目くじらを立てると自分を見失う

ふんふんと聞いてりやうまくつく尾鰭

静岡市

永倉僕川

酒の酔い見栄も包んだ寄付の額

四月馬鹿噂辞令が駆け巡る

雪化粧してこそ世界一の富士

唐津市

浜本ちよ

棟梁の腕には釘も観念し

ヒーローは淋しい母を過去におく

犬の仔を拾った児のよう釣前夜

大阪市

坂本仙吉郎

二人連れ盗み撮られた露天風呂

咲きほこる桜も何れは花吹雪

真顔して聞いた話は四月馬鹿

出雲市 竹治 ちかし

言わないが空弁当にある感謝
父と娘のしぐさ妻の眼女の眼
父の手を握って知った父の齢

豊中市 奥田 満女

梅雨しとど一期一会の茶を掩れる

白水仙女医のところが挿してある

モナリザに何時も見られている生活

境港市 細木 歳栄

裏切りを知っても菩薩笑みたもう

したたかに生きて女は子に賭ける

暖冬のしわよせ蕾に小雪舞い

大阪市 渡部 さと美

ぼんぼりの妖しさ朝のあの桜

父はまだ子育てしている植木鉢

大過なく渡って足のすくむ橋

土佐市 中内 朱坊

道草の子が陸橋を占拠する

人間不信増幅させた選挙戦

糖尿病に真似の出来ない健啖家

出雲市 入澤 壽恵

願ひ事叶って神様つい忘れ

ためらわず君が代村の入学式

真正直私の言葉天然色

東大阪市 崎山 美子

年金が目当ての同居かも知れず

医者通いが仕事となった古希の春

仕事だと思えばきつい孫の守り

島根県 藤原 鈴江

アヒル達どんなに喉を競っても

上出来のセットだ雨よ濡らすなよ

まかぬ種いつしか芽を出す春の土

弘前市 斉藤 劔

売りに行く仔牛の涙拭いている

雪囲い解かれ自由の樹となりぬ

株分けて貰った方が花をつけ

高知県 曾我部 佳風

酔うた日に少し心を告げておく

折れそうな竿にふとんが干してある

混浴へ四十五キロが躊躇する

浜田市 中川 幸一

その気ではいても何分齢がとし

繋がれた鎖が憎い春の風

姫路市 大原 葉香

軍国主義でないが軍歌がとても好き

星のささやき聞える耳が今日はある

岡山県 直原 七面山

手を止めて噂話に耳を貸し

故里に来て自分を取り戻し

岸和田市 狭間 希久志

二浪など真似はできぬと子のやる気

二日酔 朝寝許さぬ計の電話

富田林市 片岡 智恵子

縛糸とけずに消える春の雪

妬く欠片のこした藍の絞り染め

出雲市 小白金 房子

暴落の野菜現場で鋤き込まれ

すらすらと詫びた孫のいい寝顔

兵庫県 藤後 実男

泥沼で糸が切れてる父の靴

帳尻を合やす年度の枕の音

大阪市 町田 達子

四月馬鹿すましやさんを担ぎたい

お土産の土鈴が民話語り出す

神戸市 山片 紀雄

年老いて楽しみの減る金利下げ

朝夕のひかりがすきなカメラアイ

豊中市 上田 登志実

飲むだけが能とはじつに羨まし

病みあがり平凡な日々有難く

羽曳野市 佐野 白水

タコ焼へ花びらが降る桜土手

宇宙遊泳映画を見て

館を出る顔宇宙遊泳して来た顔

寝屋川市 堀江 光子

耐えて咲くことも教わる花ざかり

売家の庭にさくらの花ざかり

島根県 松本文子

真ん中の釦がいつもずれている

人生の半ば矢印つけ変える

大阪市 北山 悟郎

先輩の肩に白髪が乗っている

妻の留守鍋が馬鹿にする尻を向け

姫路市 釣 遊光

数ばかり数える孫の肩たたき

気の走る私に似ない孫が出来

米子市 金山 夕子

おしゃべりの角度を変える電話口

万緑の光りに衣軽くする

富田林市 新開 千代女

ガミガミと子供のよい芽母がつむ

独り居の老いにはこたえる寒戻り

加賀市 細呂木 魯木

白髪染め今朝も増やしたうそ一つ

考古学地中の眠り妨げる

高知県 小澤 幸泉

それぞれにうわさ持ち寄る赤のれん

故郷に桜が育つ夢そだつ

自選集

大矢十郎

爽やかな目覚め女の下駄の音
嬉しさをじっくりと見る鯉轍
いい便り赤いバイクに青い簞
答案のままなり奇跡など起きず
竹槍の出番は核のあとにあり

野村太茂津

我れ勝てり地の巻はまだ終らない
しよぼくれた男雨の谷町坂をゆく
うれしくてお礼参りも花の道
歓喜して余韻いつまで花吹雪
完勝へこれから水の巻を繰る

長野文庫

大根の甘さ故郷の匂いする
首筋に一滴うけて気が変り
つまずいたまま従いて行く下り坂
断られるだろうと気弱押す釦
予定した通り意地悪宝くじ

山内静水

フリーパス倒産をさせといて
かっぱえびせんぼりぼりヒント浮ばない
うちかっておんなですよと怒らせた
何ごともなく飲み明かしたり男と女
日々刻々変化いいことばかりなし

藤井明朗

春の恋咲いておわりか花吹雪
うす味に慣れ血圧へ医者笑う
選挙戦 野党の作戦勝ちとなる
気がつけば親子の絆きれかかる
一年の無病健康へお世辞聞く

水粉千翁

ささやきの色に出にけり桃ひらく
春の雨桃一輪の行方かな
実る日へ旅路遙かに桃ひらく
桃競い咲く夢多き愁いかな
白桃の誇りを濡れて花の雨

米澤 曉明

人知れず彼岸をよける花手桶
裏切りは恋の哲学から外れ

場所かえてみても簞笥が座らない
久々の素足めだかを子とすくう
改札のリズム空気も切るパンチ

高橋 操子

娘の病氣自由の利かぬ身を責める
神様に祈る十指の行儀よく

親孝行新人類に遠い孫
喜寿なんて十年先でよいものを
山裾のさくらふる里近くなる

八木 千代

春の咳のど飴ひとつ待っている
どこまでも飴は金太でわたくしで
縄尻を持たされている狂えない
きつとわかってもらえる手紙書いて
背なの絵を光らせているのが神だ

小出 智子

拝借の本も返せず年半ば
友達とまだあんみつを食べている
弟のような電話をかけてくる
口喧嘩それも大事な人だから
見渡せば花園に花咲き誇り

月 原 宵 明

墓参り鈍行だけがとまる駅
暗算が強い駄菓子屋の老婆
セールスに春は哀しいなと思う
牡丹芍薬浪人いつか忘れられ
人生を示唆するように迷路好き

金 井 文 秋

立読みだけの人が聞いている発売日
齢という重荷毎年積み重ね
春の眠りを腰痛に覚まされる
自分史に暗いところは色を塗る
生きるのがしんどなるまで頑張るよ

藤 村 女

廻り続けて少し疲れた母の独楽
自慢話きつと淋しいお人だろ
もう逢えぬひとが残した手の温み
新緑に萌えて清水の茶摘唄
自我を捨てると心にいつも虹が立つ

正 本 水 客

打ち返す波を無駄とは思わない
ころざし遂げた男が笛を吹く
男手に育ち恐いほど美しい
眼のわるい人に少うし道を空け
ワイワイガヤガヤ セルフサーピス風に乗る

道南旅情

黒川紫香

巢作りの雀ひねもすせわしそう

児島与呂志

目を閉じればみずうみ雪が降りつづく(支笏湖)
ドーナツ湖展望台で見て飽かず(洞爺湖)

山荘の一つ一つに沸く出湯

(大沼コテージ)

幻想の夜景一番後にして

(函館)

とうきびを売るおばはんと立話

小林由多香

右往左往しているうちにいつか古い

工藤甲吉

モナリザの微笑女として見入る
自信喪失小さな風に迷わされ

夜行列車に女ひとり膝を組み

窓際に居てフルムーンプラン組む

悔いのない過去燃やす火は美しい

市川鈴魚

死後は春信ずる川が美しい
不意討ちのどうであろうと志野小鉢

橘高薫風

冬の木偶訳はともあれ泣きに来る

ポケットの中で本心にぎりしめ

芽吹く朝雀夫婦が来て起す

お早ようさん雀夫婦へ朝餉やり

ごちそうさんと屋根まで飛んで会釈する

本田恵二朗

よく喋る雀夫婦へ陽が踊る

世は暗し腸澀えた鯉のほり
虚仮の緘の鎧を着けて太刀佩いて
乱世に仏像朽ちてゆく速さ
何時の間に水子地藏と名が変わり
減びゆくものにて人も減びゆく

川柳の群像

房川素生

東野 大八

数多い柳号のなかで、素生という文字に行き当たるとき、素直に素敵だなあと思った。

詳解漢和辞典によると「素」とは——もと・はじめ・なりたち・白——といういろいろある。要するに「素」とは、何もない下地という意味になる。思うに房川素生なる川柳人は、その柳号の示すごとく、気取らず素直に、自分の気性に任せて、飄々乎として川柳人生を生きてきた。柳号と人となりがこれほどすき間もなく身についている例も珍らしい。

「素生と誰からつけて貰ったのか、自分自身が付けたのか知らないが、その柳号がびつたりするような父だった」(素生「二男寿雄記」)
素生は明治33年8月18日大阪市生れ。本名房川善之助。神戸市長田区で生菓子製造販売

を自営。昭和10年転業して兵庫区御崎通りで子供服装雑貨の小売商を営み、昭和20年3月戦災にて再び生菓子製造販売業に戻る。

生菓子とは和菓子のことで、餅菓子・蒸菓子・棹物(羊羹類)・干菓子をいい、茶の風味第一に奉仕する高級菓子のことである。梶元紋太も甘源堂という生菓子製造販売だから、紋太・素生が稼業が同業とは味のある話だ。二人の生菓子はお茶より川柳に奉仕した。

川柳は大正10年ごろ神戸新聞柳壇の投句にはじまり、昭和4年4月紋太を軸に同志18人が「ふあうすと川柳社」を結成。その創立同人から一筋に同誌とともに生きてきた。昭和35年10月句集「道」を発売。その序文を大山竹二が力をこめて書いている。(以下抄録)

「才気というも愚かな、思いつきの句を作っていた私は

水車小屋戸が開いていて一人いる

を作った素生さんに始めて瞠目したのであった。はじめてというほど、それほど素生さんの川柳は地味であった。真実、粘り、滋味、重厚と、今でこそ素生川柳は真に高く評価されているが、むかしからパツと燃え立つ流行作家ではなかった。その生活が終始一貫たくましく地についているのと同様である。(略)

素生川柳の最たるものは、感傷を抑えた生活の反省にある。素生個人の生活の興味にあるのではなく、人間のすぐれた理智がうったえる川柳である。すなわち房川素生を知ると知らぬを問わず、一句全体にこもる思念から「生きてゆく」尊さをつかがい知ることが出来る川柳である。それだけに句に張ったものがある。語感から来る張りでなく現実立脚した生き生きとした「生きてゆく」緊張である。私らが川柳の道にある愉しさとは、これがほんとうのたのしさではないかと思う。川柳は教えるものではないが、教えられるものがある。素生川柳に生活の智慧を受ける者は私一人ではないと思う。

友達へした顔おもうことのうち 素生」

竹二のこの序文は、綿々として長い。如何に彼が素生川柳に傾倒していたかがわかる。

筆者は昭和40年前後の「ふあうすと」の素生巻頭言を熱心に愛読した。内心（これが生素子屋のおやじの書く文章だろうか）と思うとかえって畏敬の念が強まるのであった。

「私は川柳を穿ちだと考えているのだが、穿ちといえは、三要素の一つとして古くさく受けとられるかも知れない。それが革新川柳にも相当多いのである。従って私は伝統川柳を主張するための穿ちを言う気はない。

主観句、客観句という、主観なしでは穿ちは無いかもしれないが、抽象的語句ばかりをならべた所謂主観句からは川柳を感じかねる私である。川柳はやっぱり客観的表現を基本として行くべきではないかと思えてくる。わかる句、他人にも一応はわかる。そうしたところからわかるということが称えられるのではないだろうか。自分の主観は主観として、ありのままに詠む、その判断は相手にまかす解決なり見解なりを自らやらないでも、相手が自分と同じような感銘を持ってくれるよう十七字にする、それが作句の醍醐味ではないか。

むかし前田幻二が、紋太の句には絶叫がな

いといった。味わえる言葉である。高い立場から見ているようなエリート根性、人間的にも年齢的にもまだまだ未来を持ちながら悟っているような言葉。こう批判するといった浅薄な社会観。こんなのは私としては頂きかねる。凡人のこころ、姿、そうした立場の庶民の十七字が川柳ではないであらうか（No.410）

このほか難解性を論じた「川柳性」というもの（No.414）の出色の論調があるが、長文のため再録できないのが残念である。

素生は六十歳台で妻と死別し、三人の男の子も誰も手許にはいない。その独り住居の孤独さのなかで、誰にも見とられずにあつてく心筋梗塞の発作でその生涯を閉じたのである。時に昭和44年7月29日午後6時、享年七〇。法名は房光院善岳浄徳素生居士。

昭和44年11月号の「ふあうすと」は「房川素生追悼号」である。巻頭から22頁にわたる故人を偲ぶ三十人の柳友たちの心からなる追悼文で埋められている。この中で筆者の印象に残ったのは小池鯉生（浦和）の一文である。

「素生さんは句の巧者ではないのが何よりも好きだった。不器用な拙句をぶつつけられる相手を失ったことが、今一番淋しい。ひとり子同士の独り言の交換の中に、全人抄が寂

しいことを言い続けてこられた。明鏡府に名があつて全人抄に名が見えぬ人が多過ぎる。

（略）全人抄と名付けられた紋太師の志に副えぬ恨み、竹二君から受け継いだ全人抄は、新人抄ではないはずとあきらめ切れず逝った素生さんの心の内を代筆しても、別に故人を傷つけることにはなるまいと思う。」

この全人抄といえは昭和40年頃のこの欄には「楳文紋太代・房川素生選」の大きな文字が載っていた。筆者は橋本文也に会った折

「何故こんなことを書かねばならぬのか」と詰問したことがあるが、相手は素然とした貌で何もこれには答えてくれなかった。

「素生さんは『句の話やたらとことんするぜ』と作品と選句については話好きでありわれわれとの議論も辞さない人であった。その『句の話やたら』というところに、句以外の雑事に対する素生さんと、作家素生さんの姿がよくでていると感じた」（安西まきる悼文）病む紋太にかり惜しむべきは素生の雑務が多すぎた。ここに死を招いた素生の同情すべき一面があつたように思われる。

子の着く日弾むでもなく菊をきり 素生

★次回は「中島生々庵」

俳風柳多留廿六篇研究 (三十二)

石田成佳・大屋六郎・八木敬一
鈴木 黄・石田晋一・南 得二
小野真孝・本多正範・多田 光

故岡田 甫

526 おめかけの妹扇子の式本さし

石田成 封建時代武士階級では、跡継ぎを絶やさないために多くの妾をかこい、川柳では御と敬称のつくのは大名や旗本の妾をさし、また妾ともいわれた。

本句、妾の兄ならば妹の威光によりとりたてられて、俄武士となり両刀を腰にたばさむところですが、妾の妹であるから刀の二本差しとはならず、その替りに扇子でも二本差すことであらうといった句。

妹ゆへ生レもつかぬ二本さし

明六様3

八木 賛。兄弟なら刀の二本差し。

南 扇子の二本差しは踊り子(芸子)です。

おとり子の堅いが扇二本さし

傍五23

本のおとり子ハ扇子を式本さし

安五智4

本多 扇子の二本差しは南氏説。お妾の素性を暗示した句と解している。

多多 私も南さん引用の傍五の句から踊り子と想っていた。安五の句もあるので、いよいよというところ。姉妹が踊り子に出なければならぬような素性の出たというのであろう。ただ礎解にもあるように、これが兄か弟なら刀を二本差す身分にしてやれるのという嘆きがあるか。

岡田 小生はそこまで考えず。本多氏程度に考えていました。

527 近付の方へ欠出す俄雨

石田成 外出の途中で突然俄雨に降られ、とにかく手近な知りあいへ傘を借りるためにかけ込もうとしたところ。

あての有ル所までぬれるにわかあめ

にわか雨こハめつらしき御出なり

明七梅2

多田 賛。岡田 同。

安一松3

528 白い手て簾をかゝる中の町

石田成 吉原仲の町の引手茶屋には、入口に縁台をならべ軒に青簾が吊るされていた。

本句は、おいらんが夕方から新造禿を引き連れ見せ先きの縁台に浅く腰をかけて客待ちをする。それを枕草子の逸話と八朔の紋日をつまえた中の町張店の句作。

八木〓賛。「八朔」が必要か、ちよつと疑問。本多〓八木説賛。八朔には関係ないでしょう。多田〓同右。

岡田〓八朔に関係なし。夕暮近くなつたが灯を点すには早すぎるため。

529 人面ヲ乱して帰る花の雨

石田成〓花見に出掛けたところ雨に降られ、せっかく一所懸命化粧した顔も雨にぬれてくずれ、その上更にくさつて顔をしかめて戻る花見帰りの姿をよんだもの。

花の雨寝すにぬつたをくやしがり

二五五

八木〓「行雁列を乱す時は伏兵あり」というような言葉がある。従つて、「人面を乱して帰る」と読む。

石田〓礎賛。八木氏の言われる意は「列を乱す」で、雨が降り出したので人がバラバラ走り出す意であるが、それならば川柳にあて字が多いといえども「人列」または「人連」と記すのが普通、やはり礎に「言う」ように「人面」

の化粧がはげるとか、しかめつづらの意でないのではないか。

南〓写真版全集「人面ヲ」は「人面ヲ」になつています。従つて、訓みは八木説賛「ひとづら」であり、「行雁列を乱す」の「雁列」を「人面」ともじつたもの。句意は、礎賛。

多田〓賛。岡田〓同。

530 六月ハ銘あり五月無銘売り

石田成〓「六月」は、大山参詣の際、郷の義弘という銘の有る木刀を不動尊へ納める。「五月」は、菖蒲刀で、五月五日の男児の初節句に飾つた木刀。

六月と五月それに銘有りとな銘を對比させた謎解きの句。

大屋〓賛。

よし広ハ冬ハ打タない刀ナカチ

二三六

よしひろは武家へハむかぬ大刀を打

天五仁一

多田〓賛。岡田〓同。

531 五月ハ拵へ六月ハつづみ売り

石田成〓前句同様、五月は菖蒲刀、六月は納太刀。つづみは、刀の鞘などを取つて身ばか

りであること。

句意は、同じ木刀であっても菖蒲刀は柄、鐔などを付け金銀箔などで飾りを施したものを売るが、納太刀は鞘など一切つけず刀身だけを売る。

義広の店が菖蒲刀と納太刀を商つていたことをよんだ句作でしょう。

石田晋〓賛。但し礎講にいうこの二句で、義広店で二つともあつたといふとは單純に言えないのではないか。連続する月にそれぞれ異なつた刀が出るおもしろさに注目しているものと考えたい。

多田〓同右。対照的いい方であらう。

岡田〓現代ごく稀にある「棒屋」の類で、その時季に応じ同一店で両方を作つたものと思ひます。

川柳塔柳箋

一冊 二百 円

送料 二百四十 円



黒川紫香選

高槻市 河瀬芳子

狐から電話「コンコン」鳴いている

竹原市 信本博子

自分でも御し難いもの棲まわせて
寄せ書きにライバルの墨黒ぐろと
裁かれているのだろうか寒すぎる
寡婦だから猶ブライドを掲げ持つ
葬列で世間話をする他人

長岡京市 木本如洲

ワープロに意地張っている硯箱

熊本市 永田俊子

春シヨールむかし話を軽く聞く
ここからはそろばん妥協の珠はじく
簡単な答えが欲しい赤電話
福の豆踏んで退院かみしめる
炎天のバスは空っぱばかり行く

名古屋市 藤井高子

正面ばかり見つめて足をすくわれる

富山市 舟渡杏花

ミニスカートが軽^{かろ}く初夏の絵をよぎる
夜が明けて今日の白紙が置いてある
別れからドラマの頁書きかえる
鍵かけた話を盗んでゆく兎

鼻の骨抜かれまあるくなつてゆく
ポイントの髭をダルマへ描き忘れ
使い古しの小技を見抜く帯の芯

潮どきはこころあたりかコンバクト
そして朝おとことおんな繰り返す

佐賀県 寺 中 三枝子

ゆうすげの咲く頃わたし旅に出る

切り絵の中で好きな彩着て澄ましましよ

それからのおんな迷路を抜け切れぬ

警察犬の鼻にもお墨付きが出る

虫食べて咲いても花は花なのに

羽曳野市 吉 川 寿 美

鍵穴からプライベートシーが洩れていた

すんなりと別れ上手な男下駄

ひとり暮しがほとほと寂しい目玉焼

耳うらで噂話のシンフォニー

祝傘寿蛙声氏へ

すこやかに米寿へ運ぶ足からし

今治市 野 村 京 子

女への挽歌ルージュを変えて見る

欲言わねば案外食べて行けるもの

春おぼろ恋路へ通う影法師

春風の海でかもめに許す恋

平和日本花談義する日向ほこ

八尾市 高 杉 千 歩

いちにちの彩に迷って青葉闇

葉桜のきずのないのを二、三枚

迎え傘一つ余分にさみだれる

矢印の通りに来れば弾む声
他人事と思うていたのに役がくる

熊本県 大 川 幸 子

謎一ツ解かないままの夢を持つ

二人を結ぶ不思議な色の糸

共用のカードにしようとか謎がくる

喜びを今日の鏡に塗りこめる

ぼんばりにゆれる花の下のお酒

岡山県 矢 内 寿 恵 子

労働歌唄えば汗が光り出す

亡母の地図たどれば女の道しるべ

雲来り雲去り記憶掘りかえす

一日を振り廻される四月バカ

まだ夢があるから腰を伸ばします

京都市 木 村 たけし

さようならが言えぬ別れは手を握る

無人駅淋しい風とすれ違ふ

豆を煮るその味付けに亡母が棲む

五十払い街路樹芽吹く御堂筋

よく廻る水車溢れて桜日和

高槻市 笠 嶋 恵 美 子

妥協した順に椿の首が落ち

さくらさくらこの世の旅の思い出に

父の樹の下に母の木わたしの木

春が来て空き家の風鈴はずされる

檜山へ待合室は賑わえり

静岡市 片 平 静 代

熊本県 高 野 宵 草

晴れの日だ髪整えて出掛けよう

長病みへ空気の抜けた乳房です

愛の文字波に消された日の哀れ

青年の主張涙が止らない

主婦の座を下りて多彩になった趣味

京都市 松 川 芳 子

花冷えへ桜の私語も聞いてやり

一芸に秀いで世間にうとく居る

女系家族父の居場所が狭くなる

警察の前はよそ見をせず歩く

落書きが上手天才かも知れぬ

西宮市 紀 市 郁 栄

花の咲くのをよそに入院くりかえし

四人ではうるさい個室では淋し

句は創るいつまでの命かは知らず

万一の場合を妻にはなしする

思い出はみな川柳のことばかり

西宮市 秋 元 てる

シクラメン最後の花は台所

日がな一日小鳥の声と寝た切りで

朝詣り休んだ分もお賽銭

ただ一人に尾行を許す恋の風

バーゲンのように肩書き寄せ集め

空箱を積んだ虚勢を風揺する
粉薬のんだら蜘蛛の目と出合い

席ひとつ空けて話した程の恋

診察を待って一冊読みあげる

左手でよかったと怪我なぐさめる

熊本市 宇 野 昭 代

れんげ草小さな恋の首かざり

黙々と食事只今冷戦中

娘の悲鳴毛虫げんな顔を上げ

勸奨が二の足を踏む知恵袋

十階に住んでも天女にはなれず

久留米市 鶴 久 百万両

ジャガタラお春に逢えそう雨の平戸訪う

日本海を庭と愛した父も老ゆ

欠落の指魔鉋のニュースきく

帝国ホテルの味を盗んできたグルメ

62年4月5日母逝く

亡母の絵と花の褥に眠りたや

和歌山市 桜 井 千 秀

言い通すつもりでスーツ着て出掛け

不摂生思い知らされ風邪の床

ホヤホヤの知恵は迂闊に使えない

お名指しとあらば一差し舞うもよし

何はともあれ今日の終りとして日記

熊本市 黒田 緑

手加減でマリオネットの腰が抜け
明けてから寝るまでも要るセレモニー
思い出はかすんでいてもなつかしい
筈は今夜も伸びる菜種梅雨
エイズなど知らずに逝ったしあわせよ

広島市 流 奈美子

責任を果たし男のよい眠り
停年がゆとりの振子もて余し
衣紋掛けよ亡母の着物は温いだろ
一日の余白を埋める風呂が湧く
満天を妻と仰いで露天風呂

吹田市 井上 照子

川岸の桜の下で手弁当
切り札が腹にあるのでゆとりもつ
薬局で昨日と同じ顔に合う
放たれてかわしい道の稚魚の列
疑っていつか般若の面になる

大阪市 上田 柳 影

引導鐘亀もようやく春を知り
さあと言う時に間にあう距離に住み
嫁支度出来て淋しくなってくる
当選をしたと割引券が届く

東予市 小山 悠 泉

SLの煙が詩になる旅情

嫁ぐ娘の簞笥へ見栄もつめてやり
好きな道選べと父の物わかり
はすの葉の露をおどらす風がある

草津市 久保 和友

中国へ旅

剥がされた傷跡南京城は雨
深圳駅で出会う毛沢東號の煙
慰問袋上海だよりの頃の母
黄色い埃と同じシャツの色

寝屋川市 宮崎 菜月

早春の愛語にやさし乙女椿
どの岸も子らの姿で水ぬるむ
泥棒とバツタリ逢うた春の宵
放置車の下までもぐる青嵐

静岡市 澤田 きん

露草の可憐な花がなぜか好き
孫の絵が思いの儘におどってる
老いの身へ忙しく回る日の早さ
聞き上手話の区切りうまくとり

貝塚市 池田 寿美子

ガラス越し本音はそつと聞いておく
隙のある人を混えて花の宴
一人でも組板の音は欠かせない

道成寺にて

花吹雪清姫の影追うている

尼崎市 山田保藏

竹原市 岩本笑子

宿がえの車に猫も乗っている
先日の女が知らぬ顔をする

黄に染めて菜の花畑に陽が落ちる
裏返しても千円は千円

うす味にならされ辛抱五十年

しゃべり過ぎて円の中心に来てしまひ

小雪舞う寒そな顔の寒椿

ジュース飲み干して今日は暑かった

守口市 森川まさお

尼崎市 丹下玉子

咲き切つて白木蓮のうすい染み

芽柳揺れて哀しき振り落とす

草餅のあとで胃薬のむつもり

老木に新芽小鳥があそびくる

玩具のように犬が番する茶店なり

ラッパ水仙法事に合わせて咲いてくれ

お身拭い仏の耳の長いこと

雨に濡れ逢いに来た娘にほだされる

熊本市 北川一進

尼崎市 森安夢之助

料理用と妻が書いてる酒の瓶

富士山へ登つても漫画離さない

抱き方も上手に孫がもう二人

湯の宿の歴史を知っている廊下

ぜい肉がついて貫禄出来上り

裏町で満足をして帰る猫

親に似たこの子も軒一人前

毛虫の都合ばかり聞いておられない

滋賀県 安田志津

尼崎市 鈴木良征

冗談も出るようになり春もゆく

鈍なくせに車の免許持っている

誇るものないけど家族の温い風

駄句詠んで庶民の刃かわせるか（中曽根総理）

制服に二度目の勤めねぎらわれ

ひたすらに走り続けてきたうさぎ

五分咲きの娘に愛想よい春の風

三面鏡の中でポーズをとる親父

西宮市 松本一郎

兵庫県 東浦砥代

貯えに地価はだんだん遠い距離

夢だけが一人歩きの女の絵

子の建てた家に畳の部屋がない

泣き声が聞こえるように乳が張り

ライバルの結婚式に招かれる

五線紙に小さな春を呼んでみる

控え目で一本筋は通す人

父の背に馬鹿バカバカと書いた春

大阪市 山田 妙子

制服が少女を大人に変えました

台風一過みたいに入試済みました

不発弾私も一つ持ってます

ニイハオと子供はすぐに友になる(中国の旅にて)

唐津市 相葉 あき

海水と淡水のはざままで生きている

パレットで色合せして今日を塗る

薄明り見えて金脈動き出す

何時からか会釈する人出来た道

守口市 結城 君子

遠廻りしてもさくらの道をゆく

あかさたな辞書が軽蔑しています

国鉄が消えて七つの名を覚え

締切日せまり一人になりたがる

静岡市 安本 孝平

祖父の座でじつと我慢の活火山

同権の牙をこっそり妻が研ぐ

年金の暮しで鰯好きになり

野放図な芝居上手な老夫婦

島根県 菅田 かつ子

水仙は静か桜は姦しい

伸びのびと育てたわが子に見おろされ

かんじんな事は聴いてた老母の耳

こればかりの酒であなたとリラックス

鳥取県 田村 きみ子

りんとした眉に男気覗かせる

セーラー服内ポケットに春をつめ

ポケットの小銭ちやらちやら笑ってる

鬼が笑うと眉が可愛くなりました

鳥取県 乾 隆風

洗濯機まわせば垢がういて来る

ポケットを許して深い仲になる

尼さんが親子どんぶり食べている

ちようちようはおちよば口やなあと思っ

岡山県 清水 悠貴女

タンポポの綿毛少女の日に戻る

まだまだの風向き本音喋れない

欲少し捨てると肩が軽くなる

夕映えに今日のドラマのページ閉す

京都市 森川 春子

大よりは小粒苺を奨められ

人事異動脇掛椅子が与えられ

酒ビール迷う夫は憎めない

姑の大正生まれは嫁思い

鳥取県 土橋 はるお

車椅子おりて波打際に立つ

チャチャチャ唄って窓を開けている

職安の隅で出会った恋でした

すみません花に鉢を入れましょう

八尾市 驚 見 章

松葉杖とれて市場へついて来る
カーテンを替えて四月の風緑
川の字に寝て孫の手と握り合い
煙草の手止めて思案の顔になる

倉敷市 田 辺 灸 六

偽った自分の影を踏んでみる
雪解けの席から呉越舟を出す
旅行して老人会も未だ若い
老いの愚痴なだめるように春の風

旭川市 朝 倉 大 柏

毒舌の毒で初心に戻れそう
人形と話が出来て一人っ子
風花の音を聞いている關病記
ユーモアに乗らぬ一人が気にかかり

岡山県 富 坂 志 重

しあわせをじっと見ている古時計
春が来て汚れの目立つこたつ掛
脇役の苦勞を見せぬ母の顔
春風と一緒にほほばるにぎりめし

岡山県 千 原 理 恵

ふり返る軌跡へ父の靴の音
嘘のない足音たしか夫婦る
ある別れ風が峠で向きを変え
しのび泣く木蔭がほしい母子草

大阪市 井 上 白 峰

肩書きが路傍の石になり切れず
助太刀に抜いた刀が錆びている
出る杭を打った自分の椅子がない
見栄張った自分を笑う影法師

尼崎市 吉 永 伊 三 郎

空想の虹を渡って車椅子
大安日見栄のかたまりあちこちに
春風が男の疵を撫でて行く
恋文を焼いて想いが切れるなら

尼崎市 的 場 十 四 郎

仔猫にも優しくわかる膝のうえ
自転車も妻の重さに耐えている
決心ができて電話に手をかける
空の旅帽子が目立つハネムーン

尼崎市 木 下 義 嗣

ぬくもりを部屋に残して離納め
居ねむりも得意の一つ春炬燵
うまい汁吸えるポストへ天下り
花吹雪被って花見踊り出し

尼崎市 尾 宮 弘 治

ポスターがやたら目につく交叉点
タイガースの帽子で孫と若返り
白髪梳く母に苦勞の陰がない
父に見え母にも見える園児の絵

十和田市 阿部 進

娘の帰り待つ母とうと肘枕

程々にほめて叱つて子を育て

傷心を優しく妻が抱いてくれ

栄転が親子の生活切り離し

鳥取県 乾 喜与志

馬鹿デッカイ盥の箍をしめている

許すと書いてコーヒーを飲みによく

桜散る中で椿のポトリ落ち

蝶蝶のべーぜせわしい花盛り

熊本県 岩 切 康 子

夫婦愛とりとめもなく笑い合い

しふしふが受話器の奥で読み取られ

免許証手にして人生また開け

専門語使われ病氣気にかかる

堺市 桜 沢 あかり

瑠璃色の空をステンドグラスから

花冷えの里にも丸い月が出る

本家より少し大きな鯉織

大阪市 亀 井 円 女

郷愁にカチューシャ唄う亡母が居る

受験戦争かなしいまでに絵馬が売れ

かえるの子はやっぱりかえるの小屋を立て

佐賀市 古 川 一 徳

包装紙旅の匂いを語る幸

そわそわを自動ドアに決意する
出発点妻は元気に旗を振る

鳥取県 太 田 幸 枝

大漁旗妻の笑顔が見えてくる

もみじの手開いて結ぶ芸が出来

アルコール男の舌を軽くする

静岡市 中 川 み つ

手箒の先からまる冬の虫

曾孫にも好かれ年金底をつき

一步二歩下がって嫁との距離を置く

竹原市 石 原 淑 子

菜種梅雨 コロコロ笑う友来り

旅に出る愛の泉が涸れそうで

俵せを詰めた袋を持ち歩く

吹田市 栗 谷 春 子

ピアノ弾く幼女の指はもうおとな

思う様にいかぬと歯まで痛み出し

萌える芽の先のひと色さがす筆

鳥取県 津 村 八重子

落人の秘話語りつく過疎の村

よくはずむ毬が潮時見失う

今日の日よさよなら明日へ手を洗う

和歌山市 田 中 輝 子

疑問符が解けて眠れぬままの夜

洗い浚い峠を越して来て言える

雑巾がけ怠った日へ友が来る

堺市 山本半錢

子の便りくり返し読む飯場の灯
夫とはぼっくり寺へよう行かん
不調法ですと女はいける口

青森県 富士トキ

終い風呂孫の匂いがしています
一度では分つてもらえぬ津軽弁
片言の孫と一日日向ぼこ

海南省 三宅保

不器用に生きて苦になる日曜日
冗談の通じぬ友をひとり持つ
つながりが点線になる倦怠期

静岡市 杉山やす

進学の孫が笑顔を見せに来る
味噌汁に足りる程度の貝拾う
大胆に脱いで我が家のありがたさ

静岡市 西村千代

また転び猫が見ていたお昼時
サングラス取れば目許の可愛い娘
終い風呂ゆっくり窓の月眺め

寝屋川市 太田藍子

髭落し優しい顔になった父
マニキュアのとがった爪でつまみ食い
おでこさわってもう大丈夫と母の勘

高槻市 津田スミ子

不機嫌な日だから料理念を入れ
手も足も力が入る歯科の椅子
偏差値を知らずにはずむランドセル

大阪市 島路太郎

プロポーズされたことない花が散る
天窓にふわふわふわり白い雲
わたしらは下戸の組です花に酔う

広島県 田村新造

帯ぼんと叩いて着付け出来あがり
白魚が喉くすぐったおどり食い
傷心で聞く終便の発車ベル

静岡市 大石たき

咲いてくれ水もやります肥えもやる
相槌を打つと味方の顔になる
ミニ菜園四季の料理を楽しませ

広島県 藤解静風

意識して痛いところへ触れたがる
こんなにも哀れな河豚のおどけ顔
天の配剤のようになった夫婦

鳥取県 鈴木ふみ子

野の果てにおいでと虹は橋をかけ
子雀をお喋りにする春の風
お湯がわき静かな村の風かわる

豊中市 三宅つえ子

向う岸渡ってみたい車椅子

雨だれの何時までつづく独り言

花びらとポストで眠っている手紙

広島県 森 川 抜 智

国会中継はやき漫才見る如し

絵の道具持って歩けば画家のよう

ぶっきらぼうな手紙を寄越す友が居り

豊中市 小 林 一 夫

とりあえず主役を撮っているカメラ

湯豆腐の白きも君の肌に似る

何か用とは淋しき返事なり

藤井寺市 高 田 美代子

部屋中の視線を浴びている遅刻

時折はゆさぶりにくる子がひとり

両方ですかたん聞いた待ち合せ

黒石市 相 馬 英 三

温室を飛び出し教師の愛を知る

SLを見納めに行く縄電車

今日もまた地球を汚すカタツムリ

島根県 小田川 智重子

とりあえず住んだ借家に二十年

淋しくはないかと旅の子の電話

いい事がありそう続く青信号

高槻市 芦 田 静 江

絶筆になりし言葉は雲の峰

秘書室の美人謀反を考える

朝がえりの三毛を迎える一人部屋

和歌山市 森 茜

ひるの風呂優越感が浮いている

言い切ってしまった悔いをもてあます

花冷えて私ひとりの部屋ごもり

和歌山市 青 枝 鉄 治

近付きの印にしては高い品

人声に影が分かれる月明かり

胃検診結果を聞いて食進む

河内長野市 大 西 文 次

坐らせてくれぬが優先席はある

若く見える三面鏡に買い替える

連休の洗濯柿の枝も借り

奈良県 和 田 萬 里

風景に見とれてスピード遅くなり

ぼんやりといつか見たよな風景画

冗談じゃないわと顔が赤くなり

羽曳野市 麻 野 幽 玄

新妻の日課は朝の鏡から

すき焼しか出来ない男の市場籠

十階の病室高所恐怖症

京都市 小 林 英 子

里がえり部屋いっぱい孫を追う

抱きよせる春の私語には棘がない

飽食と言われて鳩は悲しかろ

大阪市 吐田純子

娘の声に距離忘れさすKDD

夢見たさ枕の下におく写真

海峡へ女の涙おいてくる

箕面市 椎江清芳

病人の小言お粥の塩加減

流し台蛭静かに欠伸する

虎の子のへそ繰り猫が咥え出す

岡山県 松本元江

旅に出て笑い話を二つ三つ

疑心暗鬼風はうつろに吹き抜ける

水を下さい私の花が枯れてゆく

檀原市 西本保夫

つい本音洩らすはやはり妻の方

まじめれば本になりそう書きなぐる

胸上げの中にライバルの手を感じず

河内長野市 植村崑代

鹿のフン世間のことなど知らぬ鹿

窓あつて朝日飛び込む窓がない

娘の頭なでてばかりは出来ぬ親

岡山市 中嶋千恵子

ピカピカの一年生の孫の夢

言葉尻すこし気になる乱れ髪

ぬるま湯のくらしに馴れて四季がない

堺市 宮本かりん

違い棚未練な過去がのっている

いましめを記した父の古手紙

パパのシャツちよつかい出している干場

鳥取県 黒田くに子

許すなら今だよ月がかくれたよ

こっそりと飲んだお酒がしゃべり出し

舌足らずの心はきつと温からう

愛媛県 八塚三五島

花好きに花の油断を狙われる

古本屋おやじなかなか学があり

ペン先で考えているアンケート

岸和田市 三輪通彦

均等法お茶は自分で注いで飲み

若竹が天を突き刺すように伸び

不況風パートの首がまず切られ

熊本市 鶴田謹爾

春四月悲喜交々の入試かな

ゼスチュアーだけで中味のない話

孫たちへ祝い忙し春四月

兵庫県 森脇和子

せめてもと水子地蔵に絵日傘を

手向水亡夫へたつぷり彼岸入り

フライパン一つで足りる妻の留守

唐津市 福島紀一

お騒がせ売上税のゆきどころ
探鳥に武装の如くカメラ負い
廃止線レールの下に過去を埋め

弘前市 真喜内 實

減反の話題バス停ふくれだし
剪定の鋏の音が踊り出す

きまぐれな風に言い分だつてある

佐賀市 江口 万亀子

女傑一代男のような指になる

御馳走のように煮ている注射針

いたずらっ子外科医といつも仲がよい

茨木市 堀 良江

ひたすらに走りつづけた過去言わず

寒さからやと解かれる受験の子

新入りの先ずやらされる一気飲み

静岡市 浅子 まつゑ

逢いたいという追伸を抱きしめる

老人会前のちよほ髭よく喋る

恋をして女化粧が長すぎる

鳥取県 西川 和子

誉め言葉に酔って自分を見失う

旅の夜に一句を残す箸袋

あの夜の夢が気になる羽根布団

米子市 小村 てい子

湖が光って辛くなる訣れ

薬を積む息子に嫁はまだ来ない
振り返る景色が変る街に佇つ

新発田市 上鈴木 春枝

春の陽へカーテンの色軽くする

頼まれてハイと言うとく選挙戦

切り札へ夫の肩書き言うてみる

八尾市 松下 蕉露

栄転はしたけど杜宅狭くなる

砂時計置いて娘の電話呼ぶ

事故現場桜吹雪の吹き止まず

大阪市 宮下 とし

病癒えかなたこなたへ鈴振りに

我が実務炊事洗濯子守唄

禁煙室衝立て一つで出来上り

島根県 喜島 ノブ

外泊でホームシックはもう治り(病舎住い)

信仰があるから人を信じ切る

自分から病氣つくって悩む人

福岡市 吉川 一郎

陰口を補聴器までが聞きたがり

造船の灯り夜景が瘦せていく

息抜きのお話に軽い嘘が入る

熊本県 立道 善太郎

六十九背負いきれない希望もち

幕切れは善人のまま眠りたい

荒海に松の並木も背を向け（能登の旅より）

兵庫県 奥野テル

雑草の我慢踏まれたままで咲き

子の呉れた手下げ袋と春の旅

たとう紙はちぎれてからも亡母匂う

豊中市 玉井房子

えんどうが出廻れば母の顔

焼芋屋四月の声はわらび餅

デートの日雨も音楽奏でてる

鳥取市 山田草人

借金は棚上げにしてカナ杜名

土と語る母は昔なまりのまま

土いろのとかけ陽に居て彩盗む

静岡市 三浦つね

迂闊にも割った茶碗を接いでみる

寡婦となる釘を柩に打つ別れ

丁寧な言葉で責めて来る女

岡山県 平田たけよ

花ぐもり嫁の荷物が通りすぎ

野仏に山吹もたれてひそと咲き

母の自慢の手料理木の芽あえ

豊中市 一瀬福一

きき耳をたてれば雨後の竹は伸び

あなどった煎じ薬が効いた風邪

主役とは違う演技に別な汗

老いの足一步一步に心して

サービスも目盛り狂わぬ程度まで

武者人形贈って嬉しい孫の夢

岡山県 後安江山

美代ちゃんが入学式にママを連れ

新社員粹なネクタイ固い顔

一番に来て末の席が何時もの座

大阪府 榎本落児

零の数かぞえて話の種にする

孫が来て妻うれしがりせわしがり

逆立ちで歩いてみたい通り抜け

藤井寺市 福元みのる

横顔が高倉健に似た上司

横顔に嘘でござると書いてある

爪赤く染めた手でとぐ米の味

泉佐野市 真崎浪速子

白酒へ送り迎えるお客

シャッターが初孫も加えた雛祭り

青春を泣くも笑うも甲子園

鳴門市 八木芳水

下積み能耐えた男の物分り

油断してよいのは妻の膝の上

話呑みこんでから箸よく動く

尼崎市 佐藤美代子

赤札に手の届かない私の背
可能性を信じて土をこね直す
天の川今年は鳥で渡ります

静岡市 青柳金吾

臍繰りの僅かな金利又下がる
孫昼寝俺も疲れた古希の春
孫が来てリズムが狂う老夫婦

唐津市 野田旭恒

子は父を真似て培う芸の極
吹き流し郷里の便り聞いている

岡山県 土居ひでの

決心がついたらおいでと言ってくれ
マイペース父さんの靴帰る音

大阪市 横山為子

横顔に過去を重ねる夢二の絵
冗談と本気鉢合う四月馬鹿

和泉市 中川楓

真っ先に草が小さい芽を見せる
赤ちゃんが占領してるママの胸

岡山県 江口有一朗

老いの目に古里の山美しく
子の声が雲にとけこむ夕まぐれ

静岡市 久保きぬ

新人類男も負けず美を競う
喉もとでぐーと堪える技を持ち

富田林市 大澤三四子
歴史秘め暮色に浮かぶ興福寺
あこがれの故国はきびしい円高で

青森県 波ただお

湿布した左の肩を庇ってる

ランドセルの群が歩いている新学期

大阪市 松岡久留美

肩もんだ指母の温もり思い出し
飲み仲間妻に上手な世辞を言い

寝屋川市 井上すみれ

背を丸め愛を縫い込む母の針
自惚がいつしか戻れぬけもの道

泉佐野市 大工静子

草拔けばミミズ日干しのままにいる
菊に香を委ね線香燦るだけ

岡山県 福原悦子

湖に童話が一つ生きている
灯を消しておぼろ月夜が春を待つ

大阪市 神保拓生

ギヤルの顔ばかり浮く露天風呂
飲みすぎて環状線を二度廻り

和歌山市 田中隆積

阪神地区を想う

適当にロマン求めた四年間
園田で哲学者に会いました

唐津市 原野常善

良き友を悪友と呼ぶ深い仲
魚市のセリが弾んでいる夜明け

大阪市 富岡温子

レントゲン結果待つ間の胃のつかえ
故郷のチームへ拍子あつくする

田辺市 染道佳明

母の部屋すなわち女の部屋である
面を打つ何時しか妻の貌になる

出雲市 久谷まこと

跳び上がる蛙に風がゆれて来る
甘やかし通してくれぬ冷えた椅子

寝屋川市 立床晴風

飴ねぶる方も一癖ある風情
交渉へ胃薬用意して出掛け

島根県 岩田三和

花に酒夫婦五組の楽しそう
いい人か親に確認してもらう

岡山県 池田半仙

木蓮が微笑み庭に春を告げ
物干しが家族構成みな喋る

大阪市 喜多佐津乃

道案内兼ねて花見に誘われる
一人身の友また今日も留守らしい

岡山県 後安ふさえ

健康な家庭の茶の間の灯があかい
雑魚は雑魚なりに持つてゐる人生観

豊中市 辻川慶子

くるくると絵日傘遠い日もどる
手を休め小鳥の声をしばし聞く

山口県 高崎雀声

肥料にもならぬ公約まきちらし
名園の川は水道よりひかれ

西宮市 上嶋ふさ子

父の背に海の匂いが染みている
ハンガーも薄着になって軽くなる

桜井市 前川美恵子

ぼんやりと頭を空にしたい日も
安眠の本を積んどく枕元

今治市 渡邊伊津志

残酷な童話を子供読みたがり
振り向かぬ子供の背を寂しがり

大阪市 堀口欣一

鈍行の楽しさ春の湖西線
幸福だなアと感じる春の朝

西宮市 松尾志保

指笛がうまくて牧童手綱とる
霧笛がひびく港でめぐり逢う

泉南市 坂根流水

大地から大空からも春の声

桜花散る前ちよつと媚を見せ

唐津市 入江 崑久夫

老齡ですとカルテ眺めて医者と言

あの時の出会い伴侶の人となり
ポケットに気になる彼の走り書き

鳥取県 木下 美葉

吹く風のまにに動かぬ風見鶏

鳥取県 山根 八重

女子高のポケットおしやれ一つ増え

人間のエゴが大地に値をつける
つまずけばどこかで笑う声がする

大阪府 今西 静子

葉桜の風に出会った日の孤独

呉市 蔵重 成人

雑兵の失敗辞表など知らず

ご先祖へ感謝の日々の夫婦独楽
山墓へ花見かねての老夫婦

八尾市 椎尾 公子

ホステスが美人で酔うてみたくなる

米子市 足立 由美子

心まで寒のもどりに冷えました
ほどほどの倅せだから感謝でき

ぼんやりと酒はやめよと考える
満足といかぬが仕事自負をもち

和歌山県 山田 久子

春来り職場の花が入れ替る

大阪府 川原 章久

花吹雪昼寝の猫も目を覚ます

うつむいて咲くれんぎょうへ蟻の列
お大事にと刷られたレシート薬代

吹田市 山田 里子

花はよし誘う友よし酒の味

出雲市 高橋 きよし

隙間から覗けばうれしい笑い声

夜の蝶ネオンに負けず派手な顔
太っ腹の人が気にしている噂

愛媛県 石手 武

宮仕え終えた日からの無為無策

京都市 山脇 正之

新薬よどこまで寿命延ばす気か

円満な解決家裁を出る笑顔
半生は子供と生きる母子寮

岡山県 伏見 すみれ

静岡市 柳沢 たま

地ぞさんと喋れば胸の風がなぎ
湖を渡る鐘の余韻に亡母憶う

鳥取県 久野 野草

素直さを買われて貰う孫の嫁
古日記繰り返し読み思ひ出す

弘前市 小寺 ギホウ

宵宮にガス燈のにおい遠くなり
喜びの隣の席に母が居る

兵庫県

円 増 貞 子

ふる里の香りとびこむわらびの荷
旅帰り孫ぶらさがる腕を出し

ロサンゼルス市

加 藤 明 美

雪化粧の庭に鮮やか寒椿

銀婚の夫婦に新婚あてられる

島根県

船 津 重 信

花冷えてわたしの恋が咲かぬる

そのまんま憎まれ口までわしに似る

静岡県

丹 羽 定 次

庭に出て春が来たよと草で知り

古里へ帰ってみれば緑なし

八戸市

島 田 昭 治

辞世の句と試みてみても駄句ばかり

なるほどと膝叩く句が今に見ろ

大阪市

平 井 露 芳

色別で心一つのJR

値も味もよいと夕餉の京豆腐

吹田市

西 岡 豊

反り返る孫にてこずるおばあちゃん

大胆なポーズに揺れて目がいきる

岡山県

杉 本 伊 久 栄

一日一善出来る心のゆとり持ち

蒔かぬ種生えぬと花の種を播き

岡山県

戸 田 種 子

塾通い効果上がらず親の見栄

金持ちになればなる程出しおしめ

東大阪市

大 平 太 一 郎

老木は花一輪に身を削り

人の癖とかく言う人それが癖

高知市

北 川 竹 萌

小冊子手に信仰を売り歩く

メモに書く符号わたしだけが知る

静岡市

谷 紀 代 志

飲む程に仲間意識が頭出し

寒風に鼻水ばかり威勢よし

福岡県

中 垣 米 之

花冷えに心の飢えを笑われる

運転席七夕の如し守り札

藤井寺市

菊 地 繁 男

狛犬に孫またがらせ老いの暇

賽銭へ踏まれた十円成仏さす

益田市

里 本 た かし

逆らえばてんとう虫が羽根を見せ

ブランクの道に稲の穂が垂れる

静岡市

滝 花 喜 平

喫煙はこれが最後と今日も吸い

女でも男でもよし初の孫

奈良市 井上大

風花に涙で会った孤児の父
最後の捕鯨最後の国鉄別れ雪

呉市 岡田寿美礼

老いの坂母を偲んで身だしなみ
生花は色とりどりの春の顔

島根県 今川三津江

地下鉄の漫才淋しくなった寄席
空缶を拾って帰る一年生

川西市 田中喜俊

甲子園春夏我が家宿になり
老いの母健康といわれ不服がち

和歌山県 北山凡太

仏様花に酔うてる彼岸墓地
笑顔だけ見せて見せない胸のうち

和歌山県 三谷周三

うっかりと見せてはつばをよく抑え
ぎっしりとつめた土産ですねてくる

新宮市 船越正

見上げれば頬にひとひら花吹雪
故郷は兼業農家梅雨に入り

島根県 児玉幸子

春ひらく小川で目高見つたり
花咲いて吐く息みんなピンク色

大阪府 桜井莊次

過去を背にお遍路さんの重い足
使わない筈の釦がとれている

岡山県 三村美恵子

親睦会一つ覚えが芸をさす
嫁った娘がいたわってくれ肩がこる

奈良県 山村有佳

ベルがなる楽しい事であるように
ローカル線別れの曲が雪と舞う

奈良市 米田恭昌

車座の新人類に花吹雪

大阪市 渡部トキワ

夜桜が人を誘って酔わせます
惜しまれて音がしそうな桜散る

吹田市 木原絹

あこがれの角帽被った四月馬鹿

豊中市 額田明吉

もの思いつまずく石に醒まされる

富田林市 浦田トシエ

へそくりを子や孫に出し笑顔みる

富田林市 奥井花子

62年度

路郎賞

川柳塔賞

候補作品中間発表

自 62年1月号

至 62年4月号

路郎賞候補作品

正本水客

冬の庭石は主役を取りもどす
いける口だけしか出席して居らず
若宮 武雄

阿呆にはなれず口出ししたくなり
辻 白溪子

宗教家ぶって動かぬ冬の蠅
柿花紀美女
炬燵の上にみかんがいつもある夫婦
榎谷 寿馬

菊活けて母は小さく小さく舞う
小島 蘭幸
木枯しに風の姿を見てしまふ
林 瑞枝

酒の燭これが平和というものか
北 勝美
地下街に吹いているのは死んだ風
堀江 芳子

どうしようもなく黒人の歯が白し
新家 完司

広辞苑しらべた余裕黙ってる
田中 叶
西口いわゑ

野村 太茂津

姉妹盃交わす仏の日
満腹感まるで知らない百合の花
死ぬ時は何か奇蹟をおこしたや
ブロック塀我が物顔の猫通る
宮西 弥生
柴田英壬子
安藤寿美子
島崎富志子

纏れたとこ切つたら敵が折れてくる

柴田英壬子

逃げ道は開いておこうかくれ宿
編針で愛を繋いでゆくように
粗品と書いて粗品が持つて行く
西村 早苗
松原 寿子
土居 耕花

年金生活行書あたりで暮さんか
冗談に近いところで生きている
何くわぬ顔で私を誤魔化そう
遠山 可住
西出 楓葉
中川 滋雀

間の抜けたせりふだんだん恐くなる
西山 幸

拗ねているそやかてあんた好きやねん
脇田 米朝

たかが女と口が裂けても言えませぬ
谷垣 史好

末席で人を見る眼が出来てくる
牛尾 緑良

黒川 紫香

ひよつとこの裏はあなたに見せられぬ
核心を突いてくるから外される
長男が生まれた日から死を思う
留守ごとの鍋がなかなか煮えてこぬ
波多野五楽庵
稲葉 冬葉
田中 叶
福本 英子

数の子のわずかばかりと春の酒
雪うさぎ二つ作れば雪がやむ
正直に言えば話がこじれだし
かたつむりが高塀越えるのは徒勞
高杉 鬼遊
安藤寿美子
内芝登志代

掃除婦のおばさんたちの飲む煙草
ボクシングジムに通っている出前
返事が二つあるので深爪して仕舞う
とつきの時も折目正しい人である
丸山よし津
田中 叶
谷垣 史好
小池しげお

奥山美智子

夫婦喧嘩の合間に子供叱られて
ほっかほかの話題を伴ってくる風よ

稲田 豊作

掃除機に吸わすきのうの夢のあと

林 瑞枝

毒舌家少うし耳が遠くなり

佐藤 藤子

湯豆腐が好きと淋しいことを言う

小島 蘭幸

かき餅を焼くカンテキを買ってくる

西出 楓楽

つつがなく夫婦茶碗が並べられ

松川 杜的

落ちこぼれどんぐりそのまま根をおろし

平松かすみ

けちくさい亀にかまわず兎寝る

小砂 白汀

万灯をつけても闇がまだ消せぬ

安藤寿美子

子の便りそれから聞かぬタンポポよ

林 荒介

昂ぶりの余白に残り火描きなぐる

土居 耕花

塗り剥けて隠しごとなない夫婦箸

岩田 美代

雑音は気にせず赤いタイ締める

玉置 重人

一日のノルマに北の風ばかり

春城武庫坊

ふところに数珠ありまっすぐに歩く

津守 柳伸

いくたびか修羅場くぐってきた無口

小島 蘭幸

フライパン嘘を上手に裏返す

田中 正坊

嘉数兆代賀

春が来る頃には智慧の輪とけるだろ

政岡日枝子

明日がどうあろうと爪を切っておく

小野 克枝

百歳になつても杉はまだ子供

新家 完司

妻の留守きつちり時計廻らない

小池しげお

朝めしをいっぱい食べて来て負ける

小島 蘭幸

点滴がみんな涙になつて出る

波多野五楽庵

白旗は風の無い日に揚げるもの

片上 明水

ブルトレを殺人劇でなつかしみ

竹内 紫鏑

風の音松の林に力あり

渡辺さと美

混浴の吃水線を心得る

土居 耕花

遠会釈もみじ一枚舞い落ちる

林 はつ絵

行き先は知らぬが船を描きつづけ

田中 亜弥

どうしようもなく黒人の歯が白し

田中 叶

掃き寄せた破片がボクの顔になる

森山 盛桜

暗号で株の損など書く手帳

岸野あやめ

宗達が見せる豪快足の裏

尼 緑之助

盲人の下着きちんと替えさされ

堀江 正朗

逃げ込める部屋が温いので困る

神夏磯道子

あまだれを庇の手紙だと思つ

八木 千代

川柳塔賞候補作品

谷垣史好

逆立ちをする約束をしてしまふ

大西 文次

どうとんでみても大地に帰る足

宇野 昭代

小指親指みな恵まれて指鳴らす

黒住美穂子

喪の家を包むは霧の思いやり

笠嶋恵美子

デジタルに過去も未来もない数字

黒田 緑

生き伸びて少し気だるいカンナ屑

田辺 炎六

夕立に目より濡れ出す鬼瓦

一瀬 福一

病院のスリッパ薄し初永

小林 一夫

栄光の汗は拭おうともしない

朝倉 大柏

気に入らぬ箸もあろうに箸枕

舟渡 杏花

鉛筆をまとめて削る花あかり

高杉 千歩

歯車の合わぬ日花の種を蒔く

清水悠貴女

春つららこれが一張羅で御座候

桜井 千秀

失いしものしみじみと冬の底

河瀬 芳子

昔話をつなぎ合せて呆けはじめ

鈴木ふみ子

妻の留守ひとりばっちの音で暮れ

田辺 炎六

今日も暮れ何をしたやら仕舞風呂

和田 萬里

うぐいすに頼みましようか相聞歌

信本 博子

十二月八日を背負つて齡をとり

野村 静雄

義理チョコとことわらなくてもわかつてる

井上 照子

均等法男の敵が増えただけ

清水 康恵

ボランテア一と日を母と呼ばれたり

矢内 寿恵子

あんばんが好きと言うので気を許す

結城 君子

ベートーベンもショパンも分らぬままに老け

伏見すみれ

花らつきようおんなは世話をやきたがる

笠嶋恵美子

逆立ちをする約束をしてしまふ

大西 文次

小出 智子

お祭りが済んで他人に戻る街

山田 宝保

欲一つ足すとはじける紙袋

宇野 昭代

蠅の斧振り上げたまま枯れる

榎本 路児

足並を揃えて不安消している

宮本かりん

ひとつのこととことんやって路地住まい

桜井 千秀

長生きを疎まれている秋の蠅

信本 博子

釣銭を握る片手は世辞になれ

立床 晴風

妻が背を流すと雪になるだろう

真喜内 實

自尊心自分がバラであることに

栗谷 春子

逆立ちをする約束をしてしまふ

大西 文次

実年となつて尻尾を意識する

藤井 高子

初恋のひとほのぼのと古希となる

松本 一郎

どの子にも聞かせた祖母の子守歌

澤田 きん

おとつとわたしが掘つた落し穴

赤木 和子

廃線の駅にぼつんとある電話

斉藤 劬

やき男ノックアウトがしたくなる

脇田 米朝

実年となつて尻尾を意識する

藤井 高子

許すことばかりになれた座りだこ

吉川 寿美

リンペンが糖尿病をやむ平和

鈴木 良征

元朝は基本どおり歯をみがく

高野 宵草

おとつとわたしが掘つた落し穴

赤木 和子

子育ての途中でねじを巻き直す

前山美恵子

三猿のくらしの中で惚けてます

太田 幸枝

カタカナの中で日本語が乱れ

高野 宵草

ひよつとこの面で流れの中にいる

朝倉 大柏

手のかかる主人ですよと嬉しそつ

一瀬 福一

おみくじの替りに買った宝くじ

加藤 明美

酔い醒めてさてあんたはんどこの人

上田 柳影

歯が抜けて明るい顔になりました

土橋はるお

手品師をスロービデオで見てやろう

矢倉 五月

板尾 岳人

南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏に吸いこまれ

小田川智重子

いくさ果ててお子様ランチに旗が立つ

藤井 高子

波に消えるほどの私の足跡

永田 俊子

てっぺんで一つ年取る木守柿

小山 悠泉

逆立ちをする約束をしてしまふ

大西 文次

かぞえ唄うたい終ると冬になる

門脇 晶子

ぐれてやろうか濁り水に身を沈め

赤木 和子

許すことばかりになれた坐りだこ

吉川 寿美

鉛筆をまとめて削る花あかり

高杉 千歩

ちえの輪が解けぬ女の細い指

宇野 昭代

間の抜けたジョークが秋の坂にある

木本 如洲

少女の瞳に童話の森は風ばかり

野村 京子

何事も人におくれて爪を噛む

黒住美穂子

喪の家を包むは霧の思いやり

笠原恵美子

妻の背を流すと雪になるだろう

真喜内 實

— 同人 吟 —

秀句鑑賞

— 前月号から —

市川 鈴 魚

おとぼけが上手になった指人形

佐藤 藤 子

とはけ上手と耳にするが下五の指人形が面白い。齡の動きが正直に表現する指。知名人も指にされてはおしまいである。

引越しの荷へ神機を縛り付け

土居 耕 花

お逢いしたことがない方なので判らないが引越しの荷物の中で一杜の神棚を縛りつけて行く出雲が伊勢が知らないが、引越し風景だ。愛国心よいがポリリウムさげなさい

高杉 鬼 遊

日の丸を打ち振って大会反対をやるのもいいが、近隣の迷惑も少しは考えたいと思う。心の中では賛成だが、ポリリウムを下げてやりましょう。

死んでやるものか保険の好きな妻

小野 克 枝

保険殺人で放映された事件でテレビは一時

騒がれたが、一見平和な夫婦の仲も心の中では死んでやるものかと思いがちです。

ひら飯名もおんなも温いものを持ち

河内 月 子

男女均等法成立で温いものが無くなる女の乳房。枯れ葉いろが合いそうだが、日本人は平仮名がお好きらしい。懐古調かも知れない。新聞で包んで貰いやすくする

仁部 四 郎

心遣いの姿が見えてうれしい。白紙に包んだり包装紙にすると、お礼の言い方も考えなければならぬが、新聞紙とは整う方も佳い。生きる事のきびしさを知る土踏ます

嘉数 兆代賀

土踏ますの止めはよいと思う。なまけている訳ではないが、そして又余分なものでもない土踏ますは、健康判定所ですから。

自惚れがあるから女に近寄れる

稲田 豊 作

女の方が自惚れているのでなくて、男の自惚れはしつべ返しによく会うのです。紺屋高尾のような女は今はいない、御用心。

露天風呂二人の他に誰もこず

柳 樂 鶴 丸

美しい月の影を乱して二人、悪友がかくれて見る岩の陰でも燃え切っている二人ですから、旅のかき捨て見逃がしてやりましょう。結び目があるからもめている夫婦

牛 尾 緑 良

下五は夫婦ですが二人の方がよいと思う。夫婦は結ばれた仲で吃水線の争いや、もめ事

はないでしよう。四十年無妻の私には迷いが多い。

美しい夜にたくて船を出す

神 平 狂 虎

月がきれいで回り道した古い歌を思い出している。もう明治生れには船も出せない。船も少し小さい舟の方がよいでしよう。

政治不信樁ひとつが落ちてくる

時 末 一 灯

この花は他の花ではないけない。姿のまま、そして落ちる時音がする椿、びったりだと思ふ。政治は国民のものであることを忘れたくない。

年取った方の易者に観て貰う

曾我部 佳 風

迷いの末に行きついた易者の灯なのに、人間は優しい自分の父親に似た年よりの易者に観てもらふ。これが人間の本音かもしれない。

柴転の椅子にもあつた隠し針

野 中 御 前

手を振ってくれたのがみみな味方ではなかった。花束の中に嫉心の針がかくされていた。これが人の生活かもしれない。

何もない父にやつぱりついてくる

小 林 妻 子

正直に生きることしか知らない父だが、最後は父に手を添えてくる。金よりも尊いものが父のことばの中にあつたのである。

愛染帖

橘高薫風選

笠岡市 木山 遠二
老夫婦お花見猫も来て座り
飛行機で見た列島の鯉幟
米子市 八木 千代
おろかにもあとの祭りの酒買いに
人形の帽子に風を入れてやる
和歌山市 西山 幸
悪い噂も生きた証にしておこう
貧しさへ吊る金銀のネックレス
寝屋川市 堀江 光子
鈴つけにきた男をば抜擢し
別れの宴別れのことは口にせず
羽曳野市 麻野 幽玄
老いらくの恋雨だれをじつと聞き
勝った笑顔も負けた涙も胸を打ち
吹田市 後藤 火鳥
九十七老母の部屋中桜にす
春の夜をお隣誘い小さきバー
大阪市 小出 智子
出不精に雨もいとしいものうち
アイロンを毎日かけているところ

青森市 工藤 甲吉
光明真言にそむいて核ふやす
よく肥えた海鞘に一杯はしくなる
米子市 林 荒介
剥落のほとけと語る仏たち
切り株の芽吹くながいお隣り
倉吉市 奥谷 弘朗
小咄を出す潮時を心得る
激励を妻にされると泣けてくる
米子市 茂理 高代
旅プラン橋山行きの外国船
傷もないのに風船のしぼむ冬
乱気流少年の愛なのでしょう
今生の見納めだった花吹雪
弘前市 波多野 五楽庵
桜の下で居合抜きでもやったらか
座ぶとんをひっくりかえして母帰る
寝屋川市 江口 度
よい顔になって顕微鏡を見る
守口市 森川 まさお
贅沢な花見は朝をただ一人
来ぬ人待つ筋交いの橋の跡
マルサ来いうちの女房にや髭がある
豊中市 田中正坊
三代を生きた古木に芽吹く春
新時代いまだ来らず啄木忌
豊中市 辻川 慶子
還暦へ兎のダンス踊りましよ
何もせず桜が咲いてそして散り
大阪市 今西 静子

ちぐはぐの記憶に笑う老い二人
白柏子の幻想しばし花吹雪
松原市 小池 しげお
つらかった癌もきれいに焼けている
嫉妬心チュリップの花赤すぎる
岡山市 川端 柳子
神さまはご存知かしらとふと思う
もっともつと大事なものは目にみえぬ
西宮市 松本 一郎
ままごとの姉妹にいつか別れの日
段梯子鳴らして娘反抗期
羽曳野市 中村 優
四季のない造花労わる春の風
またしても総理と父の株下がる
和歌山市 後藤 正子
どれ位眠ったことが花が散る
島根県 小砂 白汀
あと一枚脱げばビナスより光る
岡山県 土居 耕花
足の指わしも触れたい人がある
唐津市 山口 高明
暴君でいるのは客が居る間
唐津市 入江 喜久夫
口喧嘩姑の木魚の音で消え
唐津市 浜本 治幸
睡眠薬飲んで寝ようか酒飲もか
茨木市 井上 森生
片言の司祭が説いた真の愛
和歌山市 田中 隆積
浪花節聞いてた兄もアメリカで
今治市 渡辺 伊津志

息を抜くことを教える丸い石

寝屋川市 岸 野 あやめ
住き人の手へと祈って焼く土鈴

富田林市 藤 田 泰 子
燃え切らぬ春の落葉も私も

高槻市 笠 嶋 恵美子
残照へ残りの夢をかき集め

益田市 里 本 たかし
棲み馴れてしだれ桜が多くなり

今治市 矢 野 佳 雲
本尊が好きで堪らぬ仁王さま

弘前市 真喜内 實
七色の虹飛び越せば計に出逢う

高知県 曾我部 裕
保安帽外して母でございます

宝塚市 丸 山 よし津
咲き満ちて亡びの美学見せる花

兵庫県 脇 田 米 朝
総入歯マーボ豆腐に見舞われる

岡山県 川 元 いさむ
新幹線で行けるとこなら栄転か

唐津市 田 口 虹 汀
本堂のしだれ桜と一人酒

唐津市 浜 本 義 美
世を嘆く凡人いつか世に染まり

和歌山市 山 口 三千子
甘い水飲んででは悔む事ばかり

島根県 榊 原 秀 子
仏前へ明るい花を選つてあげ

吹田市 栗 谷 春 子
随筆一冊みかんの色の灯の下で

和歌山市 神 平 狂 虎
ピストルもペンも欲しいと思つた夜

平田市 久 家 代仕男
六階でおたまじゃくしを飼っている

流山市 神 田 治
キャンパスの五月発泡性の恋

岡山県 清 水 悠貴女
露天風呂軽いジョークを置いてくる

鳥取県 新 家 完 司
臨時停車お花畑のまんなかで

今治市 月 原 宵 明
タレントの端くれというサングラス

羽曳野市 吉 川 寿 美
ふつふつと滾るものあり帯の芯

西宮市 奥 田 みつ子
夢二描くおんな見つめている女

米子市 林 瑞 枝
哀しみの影が水面下でゆれる

大阪市 渡 部 さと美
品位ある桜ですこしおそく咲く

泉南市 中 井 慧 梢
老大へおまえの愛をかえせない

海西市 三 宅 保
顕微鏡持つて律儀に生きすぎる

鳥取県 ささき や え
薬しべにのつて宇宙へいつてくる

藤井寺市 福 元 稔
金が金生むさはさりながら

守口市 結 城 君 子
短命に神の配慮か蝶の彩

豊中市 奥 田 満 女

暴走族昼は可愛い美少年

名古屋市 藤 井 高 子
ロボットが配る依怙蟲質はしない

橋本市 岸 本 木 魚
出張にやがてロボット行けそつだ

羽咋市 三 宅 ろ 亭
言外の言を信する子らあつて

茨木市 堀 良 江
売上税反対の声黄砂降る

鳥取県 土 橋 螢
馬鹿チヨンのカメラがこっち向いている

岡山県 灰 原 泰 子
人一人許す一羽の鳩を飼う

岡山県 池 田 半 仙
ループ橋ライトが描いてゆく景色

大阪市 橋 元 美 恵
先生の大きなマスク仕事中

徳島県 松 本 元 江
会者定離逢わぬままなる別れとは

名古屋 越 村 枯 梢
一握の米の温みよ頭陀袋

高槻市 河 瀬 芳 子
都心にも嗚呼檜山をみつけたり

岡山県 矢 内 寿恵子
父ははの記憶必死の中国語

岸和田市 三 輪 通 彦
多情仏心妻には無理な鬼の役

米子市 小 西 雄 々
ニューリーディングが落ちるまで待つ

大阪市 井 上 白 峰
二枚舌グラスと盃飲みわける

富田林市 片岡 智恵子
椿落つ恋のとりこの裁きなり

愛してるエープリルフルに言わずとも
宮尾 あいき

のびきったゴム一日の長さかな
島根県 松本文子

妥協案をのんで一人になりにゆく
尼崎市 春城 年代

ハイミスの酒は男を切り刻む
唐津市 久保 正敏

投資家の顔が並んだ父兄席
唐津市 仁部 四郎

落ちこばれさせずなんとか縄電車
寝屋川市 平松 かすみ

喝采の双手五月の街が好き
和泉市 西岡 洛醉

山の辺を歩き疲れて三輪の駅
大阪市 北 勝美

風鈴のニュースに合った温かさ
河内長野市 植村 茂代

固定した椅子にすわるとでるあくび
米子市 青戸 田鶴

包丁いっぽん憂いをみじん切りにする
和歌山市 松原 寿子

意地の垣丸く崩れる花水
川西市 松本 ただし

陽をはじく女系家族の物干し場
愛媛県 石手 武

売上税よそに桜が咲き揃う
高石市 浅野 房子

岡山県 山本 玉恵

千羽鶴の最後の一羽がもの申す

私へ詫び状そっと書いている
米子市 光井 玲子

根つからのおしやべり好きなシクラメン
米子市 金山 夕子

見解の違いと軍配をあげぬ
豊中市 上田 登志実

七十の手習いやつと一人立ち
東大阪市 太平 太一郎

眼の手術してから顔のしわが見え
富田林市 浦田 トシエ

係わり合い無いお話が立派すぎ
鳥取県 松下 たつみ

スタートに親子で並ぶ英会話
大阪市 山田 妙子

枯芝生踏まれるところから緑
岡山市 井上 柳五郎

煽てにもすんなり乗って来た驕り
和歌山市 桜井 千秀

ひよどりやがやつと餌付の仲間入り
大阪市 亀井 円女

ラーメンを啜り田圃を休ませる
弘前市 斎藤 晶

歯車を一つずらして妥協する
貝塚市 行天 千代

難しいことは知らないから笑う
和歌山市 福本 英子

真白いレースで包む青い胸
堺市 山本 半銭

団栗の知恵で山坂七転び
倉敷市 田辺 炎六

東大阪市 中尾 しんじ
京に住み古きと共に明け暮れぬ

へそくりで夫を誘うフルムーン
新発田市 上鈴木 春枝

八起目の男に演技などいらぬ
兵庫県 東浦 砥代

盛り塩を通り抜ければ姫御殿
吹田市 西岡 豊

咲く花に一言お世辞垣根越し
箕面市 椎江 清芳

桜咲き親類の寄る十年祭
芦屋市 竹中 綾珠

猿の檻ゆさぶる猿は我に似る
広島県 藤解 静風

投句先 千560
* 豊中市中桜塚三丁目13-15
橘高薫風宛(ハガキに3句)

NHK川柳募集

課題「橋」 選者 森中恵美子

締切 6月10日

(ハガキに三句以内)

投句先

大阪市東区馬場町3-43

NHK大阪放送局「ふれあいラ

ジオセンター」川柳係

発表

6月28日(日)ラジオ第一放送

午前11時5分から

—水煙抄—

秀句鑑賞

—前月号から—

久保正敏

紫香先生が選ばれた句が秀句でない筈はありません。今回は菲才な私にその中から鑑賞句を選べとの仰せに、私なりに感銘し好ましく思う句を選ばせて頂きました。
夕暮れに咲く花月と契りしか

寺中 三枝子

豊かな感性と女ならではの繊細な心配りでロマン溢れる作句技法は素晴らしいと思います。
鱗一枚とれて残花へとときめきぬ

高杉 千歩

絵の才能も素晴らしいと仄聞しておりますが川柳の才能も秀抜です。個展が成功裡に済んではっとされた心境かと察しますが、見事な表現に感銘しました。

雪しきり誰も無口な冬の駅

野村 京子

平板な表現ですが、吹雪く日の駅の情景が目に見えるようです。肌寒ささえ感じます。
軋む戸の癖に合わせる嫁の知恵

永田 俊子
姑さんと仲良く暮らせる利巧な嫁さんが想像され心あたたまる句です。
手にすればさしたることなし鬼の首

桜井 千秋

句姿よりも正直句意にひかれました。

口鼻を消す仁丹を妻がくれ

小山 悠泉

奥さんの行き届いた配慮は浮気防止の牽制球かとも思われ微笑ましい限りです。
ピカンのような顔が鏡に微笑する

江口 万亀子

少しも自分を卑下しない明るい人柄が句に溢れています。目の不自由なご主人の手を曳いて句会を欠かされない熱心さには頭が下がります。
炭礦の終る日赤い旗を焼く

田村 新造

赤旗即炭礦と思われた時代がありました。今では操業している炭礦も数少なくなりましたが、まだ当時のイメージが残っていて赤い旗を焼くという表現で炭礦の終焉と失業者の哀愁が感じられます。

アベックを見てみぬふりの葱坊主

原野 常善

泥棒を黙って見る葱坊主という句がありました。役が立たない葱坊主より見えてみぬふりの葱坊主の方がはるかに夢があるように思います。

バレンタインのカモにされてる女たち

松本 聖子

バレンタインの功罪は別にして商魂に踊らされてる同性の姿を川柳の目で鋭く抉っています。男性が詠んだ場合はそれ程評価は出来なかつたでしょう。

死ぬまでを柱目の下駄で履き通す

福島 紀一

終生真面目に生き抜く人の姿が強調されている反面、融通の効かなさも想像される句です。

合格も不合格にも金がいり

三輪 通彦

おっしゃる通りです。むしろ不合格の方が余計に金が必要ではないでしょうか。

男嫌いの牙城に迫る桜桃忌

鶴久 百万両

太宰治は生前女性に人気があったと聞いております。三十九歳の時、山崎富栄という女性と玉川上水で入水自殺したのが昭和二十三年六月十九日で、その日を桜桃忌と名づけて故人をしのび毎年会が催されています。

男嫌いの牙城と桜桃忌のコントラストが素晴らしいと思います。

守りごときめてるけれど守れない

二宮 正彦

守りごとは自分で決めた事でもきちんと守りましょう。それが一番大切なことだと思います。川柳も作ることに決めてがんばりましょう。

耳かきが夫婦の仲をやいている

久野 野草

苗香のむ

小出智子選

あれは夢眠りにおちるまでのこと

和歌山 後藤 正子

木の芽和え愛し足りないことばかり

大阪 西出 楓楽

額縁はあるが表彰状がない

お近づきのしるしに内輪ばなしする
胃ぐすりのほろ苦いのはかなしみか

和歌山 西山 幸

事ひとつ終えてゆっくり粥を煮る

寝屋川 稲葉 冬葉

雑巾をきつく絞っているくらし

歩道橋おんなに愛が消えている
つき詰めていけばだんだん食い違い

堺 宮本かりん

水すましまだ行く先が見つからず

寝屋川 太田 藍子

一つだけ自信があつて春うらら

和歌山 木本 文子

夜桜へ鬼も蛇も来て酔い痴れる

和歌山 中川 楓

花吹雪浴びてたんば背伸びする

八尾 高杉 千歩

文通の彼を美男と思ひこみ
仕残しを笑うてくれる嫁をまつ
十年を遺影しずかに笑みつけ
組板を新しくして若返る名古屋 藤井 高子
和歌山 湯浅 由梨

ゆっくりと大人になれと無理を言う

岡山 川端 柳子

春うららひと夜酒豪になるもよし

富田林 松本今日子

あの星は亡母かわたしについてくる

広島 流 奈美子

腹立てた妻またしても何か食べ

寝屋川 岸野あやめ

孫の掌の温みが自我を消してゆく

姫路 丁坪サワ子

猜疑心ばかり先立つ春がすみ

大阪 山田 妙子

気疲れの客がまだいる応接間

堺 高橋千万子

くせ書きの一枚心なごませる

藤井寺 楠 昭子

春愁や因習破れないままに

和歌山 堀畑 靖子

人一人許して広き父の海

岡山 灰原 泰子

路線バスみんな桜の方を向き

和歌山 坂部紀久子

開かずの扉女の胸の奥底に

和歌山 山田 久子

セールスへ少うし貸した耳を悔い

新発田 上鈴木春枝

あの坂が登り切れないてん手まり

竹原 信本 博子

雨が降る芋でも焼いてみましようか

大阪 堀 いくの

夢にもう見なくなつたら十年経ち

芦屋 竹中 綾珠

趣味一つ広げて母を脱皮する

鳥取 田村きみ子

欠点のないのがとても気に障る

大阪 津守 柳伸

白鳥になる夢があるアヒルの子

和歌山 小川百合子

仲間から仲間楽しくなる波紋

西宮 奥田みつ子

直りかけの風邪をどなたにあげようか

和歌山 桜井 千秀

喝采に隠れる妻の泣きばくろ

兵庫 東浦 砥代

風みどり歯止めの杭は抜いておく

和歌山 松原 寿子

ぎりぎりの線で妥協をする耳よ

佐賀 寺中三枝子

病室が明るい少しホツとする

和歌山 田中 輝子

橋高薫風 VS 時実新子

われは月の子 顔上げよ



時・昭和62年1月31日

所・神戸サンセット通り「磯吉」

新子 こんにちは。

薫風 あ、お久しぶりで。お互いに句が下手になった。そう思いませんか。

新子 なかなか、この「愛染」を拝見するととてもそうは思えませんよ。私もそう拙くなつたと自分では思っていないわけ。

薫風 作品でも過程（プロセス）がありますから、その時その時に作ってるのが一番良いというふうになりたいのですが、そうはいきません。

新子 あのね、私の周りにどれ程の人が、「人の世や嗚呼にはじまる広辞苑」をね。あの句私も講演に引用させてもらってます。

薫風 田辺聖子さんや木津川計さんに褒めてもらった句ですが、識者の方が川柳に理解を持って下さり、書いたり発言して下さることは、もの凄く川柳のPRになりますね。

新子 そうですね。川柳界を飛び出してというか、広く文芸界に通用する川柳であるために、まず自分もとび出すことが必要だと思つようになりまして。三十年、自分を見つめて穴の中で書いてきたから。

薫風 俊平さんと私たち三人、川柳を始めたのは昭和二十九年頃、同期の桜ですね。

はさて、ここに取り出しましたるは…。

新子 やあ、涙が出るわ。こんなになるまで「新子」を読んで頂いて。

薫風 この句集の出版記念の会は、姫路の喫茶店の二階でしたわ。大森風来子さんも来てらして。その時は、時実を、その頃の幻の名馬トキノミノルや言うて祝辞にしました。

新子 なつかしいこと。寺尾俊平さんとのつながりは、もうちょっと早いんです。俊平さんがバンカラみたいな格好をしたり、着物姿の目立つ服装で、私を連れていろんな川柳会へ行つて、「今日は取つてくるぞ」と、本当にカップとかを貰つて、汽車の中でやつたやつた二人で歌を歌うのです。俊平さんの「高い橋僕には捨てるものがない」「人間は木の葉ほど複雑ではないぞ」という句を見たときに、同郷のよしみということもあつたが、ああ、これは新鮮だなあ、と。

薫風 同郷という言葉が出ましたが、岡山県は川柳や冠句、短詩文芸の盛んな土地柄ですが、文芸にたずさわる人間には、それまでの環境が大いに影響すると思うのです。

新子 私はその頃鬱屈してしまつてね。友達つたので、書くということしかなかった。生れついで字を書け出したら、作文まがいのものを書いていた女の子だったし、綴方やお芝居の脚本めいたのや詩など、何でも書くのが好きだったので、読む時間があれば書きたかつた方です。空想的なものばかりを。

薫風 だから単に川柳だけじゃなくて…。

新子 それ程書くことが好きなので、いろんなペンネームでやって来て、短歌も随筆も。

新子 が随筆を三十年もやったということ。知らない方が多いけど、今川柳では食べられないが、随筆は稼いでくれます。去年は二本程長いものを書きました。しかし、どこまでも川柳作家時実新子で、川柳作家が書いた随筆や小説ということです。吉川英治が雉子郎という川柳作家から小説家に変身したようなことは、私には出来ないでしょう。

薫風 あなたは脱皮を常に考えて努力しておられる。その執念を持ち続けなさい。今度出される「川柳を始める人のために」という入門書にも、川上三太郎先生だけでなく、麻生路郎先生のことを沢山書いて下さってますね。

新子 路郎先生の方が多いのじゃないでしょうか。

薫風 麻生路郎先生は、晩年、編集室で、先生の最後の友達というか、恋人というか、そういう対象に新子さんをしたいと仰言っていました…。

新子 お手紙を頂いてます。僕も年をとりました、もうこれ以上友達を増やすことは出来ないの、君を最後の友だちに選びたい。赤穂御崎へでも一緒に行って、美味しいものを食べて海を見てくれないかと。

薫風 先生は間もなく病気をされてしまった。新子 それで、よろこんでお返事さし上げて

実現は出来なかったけど、薫風さんを通じて路郎先生が生きてたということです。

この本は、ひたすら初心のお一人に向って今語っておきたいこと、私のすべてを、川柳の心みないなものを残したい一心で書いたのです。

その時に路郎先生の言われた言葉とか、書かれた物とかが、私の心に大きく占められていた。なぜ路郎さんを書き、なぜ霞乃さんを書いたかは、自分でも分りませんね。直接のご指導を受けたわけではないのに書かせたのは、やはり、お手紙のせいでしょうね。

薫風 それもあるし、また路郎先生の川柳に對する異常な情熱、それが今の新子さんの立場で、まことによく、より深く理解されるようになったからでしょう。

新子 そうでしょうね。でもそれは、直接おそばに居たわけではなく、薫風さんの話を聞いて、なる程いい先生だなあ。わがままいっぱいだと聞けば、そこがまた魅力だし、私は仏さまみたいな人には魅力感じないので困るのですが、文芸をやる人間には、ある種の狂気というものが素質の中にある。そういう人が好きです。そういう人間の激しさというものはね、激しく生きられないものの願望みたいなものが文芸には出るものです。もちろん、本質は出ますけれど、逆願望は川柳の一つの象徴だと思うのです。

薫風 不二田一三夫さんが、ここでは具体的

なことは言いませんが、あなたの一寸した仕草を見て、新子さんはやさしい人ですなあと言っておられたことがあります。あなたは、優しさと激しさの両面の振幅が激しいのですね。

新子 自分でも幼児性と思っていますのです。

薫風 芝居の科白にあります、悪に強けりや善にも強い、というところですか。僕は振幅が情ないほどに無くて。

新子 神戸へ来てからでも、訪ねて下さる人、姫路時代にたずねて下さった方が、一様に驚かれるのが、私が御飯炊いて、おにぎりや味噌汁を作り、おかずをパア〜と作って出すのをへえ〜と言われる。この間も西山幸さんが、まあ先生がお茶をいれられるだなんて。本当は、我ながら尽くし型なんです。相手の身になって考えているのですが、川柳に限りわがままがドーンと出てくるのです。

薫風 新聞やカルチャーの仕事にたずさわっている、川柳界だけでなく、外へも通用する文章、話術、人間性が要求されるので、これが大変でしょう。

新子 川柳界を大きくするために、コップの中でパチャパチャではねえ。自分が外と付き合うようになって、文章でも内へ向って書いてたらもう駄目ですね。分りやすい本当に噛んで含めるようなプロの文章が書ける川柳家が一人でも多くふえて、初めて対等になるのが言えるようになるのじゃないか。今はむずか

しいことを中へ向つてばかり言つてゐるんです。そうすると、川柳界の中で偉いような錯覚を起す。

薫風 新子さん、若い時の勉強やなしで年いつてからのほしんどいことです。勉強大事ですが本を読む時間の少ないのがつらいです。

新子 勉強は、そら大切ね。本を読むとは別に、若い人から学ぶという感覚がむしろ必要で、今、新人類と言われる非常に若い人達と隔絶せずに飛び込んで行つて、教えてもらふ姿勢です。それに、川柳以外のすべての芸術に触れて行くことも大きな力じゃないですか。**薫風** 新子さんは私と違って、句集「新子」時代から革新的句風になり、回帰して絶えず激しく揺れておられる。

月のかさめぐり逢わねばただの暈の時代、

測を這いあがる女は突き落とせ

測を這いあがる男は見えていよう

の時代、

れんげ菜の花この世の旅もあと少し

薄かるかや死んでゆくのは誰が先

各時代のプロセスの中で、今振り返つて見て、ご自分の充実した時はいつでしたか。

新子 河川敷の六年です。雑誌「川柳展望」を出して、家を飛び出し、六年間、あれは自分と純粹に向き合うことが出来ました。公衆便所の水道で、夜になって茶碗を洗うというような生活しながら、親族の世話にもなら

ず、我を張りましたが、その間、大袈裟に言えは森羅万象と初めて融和出来たというか、小さな動物とか、墓とか牛蛙がいっぱい。パッタヤトンボや蝶々や、犬や猫や、あらゆるものと私の差をなくした。そこから、自分

も人の女房であるとか、子供の親であるとかいうことから越えてしまつて、これは良かったか悪かったか分らないのですが、本当の意味で自分を解放出来たように思います。

薫風 すさまじい川柳修業、川柳を通じての人生修業ですなあ。その時代の句に。

新子 あの六年間に句も充実したように思いますね。自分ではですよ。評価は知りませんけれど。

君は日の子われは月の子顔上げよ
というのが出来た。男性賛歌です。古いと言われようが、私の思いですから。「原始、女性は大陽であった」と言つたのは平塚雷鳥ですが、私は生きて来て、月の子、お月さんの子の方が似合うのです。太陽があつてこそ太陽が沈んだとき初めて光を得るのです。顔を上げよ、というのは、それまではちよつと人を好きになつても人の妻である。子供の親なのはどうして人を好きになつたんだろうかと、こういうふうな姿勢だったのですね。茨木の淀川河川敷六年間で、その思いをふつ切ったのです。個人名とか、そんなのはこっばずれて、もう日と月という存在です。

薫風 「墓の下の子の下に眠りたや」の句に

続きますね。そういう体験を経て、現在、川柳とは何かというと、一口で言うなら、心ですか？

新子 心です。**薫風** やつぱり。それは若井三窓さんも常々言っているし、誰もが思っているという、言い過ぎですが、それぞれ、いろいろな程度の差で、そのような川柳への思い入れを受け止めています。川柳は心か。

新子 「川柳で自分史を」とこの本の中にも書いていますが、自分の生きた足跡のないような句を、技巧がうまいというだけで何万積んでても、何程の価値があるかと思ひます。

薫風 梶元紋太先生が「川柳は人間である」と喝破されましたが、新子さんは「川柳は自分である」と。

新子 もう自分であるで結構です。自分というのとは心ですからね。心と言つたときにね、私はいつも思はずこうしてしまふのです。(両腕を胸で合わせるしぐさ)

薫風 新子さんの川柳への心が、この入門書を通じて多くの人に伝わって行くことでしよう。感銘深いお話をありがと。ごさいました。

(テープ整理 藤田泰子)
(写真撮影 小林一夫)

「新子さんは五月五日、曾我録郎氏と結婚された」

NHK学園創立25周年記念

第一回NHK学園

全国川柳大会

日時 昭和62年9月17日(木)午前11時開場
会場 台東区立浅草公会堂
東京都台東区浅草一丁目38-6
電話(03) 844-7491

宿題(事前投句)

野菜 西尾 栗選
借りる 志水 剣人選
水 森中恵美子選
びたり 神田仙之助選
靴 渡邊 蓮夫選
未発表作品に限る。各題2句
7月10日締切

席題 当日一題(一句)

●参加要領

川柳講座受講者以外の方でも自由に参加できる。参加者は7月10日までに投句料二千円と共に左記へ。(現金書留か郵便小為替)
〒186 東京都国立市富士見台2-36

NHK学園全国川柳大会事務局

賞 各題上位入選句に呈賞

◇当日は「川柳必携」「川柳スクール」の執筆・鈴木如仙講師の講演のほか、五人の選者の「リレー・ミニ講演」を予定。

◇事前投句五題の入選作品は作品集にまとめ

投句者全員に送呈。当日出題の宿題の入選作品は63年1月発行の「川柳春秋」第8号に掲載。

◇詳細は前記、NHK学園全国川柳大会事務局へお問合わせ下さい。

電話 0424(72) 3151

用紙見本

(普通の便箋またはこれと同じ大きさの紙)

九月十七日の大会に出席する、欠席する

住所() 氏名() 電話番号()

川柳講座受講者の方は受講番号を

宿題

宿題

おまかせセンター

『夜市川柳』募集

第6年度 第1回 「髪」 河内月子選

第2回 「灰皿」 大路美幸選

投句先 〒593 堺市堀上緑町二一九-二 河内天笑方 堺川柳会

第二回国民文化祭熊本文芸大会

川柳部門作品募集

作品 未発表作品 各題2句
宿題 「火」 吉岡 龍城選
「笑顔」 森中恵美子選
「住む」 尾花 白風選
「本ほん」 藤田きよし選
「雑詠」 堀口 北斗選

応募料 一、〇〇〇円(郵便小為替同封)
但し海外よりの応募は無料

応募方法 幅6cm長さ18cmの白紙使用。
各題毎に一枚に2句連記、無記名
(住所・氏名は封筒に明記)

応募先 〒862 熊本市大江二丁目七一 熊本県立劇場内 国民文化祭文芸大会 川柳部門事務局

締切 昭和62年7月31日(当日消印有効)
但し海外投句は7月31日迄に必着

賞 文部大臣賞・熊本県知事賞・川柳大会賞

★入選句及び応募全作品より一句を選び発表誌に掲載。全応募者に配布

第二回国民文化祭川柳大会

日時 昭和62年10月10日(土)午後一時より
会場 熊本県菊池市 菊池文化会館

行事 ①入選発表②講評③受賞式

■ 随 想

蓬 萊 山

布 施 幸 子

先日、夫婦で竜宮へ旅をした。

といっても、じつは『山陰の竜宮』こと城崎の日和山へ行ってきたのである。

後島という小島に竜宮城がセツトされ、青い海原にカラフルな姿を浮かべていた。私たちが泊った旅館の付近にも『浦島様歓迎』の立札を添えた竜宮の門があり、乙姫の人形も優雅に佇んでいた。いずれも中国風であったけれど、ほんものの竜宮城は、モーターボートで行ける後島ではなく、さりとて中国でもなく、常世の国の蓬萊山に建っているらしい。

蓬萊山は別の名を『よもぎが島』ともいって、中国の古書によれば、『黄金白銀の宮城があり、島全体が白々と清らかな楽園』で、『老いず死なず、幸福に満ちあふれ、不幸のかけらも見つからぬ』結構な所だという。

秦の始皇帝は、おのが身のならびなき権勢を思うにつけても、永遠の命がほしいと願った。そこで家来の徐福に「蓬萊山へ行つて不

老不死の仙薬を求めてまいれ」と命じた。

仕度として、たっぶりの金銀財宝、器材器具、食糧衣料、それに数艘の大船と数千人の家来が与えられることになった。

「帰国のあかつきには、榮達は望みのままじゃ」

「ははーつ。ありがたき幸せ」

徐福は平伏したものの、内心は幸せどころでなかった。というのは、蓬萊山の所在や実体がまことにあいまいだったからである。

『東海に浮かぶふしぎな島で、遠目には雲のよう、近づけば水の底、風にさらされてあちこち移動し、並の方法での上陸はまず不可能』と教えられても、まるで夢のように頼りない。

だいたい、常世の国の神山信仰とは、山東半島の海べりに現れる蜃気楼から始まったといわれる。蜃気楼が生みの親であれば、蓬萊山が夢まぼろしであろうと驚くには当たらない。が、そんな所へ行つてまいれとは、どうい無茶苦茶ではないか。

と私が憤慨したところで、皇帝の命令は絶対である。徐福をリーダーとする大船団は、華やかに見送られて船出した。だが、それっきり行方不明になり、したがつて不老不死の薬の入手も叶わず、始皇帝は四十代の若さで

急死した。

徐福らはいずこへ消えたのか？ この先が日本の伝説となる。

まず、紀州上陸説がある。日本の熊野が蓬萊山だという信仰は遠い昔からあり、（ならば私たちはすこぶるめでたい国に住んでいることになる）徐福も熊野山中に生える烏薬という木の実から仙薬作りを試みた。けれど、なまやさしいことではなかったで断念し、その後はなんと、鯨とりの親方に転職して新宮で一生を終えたと伝えられ、その地に墓もある。

別の説によれば、徐福一行は京都府丹後半島の伊根町の海辺に漂着した。新井崎とよばれるその辺は、山が海に迫って平地に乏しく中国古書の説明する楽園には遠かった。ただ「ニイヨモギ」というこの辺特産のよもぎがぼうぼうと茂っていたから『よもぎが島』にはちがいがなかった。

ニイヨモギは里人に重宝がられる薬草ではあったが、皇帝御用達の霊薬としてはお粗末と判断した徐福は、帰国をあきらめ新井の里で暮らしてゆくことと決心した。

なにしろ紀元前三百年もの昔のこと、日本はようやく農耕生活になじみ、ムラがまとまっていた頃だから、中国の先進技術を身につけた徐福らが尊敬されたことは想像に難くない。充実した生涯を全うしたと伝えられ、海に面した新井崎神社に祀られている。

ところで、同じ伊根町の本庄には、宇良神社があり、浦島太郎が祀られている。つまり、徐福がたどりついた近辺から、浦島は出発したことになる。

浦島伝説は各地にあるが、日本書記の雄略記によると、伊根町本庄が本家本元らしい。亀に乗った浦島は、夢まぼろしのごとき常世の国、蓬莱山に無事到着し、黄金白銀でできた竜宮城に迎えられ、老いず死なず、美女乙姫を妻として遊び暮らす身分になったのであるが……。

万葉集に「常世に住むべきものを剣刀、己が心より鈍やこの君」という歌がある。

「常世の国に住んでいたらよかったのに、みずから望んで本庄へ帰ってくるなんて、さてもまぬけなお人じやないか」

ごもつとも。けれど浦島は、蓬莱山の結構ずくめが、ほとほと嫌になったのかもしれない。乙姫が「もう一度戻ってくるつもりがあるなら、決してあけてはなりませんよ」と念を押した玉手箱を開けてしまったのは、こんなにさい意宮城へ戻りたくなかったからではなからうか。

古代帝王から庶民までが憧れた蓬莱山ながら、永住となれば話は別。人間には常世よりやはり浮世。日本人はとりわけ故郷を恋う民族ともいわれる。ストレスにさいなまれ、無常に涙しても、住みなれた土地で暮らすのがいちばんではあるまいか。と少なくとも私自

身はそう考えている。

麦の頃

栗谷春子

NHKテレビでその番組を見てから、もう二、三年は経っただろう。何という題かも覚えはないが、とに角シリーズもので、食からはじまる、というのであった。

ペドウィンの女はよく働く、という冒頭の言葉は覚えてる。

農家の一日はバター作りからはじまる。羊のバターをとかしたバター油をパンにつけ、チーズを入れた紅茶を飲む。チーズは腐らぬよう塩の量が多くてとても辛い。

土で造った大きなパン焼かまどがある。七人家族の二週間分のパンを一度に作ってしまうのはこの家のおばあちゃん。パンの形は大小不揃い、それだけでも如何にも楽しくなってくる。板にパン種を並べたのを長い柄でどんとかまどの奥まで押しやって扉を閉められる。

この番組の中で私は落穂拾いの光景をつぶさに見ることが出来た。

これが心に強く残って今も、薄れゆく記憶を辿って思いかえしている。

ミレーの落穂拾い。牧歌的で神秘的である

美しく静かな田園風景。けれどその底にある決して豊かとはいえない農家の生活のことにまで想像したことはなかった。

この家庭では、麦の取り入れを終った後、老人から子供に至る一家総出で畑に出て、一つの穂を残すことなく拾い集められるのだ。

実に真剣な作業であったが、また何と楽しそうな雰囲気だろう。それもその筈、この日集めた落穂で、この日のおやつ、ライ麦のパン（黒パン）が焼かれるのであった。

ヨチヨチ歩きの幼児までが小さな手に一本の穂を握っては、ころがるように母親の手に渡している光景。

やがておばあちゃんの手によって一と抱えもある大きなパンが焼き上げられた。大きな古いテーブルの前で子供達は行儀よく待ちかまえている。

忘れてはならない儀式がある。

大きい左の手にのせられたパンが一度裏返しにされる。その中央に右手に持ったナイフの切っ先でそとと十字が切られた。同時に子供達もそれぞれ胸に十字を、そして敬虔なお祈り。

何を考えるより先に涙が出てしまった。

本当に素敵な落穂拾いの光景を思い出している。

初歩教室

題——土——

阿 萬 萬 的

今月の課題「土」にはいろいろありまして
何からいったらよいものかしら
夏雨に古墳の土が眠り出す

(夏雨に古墳の土の独り言)

土掘って歴史が尽きぬ考古学

土と泥の中で太古の歴史追う

土掘れば何か出て来る古い国

竹べらで古代の土をそつと掘り

(竹べらで古代の土の息吹聞く)

土掘つて過去との距離を測つてる

○発掘の土器の悲しいひとりごと

○土落とされて埴輪大きく深呼吸吸

浮き沈み何でも知つて壁の土

(築地塀土は何でも知っている)

土はだんだんいためられてしまつて：

雑草へ土が泣いてる休耕田

農地とは名のみの土が泣いている

山の土抉って立派な家が建ち

自然美を荒した報いか土砂崩れ

ダムの中に決つた土に立っている

きみ子

達子

遊光

やすお

兼治郎

三千子

倫子

鉄治

吟平

勝美

章久

玉枝

市郎

はるお

水耕し土も甘味も消えてゆき

パイテクで土の香知らぬトマト食べ

原句パイテクはパイオテクノロジーでは

スパーの野菜に土がついてない

水栽培土の温みが伝わらず

土なしでパイオがトマト赤い顔

(土なしのパイオで個性のない野菜)

農薬とハウスで囲み土も病む

温室の土ぬくぬくと冬知らず

(温室の土に季節を知らぬ花)

○土の香も知らぬ難です無精卵

○ひよろひよろと土を知らない貝割菜

だが春の土は、命をはぐくむものらしく

土ふまず春の息吹に触れたがり

靴ぬいで土のぬくもりたしかめる

我が道をしかと貫く土もぐら

(土の下にもぐらは生きる道があり)

明日ひらく芽は静かなり土の中

春風に土を起せば蛙跳ね

啓蟄へ明日を信じて顔を出す

掘り返す土に生きてたどじょう蛙

(春の土みみずも蛙も生きていた)

雪とけて土が抱いてた小さい芽

そして筍の季節ともなると

雨後の竹土盛り上げて知らせる

筍がによつたり芽を出す春の土

竹の子が重たい土を持ち上げる

(竹の子のいのちが土を持ち上げる)

土には故郷の匂いと母の匂いが交錯して

美恵子

信子

三千子

一太郎

太一郎

露芳

稔

章久

よし津

房子

三津江

八重子

小鹿

紀代志

純子

勝美

静子

喜代子

三津江

東雲

故郷の土はくろくろ杉の里

土を踏むやすらぎを踏む里の道

(土を踏むやすらぎがあり草萌える)

土の香のする方言でもてなされ

いまになつて土の香のする説り好き

(ふる里に土の香のする国説り)

ふる里に土の香りに葱の味

郷に従い女は土臭さ土臭さ

(郷に入り女は土臭さに馴れる)

昨日から燕が土を運ぶ軒

(果作りの燕が土を運ぶ軒)

宅急便の土の温みも添えて着く

里の土つけて野菜の宅急便

ふる里の土の香匂う宅急便

土ついたままの土産を提げて祖父

母からの到来ゴボウを土に埋め

土臭さ持つて自然によくマッチ

(土臭い母で愛想よく動き)

土は生きていました。それはやさしく或る

ときは逞ましく

肥やれば土はたしかに返事する

活性土へ土もビタミン吞まされる

掌の皺に五十余年の土匂う

掘り返し掘り返し土生きている

耕して土にお陽さまの匂いする

(耕やせば土お陽さまの匂いする)

土は陽とも和み雑草に喋らない

隔てなく土雑草の根も包み

こばれ種の自立を応援します土

照子

久子

はるお

てる

紀代志

すみれ

タネ

鉄治

春枝

白峰

ふみ

温子

周子

八重子

知恵子

野草

凡太

慶子

志重

千鶴子

克子

(こばれ種の自立も土が支援する)

病む土も身も同じよう私語をきく
病み上りしみじみと嗅ぐ土の香を

志重
サワ子

(病み上りの身に温かく土匂う)

土は母悪人にまで愛をくれ
転んでも土の情けに救われる

昭治
里子

(失意の日土の情に救われる)

生甲斐を土になじみて元氣なり
土に生き土の温さに感謝する

千代女
久子

ばらの刺土の温さに許される

野草

街に住んでも土は心を和ませてくれます。

保夫

土さわる楽しみで買うマイホーム

実男

土いじりを喜ぶ母と植木市

純子

(土いじる老婆の背に陽はまるく)

腐葉土に精魂こめて菊作り

一耕
喜与志

(大輪を夢見て菊の土作り)

マンシンの窓に春呼ぶ花の土

しんじ

デパートで買った沃土に種を蒔く

正之

マンションで四季を咲かせる土を買う

春枝

腐葉土を買って咲かせる富める国

金吾

(土までも買って団地の花が咲き)

やせた土にもベランダ一杯春の花

円女
しず子

掌の庭だが好きな花にあう

しず子

(猫の額の土にも好きな花を植へ)

しず子

だが道は舗装されて、文化とは淋しいね。

太郎
円女

(簡易舗装へ土は生きてる草が伸び)

三代目土に未練のない息子
ここで方向転換して陶土に思いを

慶子

失恋の痛手無心に土こねる

新造

玄人へろくろの土の素直なり
作陶に土の根性手造りで

吟平
太一郎

(作陶の土のころは指が知る)

老いの趣味ろくろ回して陶芸を
陶芸で土と悪戦苦闘する

ふさ子
ツヤ子

(余技陶芸土は素直でいてくれず)

土くれに命をかけて柿右衛門
白い土宮人唄ぶ出石焼

照子
遊光

志野茶碗土の温みを両の手で
(両の手に土の温みの志野茶碗)

遊光
遊峰

焼き上げた土器は四十の女肌

新造

ここで戦争が残した土の思い出は：

兵として北京の土を踏んで来た
吉林省凍土に聳える好太碑

太郎
明吉

幾歳月母国の土は踏んだけど
それでは最後に土のいろいろを

明吉
克子

旧人類土の匂いが抜け切れず

克子

一村一品土の匂いで勝負する

ただし

土地土地の名物尋ね一人旅

一房
房子

(土の香の土産屋に立つ一人旅)

房子

雨叩く土に音楽流れる

里子

(雨叩く土にショパンの曲沁みる)

里子

泥んこの中で輝く子供の目

トキワ

運動場土恋しとして裸足の子

恭昌

(分教場土は子供と仲がよく)

熱いから焼かずに土に埋めてくれ
ハハーン泉重千代さんですね。

同じ土つけて家族のハイキング
農家を出て土の香をなめてみる

兼治郎
保夫

草魂を生んだと土の自慢する

露芳

ベニシリン土から生れた次は海
(土壌菌土から生れたベニシリン)

正之

鑑識は土の粒子で土地勘割り
(鑑識課土の粒子を見逃さず)

繁男

春一番黄砂が日本の土になる

たかし

場所取りのゴザ広げれば土の冷え

てる

○凸凹道回り道する車椅子

つえ子

○駅前のお店壊される土煙

よし津

○荒れた土イエスが愛を確かめる

博子

○金魚の墓兄弟仲よく土を盛り

玉枝

○一と握り失意のように土砕く

重信

○座禪草梵行のごと春の土

美恵子

○天に向って土筆は土の詩を書く

喜与志

○印を佳句としていただきました。

題「海底」 6月10日締切(8月号発表)

「古都」 7月10日締切(9月号発表)

宛先 〒598 泉佐野市中庄一〇八一—九九

阿 萬 萬 的

「お願ひ」 「初歩教室」 は初心者を対象とした新人育成のコーナーです。 同人の方の投句はなるべく遠慮下さい。

(編集部)

海

土橋 螢選

水着きて走った海へビルが建ち
菜種梅雨 南の国は海開き 喜代
大海を知らぬ蛙で恙なし 倫峰
海峡へ女の涙おいてくる 純子
人類のおごりは海に裁かれる さと美
島の子の金波銀波を漕ぐ大志 柳子
海に石投じたほどのわが主張 みのる
悲しみを断ち切る海が静かすぎ 森脇和子
ほたる鳥賊 日本海を風にする 勝美
母の海いつも風とは限らない 炎六
海の色悲しい日には悲しい色 道子
海の子になるのに水着派手すぎる 重人
少年は海の丸さをまだ知らぬ 緑良
戦友の血が溶けている海の彩 可住
海を捨てた男に出番もうこない 一郎
海の方むいて砲台朽ちている 兼治郎
遠足の子等を迎える海が風ぎ 進
傷心を海の広さに叱られる 京子
灯の見えぬ海の遠くに置く心 正敏
水平線アメリカ浮かぶ蜃気楼 旭恒
水漬く屍忘れたように海しずか 喜与志
海に生きる父の無学を恥とせず 宵明

くよくよせぬ心を海に見てもらう 保夫
海峡の霧笛あの日も霧だった 達子
海の青に染まって地球 宙に浮き 有一郎
北の海怒れ 四島まだ異国 たつみ
トンネルの海を左遷と栄転と 久仁於
美少女が海を見て病んでいる 克子
杯の底から覗く明日の海 大柏
海の私語テトラポットは聞き上手 たず子
海の町 手押し車は魚売り 菜月
一と夏の恋も洩うて海青し 高子
火の海が好きなら女で傷だらけ 理恵
海の青 破れた恋は忘れよう 文平
荒れている海へ妥協を考える 雄々
八月の海に浮かんでいる懺悔 砥代
野心もつ男に海は荒れ狂う 雀踊子
佳
碧い海少女は鬱を捨てにゆく 三枝子
渦潮は海の曼陀羅会かも知れぬ 正坊
静かなる海にこころを洗われる ろ亭
病院の窓から海へ飛び込める はるお
悲しいときもきれいな夕陽が沈む海 雀踊子
人
古里を捨て故郷の海を恋う 多賀子
地
海のないふるさとだから空を見る 保
天
溺れても海は男は這いあがる 三五島
軸
海青く深くいくさを嘲笑う

笛

中内朱坊選

霧笛鳴る海に命の灯を点す 高明
笛吹けばコブラ出そうで出ない箱 万亀子
あなたの笛におどれぬ傷が深すぎる 三千子
笛吹けど踊らぬへびに見捨てられ 秀峰
草笛を吹いて少年夢を追う 炎六
草笛が還って来ない峠道 可住
違反車を婦警の笛は許さない 重人
抜擢の椅子に七人笛を吹く 正敏
笛の音を変えて相手を錯乱す あき
笛吹けど躍らぬ雑魚としての意地 忠三
阿呆になる笛が踊らす裾さばき 裕
笛吹けばすぐ踊るから憎めない 倫子
口笛の合図を聞いた娘の笑顔 白峰
草笛に初恋がある里の道 純一
青春の口笛がある一ページ 道子
口笛を吹く合格の帰り道 通彦
オカリナの調べシルクロードを恋う音色 達子
口笛の合図に化粧するおんな 螢
島返せ怒濤に化粧する汽笛 文平
生活のたしにはならぬ笛を吹く 伊津志
山囃子笛をはげます鉦太鼓 義美

口笛で恋の合図をした昔常善
どの神に笛を吹こうか神無月たつみ
孫の瞳に裁かれている母の笛孤秀
体より大きな夢も鼓笛隊三枝子
笛の音が呼ぶから樹海へ急がねば枯梢

無人駅長い汽笛を置いて行き大柏
口笛で呼び出す程の仲になり兼治郎
過疎の村ヤング戻れと祭り笛鉄治
妻の吹く笛に驕らぬ和音聞く多賀子
笛太鼓豊かな米が弾まない一郎

筆ペンのかすれ夜半の霧笛聞く奈美子
笛吹けど踊ってくれぬ影法師遊光
母さんの口笛明るい朝になる規不風
春夏秋冬笛の音色の美しさ元記

母一人子ひとり笛はひびき合う緑良
佳

喝采の陰で笛吹く人がいる智恵子
大安へ休む暇なき笙の笛千秀
交差点命預かる笛を吹く虹汀
日本の心くすぐる笛太鼓三五島

明日からの霧笛が消える渡り初め久仁於
人

過去の無い女霧笛を聞くグラス宵明
地

草笛の挽歌城趾の旅で聞き康子
天

北国の春を霧笛が連れてくるちかし
軸

脈

二宮山久選

この笑顔脈ありそうで無さそうな奈美子
脈のない話薬缶のたぎる音きよし
脈拍もキャベツを食べてお静かに三和

真夜中に自分の脈を確かめる文平
人脈にとほけた顔が一つある多賀子
山脈も霞のベール春を着る本蔭棒

消えそうな脈へ救急車ののろさ可住
どたん場で笑いが一つもれる脈森脇和子
まだ脈がありそうあなたの影を追う

人脈の名刺で関所通り抜け勝美
脈を見る上手な女のすすり泣き木魚
秒針の脈打つ音を聞くしじま理恵

万葉の夢が脈打つ土を掘る玉恵
耳うちでその気になったお人よし静子
ビツタリと脈が途切れたラブコール裕

注射針握ると脈が早くなる狸村
脈打つてとどく社長の立志伝柳子
脈膊が少し慌てるインタビュー白峰

脈を見るナースの瞳が澄んでいる重信
今一度脈打つ鼓動君に聞く章久
控え目の妻が離さぬ脈所ちかし
里帰り山脈冷たい近代化

脈のある話へ男の名をすてる雀踊子
脈あると銀行勝手に決めて来る白溪子
待てど来ぬ返事は脈のない証拠克子

動脈硬化が喜ぶものはかり好きちよ
ふところの財布の脈の頼りなさ常善
日本に円高という不整脈佳雲

隠し持つ火種へ脈はあるという雄々
脈々と続く血脈大切に綾珠
脈ありと見たセールの軽い靴重人

心電図黒い疑惑に狂いだす一一郎
脈がある別れへ妥協したくなる京子
医師いつか自分の脈を見るカルテ正敏

脈あれば浮気心が少しある古都路
脈止めてピエロは今日を踊り出す洛醉
脈あると見たかセールの上り込み秀峰

佳
人脈も金脈もない立志伝よし津
故郷は山脈続く過疎の村通彦
時々脈が止まっている接吻規不風

夫婦とや小さな脈を信じ合う緑良
落着いた脈へ一ふく煙の輪実男
人

山脈の向う民話の尽きぬ里達子
地
脈をとる無言へ空気重くなる大柏

天
人脈も金脈もない父の靴正坊
ラッシュ時へ脈が慌てる倦怠期
軸

流れ星ながれて

乱をひとつ生む

森中恵美子

花活けて女は

和解待つゆとり

高橋千万里

首を洗って

男の顔を取り戻す

若宮 武雄

白式尉ひとにたわけと

言われても

高杉 鬼遊

恋人が女の理想めり変える

西口いわゑ

★時の川柳社創立30周年記念大会で、次の諸氏が入賞

された。

今嘘を書けばきのうも

石垣花子

物忘れ

八木千代

嘘になる

川崎秋女

真ん中にいるしあわ

わその飯を盛る

川崎秋女

新築茶碗

ぬくい飯茶碗

新家完司

シナリオを一步踏み

出てちよははよ

林 瑞枝

風止んで芒の絮と安

らぎぬ

林 荒介

神戸市議会議長賞 林荒介

・兵庫県教育委員会賞 新

家完司・朝日新聞社賞 高

杉鬼遊

▽同人消息・お便り△

■紀南読売ファミリィ・サ

ークル誌四月十五日号・川

柳欄に「太い脚曲った脚も

フォークの輪」外数句、新

宮市・大矢十郎さんの句が

掲載された。

■大山の山麓、中山町報恩

峠の文芸の小径に、この程

次の諸氏の句碑が建った。

百花咲く野に一つずつ

石垣花子

物忘れ

八木千代

嘘になる

川崎秋女

真ん中にいるしあわ

わその飯を盛る

川崎秋女

新築茶碗

ぬくい飯茶碗

新家完司

シナリオを一步踏み

出てちよははよ

林 瑞枝

風止んで芒の絮と安

らぎぬ

林 荒介

商魂に徹して守る礼知信

金川満春

■竹中綾珠さん(芦屋市)、

竹中肖二氏(元同人、東大

阪川柳会会長)の十年祭の

祭典を四月五日に営みまし

た。二十人ほど集り故人も

喜んでくれたと思います。

■稲田豊作氏(倉敷市同人)

四月の山陽柳壇第一席に入

選、新聞記者が私のやって

おります「穂井田文芸」の

記事を取材にきました。

■川柳のやり直しをスター

トして六カ月、学生時代に

出雲におった時尼録之助様

よりご指導を受けその後会

社勤めて22年間全くのプラ

ンク、昨年暮から熱を入れ

始めました。

(千葉県流山市 神田治)

■七月四日の高野山へ二、

三人ずつで一緒に行く予

定です。今度は藍綬褒章を

つけて行きますから写真を

お願いします。(藤井明朗)

■鶴久百万両氏(唐津市在

誌友)御母堂四月五日逝去

謹んでお悔み申し上げます。

福元 みのる

— 薫風・紫香・登志実推薦

椎江 清芳

— 薫風・紫香・登志実推薦

宮下 とし

— 薫風・紫香・登志実・シマ子推薦

堀良 江

— 薫風・鬼遊・登志実推薦

横山 為子

— 薫風・鬼遊・登志実推薦

北川 竹萌

— 松風・朱坊・菊野・水客・薫風・鬼遊推薦



左から時子・花子・千代

堺番傘川柳会創立60年
梶川雄次郎句集「友情」発刊

記念川柳大会

とき 昭和62年6月21日(日) 12時開場
ところ 高石市羽衣2-15 ホテル新東洋
南海本線羽衣駅下車西へ徒歩5分

電話 0722(61)8181

(昼食はすませて)出席下さい

講演

直木賞作家

難波 利三氏

句集鑑賞

龜山 恭太

宿題

古川 一高選

男

玉野可川人選

紋

田向 秀史選

淑女

森中恵美子選

故郷

榎本 聡夢選

公園

橘高 薫風選

昔

奥田 白虎選

各題2句(出席者に限る)

締切13時

事前投句

「友情」

梶川雄次郎選

★事前投句及び記念パーティー申込み

締切5月31日

〈申込先〉

〒590 堺市櫛屋町東1丁2-12

堺番傘川柳会

会費 三千円(句集・記念品・発表誌呈)
記念パーティー
四千円(同所にて17時)

主催 堺番傘川柳会

川柳文学社30周年

記念川柳大会

日時 昭和62年6月28日(日)11時開場
場所 吹田市立千里市民センター
阪急千里線南千里駅下車進行方向に
向って右側すぐ

あいさつ

永田 帆船

講話

磯野いさむ氏

席題

友田茶の子選

宿題

西田柳宏子選

幸福

西尾 葉選

達磨

久保田以兆選

愛

山本 翠公選

希望

山田 良行選

泉

広瀬 反省選

寿

清水 斗升選

各題2句 締切午後1時

会費

二、〇〇〇円(昼食、飲み物、記念品、発表誌共)

近畿文字放送作品募集

題「星」

森中恵美子選

3句 締切 6月15日

ハガキに明記の上、左記へご投句下さい

〒540 大阪市東区谷町2丁目36

大手前ウサミビル3階

近畿文字放送 川柳係

土居耕花川柳句集

序文 本田恵二朗

跋 大滝 出雲

第一句集「笹の花」につぐ六百句を傘

寿記念として発刊される、耕花さん独特

の暖かい庶民的なユーモアに富む句は読

者をひきつけずにはおかないでしょう。

人間の種も袋に入れてある

弔いの鉦を迂闊に七拍子

戦争の真似なら止せよ花吹雪

■申込先 〒707-04 岡山県英田郡大原町笹岡

電話 〇八六八七(八)二八六五

振替口座 岡山 八四四〇五

大原川柳社

本社 五月句会

五月七日(木) 午後六時

メンズ・フアッションセンター

大型連休も疲労と共に終り、街は爽やかな初夏の風が吹き抜ける。

塩満敏氏のお話は、昨年九月定年退職するまで勤めておられた大阪の地下鉄について。

正式には「高速鉄道」というのだそうで、随分ご厄介になっているわりに、案外知らないことが多い。開通は昭和八年五月二十日(梅田―心斎橋間三・六キロ。四月から九両編成になり、将来の十両編成に備えて工事中とか。東西南北、たいがいのところは地下鉄で行けるようになり、便利になったのはありがたい。だが出口を間違えると、とんでもない地上に出してしまう。)注意を。

初出席は桜井市の前山とみえさん。

月間賞は榎本吐来氏が獲得。

(進行―天笑) (受付―はつ絵・いわゑ)

(記録―東雲・月子)

出席者―笛生・鬼遊・千代三・雀踊子・芳

子・寿美子・紫香・武庫坊・年代・佳秋・作
二郎・凡九郎・律子・はつ絵・水客・重人・
颯云児・白溪子・杜的・いわゑ・太茂津・勝
美・柳影・英子・春蘭・章久・天笑・月子・
柳宏子・白峰・満津子・道子・三男・小路・
柳伸・萬的・白鬼・射月芳・狸村・あいき・
公一・白洋・敏・とみえ・可住・文秋・隆二
勝晴・悦郎・形水・正坊・喜風・藤子・みつ
子・泰子・美緒・元紀・時子・東雲・吸江・
山久・美房・楓葉・度・規不風・洋敏・冬葉
薫風・美代子・吐来・智子・英壬子・頂留子
一三・史好・寿美・岳人・寿子

席題「傘」

久保田 元紀 選

思春期の夢が広がるジャンプ傘
老いの手にしたしみにくいジャンプ傘
傘ひとつ恋愛ごっこしています
終電車傘の雫で目がさめる
ぎこちない傘さしている一年生
窓少しあけ男の傘を干している
雨・柳蛇の目に京が生きている
集団の登校黄色い傘の列
邪魔になる傘とも言えずお借りする
傘取りに寄った飲み屋で又忘れ
懷疑心素直に傘がひらかない
花柄の傘で夢芝居がつづく
天気予報を信じるようになった傘
コーヒー店出て間違った傘と知り
駅にある善意の傘が開かない

颯云児 とみえ
重人
楓云児
春蘭
冬葉
柳宏子
白峰
柳伸
小路
楓葉
天笑
文秋
紫香
千代三

妻の傘いつも鞆に入ってる
どっちも戻ってはこぬ傘を貸す
身だしなみの一つに傘をいつも持ち
父の日の傘が忘れてなるものか
蛇の目傘祇園の雨は拗ねている
きつかけは傘を半分貸しただけ
卑怯者に傘を借りたと思わない
忘れ物傘はトップをゆずらない
傘をきた月が傾く二十五時
金借りについて傘まで借りてくる
山陰の雨弁当は忘れても
何時迄も自立させない親の傘
葱はたけに骨だけの傘立てておく
幸福な傘は日向へ干すだろう
パチンコに負けるわ傘を忘れるわ
あいりん地区あるく真赤な傘さして
J.R.になっても減らぬ忘れ傘
共働きそれぞれ傘を持ってでる
別別の傘で夫婦がもめている
山吹のはなが尽きぬもあい傘
デイオール傘に雨足強すぎる
ノーと言わないで日傘をもてあそぶ
花柄の傘を濡らした悲しいわけ
水雨続いて傘は枯梗を追いかける
忘れてきた傘を三年程思っ
傘差しているのに雨が止んでいる
異人館の坂から傘が重くなる

席題「チャンス」

遠山 可住 選

道子
形水
文秋
重人
可住
小路
作二
射月
美代子
颯云児
笛生
章久
作二
英子
鬼遊
寿子
正坊
洋敏
月子
柳伸
みつ子
天笑
作二
時子
智子
形水
元紀

チャンス握った拳が臍を固めている
 よく喋る女でチャンス見い出せず
 チャンスかも毘かもしれぬ縄梯子
 再会のチャンスに悩む女文字
 落ちつけ落ちつけ煙草を深く吸うチャンス
 逆境も男チャンスにしてしまふ
 どう化粧してもチャンスのない女
 島ぬけのチャンスはあつた無縁墓
 逆らつた神へチャンスは頼まれず
 絶好のチャンスへ風邪が治らない
 空くじを貯めてチャンスを保っている
 ヒーローのチャンスに代打告げられる
 騙されるとも知らないで来るチャンス
 シャッターチャンスいつも居眠りして写る
 チャンスとやおと二度目の首を売る
 また逃けたチャンスが僕を試してサ
 又とないチャンスだったと人が言い
 一円玉拾うチャンスを見失ふ
 すれ違ったチャンスがひよいと振り向いた
 ライバルの病氣チャンスにはしない
 出世するチャンス女が邪魔になり
 ここだここだと呼びまくっているチャンス
 再婚のチャンス口紅買ってくる
 仁王さん眠るチャンスを狙つて
 棚ボタのチャンスを待っている次点
 紫陽花の心変りにあるチャンス
 ぬるま湯を抜けるチャンスが見当らぬ
 二兎を追うチャンスと春の声がする
 連休のパンダに逢えるのもチャンス

寿美 萬的 藤子 公一 太茂津 頂留子 悦郎 鬼遊 吸江 月子 柳伸 律子 千代三 美緒 寿子 凡九郎 柳宏子 杜的 智子 道子 柳影 度 洋敏 狸村 時子 悦郎 水客 作一郎

またチャンス逃して今日を飢えている
 柿の種と替えるチャンスを探している
 重役のチャンスをけつたさわかき
 酔うた手へチャンス作つたのは女
 黒田節おどるチャンスを待っている
 海外へ行くチャンスだと言われても
 チャンスに強い男がよく眠る
 手のひらに乗ったチャンスを危なかり
 見えずいた仕草チャンスを上げてあげる
 モウ一度チャンスをくれたのは情
 一病をチャンスに余生あたためる
 チャンスだと思つ着物を着て行こう
 もつというチャンスがあつた妻の顔

兼題「注文」

西出楓楽選

注文をつけても鏡知らんふり
 注文へ生簀の鯛が落ちつかず
 結局はうどん注文して夫婦
 ちちはの注文重いののぼり
 美しい注文男聞きたがる
 時価と言うので注文ひつこめる
 服のセンスに注文つける惚れている
 別注の背広が甘いことを言い
 自信あるらしい注文つけてくる
 売上税に注文つけた地方選
 還暦へまだ注文が伝わらぬ
 センセイもママも注文ばかりする
 注文に反して身軽にルーブタイ
 コマーシャル茶の間に注文取りに来る

柳宏子 是つ絵 律子 狸村 泰子 英子 吸江 柳影 雀踊子 正坊 武庫坊 可住 智子 重人 射月芳 律子 いわゑ 満津子 天笑 芳子 山久 笛生 可住 時郎 悦郎 射月芳

川柳わかやま二百号記念
 句文集「あおい海」第二集

川柳わかやま吟社の同人・誌友百八名
 が参加 第一集（昭和53年刊行）以来の
 歩みを印した第二集が出版された。

頒 価 一、五〇〇円（送料共）

お申込みは左記へ

〒640 和歌山市鶴町一五 野村太茂津

振替口座 大阪〇一三〇八三九六

実力がないから注文多くする
 注文を貰う前から急かされる
 注文を繋ぎあわせてプラン練る
 面倒な注文受けぬかたつむり
 注文の色が出せない紺のれん
 右肩の力みに注文つけられる
 注文が多くて船が進まない
 神に出す欲いっぱいの注文書
 晩酌の注文をして山へ行く
 注文にカーネーションが添えてある
 注文が混線春のレストラン
 隠居するには注文が多すぎる
 注文の裏はとくに読めている
 注文を捌ききれない父のすね
 春の宵月に注文つけたとて

三男 天笑 諷云児 杜的 荒介 重人 道子 博子 耕花 作一郎 正坊 白兎 柳影 みつ子 月子

むつかしい注文つけている未練

注文は俺より先に逝くでない

ひと切れのレモンに注文つけられる

注文の服で離婚の旅に出る

仏頂面して注文を聞きにくる

私がわたしに無理な注文ばかりする

注文流れのように男がひとり居る

注文へ女の飢えを伏せておく

注文をつまみつづけて夫婦箸

注文を聞いているのはわりわざび

注文がうるさくなくて甘えてる

注文の多さに耐えている十指

兼題「傾く」

神谷凡九郎選

傾けて智恵が出るなら世話はない

傾いた椅子に座って黄昏れる

傾いた男も持っている理屈

傾いた軒を燕に励まされ

傾いた耳が秘密を貯めている

不用意な波紋に傾く程の意地

妹に傾く風を妬いている

骨相を日が傾いてなお信じ

他人が来て父の柩を傾ける

父の血へ傾いてゆく血が流れ

一言へ傾くやがて断わることになる

父の説傾く方が得策か

陽はすでに傾き男の詩が終る

前傾の姿勢少年らの多感

傾いた時の情けを咀嚼する

頂留子

美代子

白兎

可住

冬葉

はつ絵

水客

寿子

可住

岳人

道子

楓楽

勝美

隆二

妻人

重子

規不風

美代子

岳人

吐来

耕花

緑良

太茂津

春蘭

萬的

白兎

どんたく

傾いた靴が堂々巡りする

多数派の復原力を信じよう

心傾いて斜めに見えるものばかり

円偏在だんだん傾いている地球

右よりの一%がきなくさい

捨て台詞今日も夜まで傾いて

傾いてござる野仏そつとする

傾いた障子が亡母を語り出す

傾いた拍子転覆おもちゃの汽車

古稀有情法話に耳を傾ける

音楽に耳傾ける日のゆとり

愛の血をもろて傾きかけている

あだし野に陽が傾いて懺悔刻

盃を傾け過去を呼び戻す

傾いた意見へ遅れ水をさす

傾いた夢を信じて笛を吹く

傾いたタルマ片目を開けたまま

傾いた心が元に戻らない

傾いているのが風情の束ね髪

シーソーは傾くようにできている

傾いた影を叱っているわたし

傾けて曲げて盆栽愛される

自転する地球に私を傾ける

人形の首が傾く地獄耳

哲学とマンガやさしく傾斜する

陽は西に今日の私に呼びかけぬ

兼題「海峡」

岩本雀踊子選

バラバラの記憶を海峡へ捨てる

満津子

史好

規不風

武庫坊

寿美

太茂津

笛生

白洋

勝晴

とみえ

博子

道子

はつ絵

風云児

三男

悦郎

隆二

みつ子

吸江

藤子

いわゑ

重人

白兎

時子

白兎

凡九郎

白兎

但見石花菜句集

『けさらん』 発刊

牛の目の中にヒンズー教がある

アフリカに降る星屑よパンになれ

かつてこれほどのスケールの句があつたでしょうか。

日本海の荒波が生んだ鬼才、但見石花菜のヒューマニズム溢れる千二百句を御

賞味ください。

B6判 (250頁)

定価 一部二千元 (送料不要)

お申し込みは、左記宛に「郵便振替」を御利用ください。

口座番号 松江〇一九六八五

加入者名 赤崎川柳会句集刊行係

〒689-24

鳥取県東伯郡東伯町徳万五九七

新家完司方 赤崎川柳会句集刊行係

TEL 0858(52)2414

海峡の燈台守りの灯が温い
 海峡の夕陽干蛸が揺れている
 海峡の波は宿命知っている
 海峡に四季の人情はこぶ風
 ジェバゆきさんが越えと海峡雨になる
 海峡を渡ると母の子になる
 未来図に愛の海峡よこたわる
 海峡の連絡線は愚痴っぽい
 海峡の虹が攻撃的に見え
 海峡の夕日に祈る桜貝
 海峡の夕日は明日を予言する
 海峡の風が決意を確かめる
 海峡の深さを島に居て知らず
 生真面目な仮面を捨てて来た海峡
 海峡の網に仕掛けがある酒場
 海峡を風と渡って行くおんな
 海峡の波に民話がすすり泣く
 海峡の名が好き私の放浪記
 海峡を渡る国境の無いカメ
 生きかたを愛える海峡いま渡る
 海峡へ小さい恋を捨てて旅
 岸壁の母を海峡忘れない
 海峡を越えて歴史が作られる
 海峡を幾つ渡った旅つばめ
 海峡の視野から消えぬ北の島
 海峡を越えたら生まれ変われそう
 海峡を渡る亡命者になれる
 海峡を黙って去ったひとと思う
 海女たちの慕海峡は風に哭く

規不風 萬の 道子 とみえ 一二三 美緒 寿子 楓楽 水客 規不風 柳伸 重人 緑良 博子 荒介 隆二 とみえ 杜生 笛笑 天笑 芳子 耕花 洋敏 美代子 隆二 楓楽 三男 小路 作二郎

愛が渴いて海峡は雨になる
 海峡で春の煙草の封を切る
 海峡を越えて女は自立する
 海峡にひとつおぼえの亡父の唄
 海峡の春を探しに絵具とく
 海峡を越せない北の父の墓
 海峡を見おろす島の共同墓地

兼題「光」 黒川紫香選

よく見ればどの子も光るものを持つ
 赤い光が好きでトマトが熟れている
 光る海明日のいくさを秘めている
 喝采の背中へ嫉妬の目が光る
 月光へひとつになって行く二人
 なんば磨いても光らぬ石だつてある
 謝った息子が今日は光っている
 教会へ光求めて戸を叩く
 親の眼に子供はみんな光っている
 矢車が光って少年の夢開く
 一条の光がさしてくる手紙
 本当の光が見えた白い杖
 一筋の光が見えて歩が揃う
 母元氣床も柱も光らせて
 腹の虫鎮める鍋を光らせる
 母の日のカーネーションが光っている
 定年の日も光っている父の靴
 メロディが包む光の輪に溶ける
 漁火が光って車窓をこませる
 何喰わぬ顔で拾った光る物

冬 作二郎 いわゑ 藤子 水客 公一 雀踊子 楓楽 可住 いわゑ 諷云児 芳江 吸江 道子 博子 洋敏 武庫坊 智子 美代子 三男 智子 重人 道子 隆二 白漢子 章久

永田俊子氏(熊本市)より
 金一封ご寄贈いただきました

川柳塔社

少年の涙が美しく光る
 前列で指のダイヤが光っている
 身のまわり光らせてすきて落ち着かず
 自転車朝の光に持ち出そう
 光らない蛍一匹拗ねている
 潑刺と若さも風も光る初夏
 ロザリオが光る懺悔はせぬという
 光沢が出るまで磨く大理石
 普段着のセンスにキラリ光るもの
 光るもの一切付けてないおしゃれ
 貝殻も蝶も渚に来て光る
 窓いっぱい光を受けて病むベッド
 何事もないからダイヤよく光る
 地下街を上ると光っている空気
 脚光を浴びると強くなる虚栄
 七光り軽いジョークを弄ぶ
 城の町春は金魚の尾で光る
 ほんものの自信小さな石光る
 動くものみな光らせて初夏の風
 当人は気付いていない七光
 徐々に陽が白樺林を光らせる

(清記 泰子)

白兔 狸村 満津子 荒介 千代三 柳影 太茂津 勝晴 天笑 千代三 作二郎 月子 英子 月子 千代三 水客 満津子 吐来 紫香

担当・清水健司

河芳子

清太 静子 米朝 佳秋 香幸 女絵 美智子 千世子 紀雄 志子 武庫坊 幽香 諷云児 和友 杜的 保藏 白溪子 美幸 かすみ 春子 光代 伊三郎 年三郎 惠美子 園歩 一郎 松芳子

英 青 陽 眉 し 照 江 笑 白 正 散 柳 柳 作 定 み 天 伊 勝 博 文 正 良 静 太 薰 紫 哲
子 珠 露 げ お 水 る 美 女 宗 一 歩 伸 二 郎 影 子 樹 升 美 子 平 坊 江 津 風 香 郎 報 郎 峰

二分咲きへもう悪友が誘いに来
早よう咲けまだまだ咲くな杓の水
パンの耳飢えた昔の目が怒る
満ち足りた飢に手こずる処方箋
アフリカの飢えに届かぬ握り飯
愛に飢え女悲劇の夜を歩き
飢え知らぬ子が一粒の飯拾う
押すところ間違え下に降りていき
横槍を押すから器から漏れる
新人類選手宣誓は国際語
民営に期待と不安の発車ベル
地方選おかめの面が無難なり
汚れ役それは老母がかつて出る
泣いた子の汚れた顔を意地を張り
春うらら汚れる海の豪華船
一茎一花汚るに清き蓮の華
まん中で咲いているのはひとりばち

にた川柳會

西村

早苗報

浄美 美智子 吟平 中志 博友 健一 佐加恵 桃風 秋月 照路 玉水 青銅 金吾 柳五郎 草風 裕 節子 登美也 晴月 雪吉 舞吉 由郎 夢醉 弘朗 幸一 雄々 寿美子

悲しみが作り笑いの中にある
帰るなり真似て旅のアラカルト
春だ春結んでひらく園の花
ナイフなど苦手と食の箸が好き
包丁に錆も浮かせて共極き
色恋はぬき差し向う手打ちそば
サークル棟樑 松本今日子報
憧れに兄と呼びたい人が欲し
あこがれを内緒にして持てあます
日本に生まれて春の花盛り
すれ違ふもの皆みどり陽を仰ぐ
公園の場は野生を忘れてる
あこがれた人は遠くで孫の守り
花びらが惜しみなく降る桜餅
公園をわが家の庭のように言い
川柳化粧櫓 植村客遊子報
目立たないほえみがあり安堵する
終着へ負けず嫌いが先に逝き
家中が協力をした合格記
振り出しに戻れば鬼はついて来ず
男見る眼が肥えて来てまだ嫁かず
火災瓶一つで政治に立ち向う
銀行は除けて就職口を探す
浮き沈みして退院の日を迎え
それのない主張ちいさな旗を揚げ
好きですとマツチの裏に書いた恋
一時間で鹿児島へ来た空の旅
頭数はかり揃えた木偶の坊
吹雪く窓独り暮しは淋しすぎ
寝すこしの五分へ狂う独楽の芯
小唄塾生師匠の糸に惚れ

雀踊子 景子 きみえ 多賀子 花子 早苗 泰子 今日子 千代女 智恵子 登志実 三子 美緒 薫風 岳詩 大鷹 秋月 越山 紅葉 葉香 白男 実男 礎石 悲子 輝月 みつこ サワ子 遊峰

長男はヤッパリ父の肩を持つ
雛祭り孫嫌いで春うらら
息抜きに来いと里から言うてくれ
日めくりが旅の帰りを待つていた
隊長に似た髭だけにかいかぶり
岸和田川柳會 植山 武助報
駅長の花束にあるさびしさよ
喧嘩する相手ありああ夫婦
的を射た神から一番遠い絵馬
真似してもやっぱりそぐわない私
金利引下げいつか本気で怒りたい
誰に似て親おしやべりに子の無口
嫁りともない娘飾って人に見せ
グアムに来て軍歌が聞けるチャモロ族
孫の友おいたをしても叱れない
花びらを風が運んだ手水鉢
春場所の大関眉の一字
沓の音五体投地の荒修行
星の降る童話の世界に親と子と
モニングクコヒー女は隙を見せぬまま
私の真似が上手な春の影
おたやんの面をかむったまま握手
遊光 永楽 みね子 和子 客遊子 寿美子 一弥 加代子 タン吉 通彦 富志子 浪速子 実村 主一 希久志 佳生 幸代 武助 勝晴

「各地柳壇賞」の選者交代
児島与呂志に代り62年度より
玉置重人が担当致します。
川柳塔社

亡き父の肩書き生きてる風にあらう
杉花粉撒いて日本に春が来る
花束に嫉妬の色がすこしある
入院の顔見るだけでいい親子
日輪を拜んで祖母の満ちた背な
筋道を通せばきつい風当り
売上げ税票の重さを左右する
山裾のさくらふるさと近くなり

堺川柳会

河内

月子報

ひで
ゆづる
射月芳
さよ子
甘平
白光子
春栄
操子

駒つなぎ川柳会

里

小路報

シズ子
小雪
半銭
半梢
邦晴
萬笑
路笑
庸佑
覺然坊
隆二
雅風
新造
あおい
善信
美津枝
山久
邦晴
曲手
真砂
文秋
幸治
柳右子
喜代治
国公
素灯
金太
しんじ

東の間のうたた寝覚ます夢涙
東の間にわたしを変えたひとり旅
逆境に立てば冷たくなる世間
造船の島で冷たい風に遇う
追加ですねと如才ないおかみさん
おしるこの追加ではずむセーラー服
東の間の命を馬鹿だのエッチだの
レストラン追加のふえる家族ずれ
東の間という幸せに磨練る
自尊心耐えて冷たき世に生きる
補聴器で冷たい話ばかり聞く
一粒の点になるまで見送られ
豪邸の桜で騒ぎなど知らず
再犯を冷たい娑婆のせいにする
粒ぞろいゆえにさけられない摩擦
散りざわが良いと桜に言わんとこ
束の間の不倫を許す春の絵馬
割勘の追加で女よく食べる
遅撒きの一粒種に苦勞する
追加金貰って幹事気をつかい
逆立ちをする束の間に気が変わり
冷たい手で舞台上に上る女形

美代子
寿美子
秋風
新造
妻造
耕花
道女
真柳
素灯
鬼遊
柳宏子
美房
凡九郎
金三郎
紀美女
東雲
千子
楓

東の間の恋もないまま喜寿迎え
いい年をしてと冷たい目で見られ
小遣いの追加分だけ花を買って
フルムーン追加予算を取ってある
石灰の追肥が効いた金盞花
束の間のゆとりへ熱い茶をすす
遠く来て一期一会の花に酔う
親友をかばいいつしよに残される
日本の桜貰って姉妹都市
背信の坂はだんだんきつくなる
口止めは商売上のテクニク
どちらから先に誘った花と蝶
割り勘が済んで残っているふたり
傘半分借りた時雨が縁結び
善男善女坂うめつくす天王寺
決まるまで口止めをするいい話
自信ある人だと思ふ誘い舟
残しとくご飯小犬をそつと飼ひ
取仕切る出雲の神に暇がない
下り坂でも一徹な愛がある
警察へ言えば殺すという脅し
誘うより誘われたのがハッスルし
残業は赤ちやうちんでしてる苦
残業に芋屋の笛が通り過ぎ
釣り合わぬ縁と親父がきめつけ
薄い縁辿って伸びた棒グラフ
坂越えて越えて男の顔になる
確実な歩幅でのはる父の坂
口止めは町内中が知っていた
口止めの二つ返事も気にかかり

板子ヨコをくれた女を誘い出す
どちらから誘うともなく座を外す
ラムネ瓶昔話がまだ残る
産寧坂ねだるかんざし五色豆
倉敷の坂変陀羅の教え説く
口止めの裏で噂を期待する
とまり木の下に口止め落ちている
敵の誘いに乗ってみるのも一策か
妹が誘うとろくなことはない
町工場不況居残ってもうどん
女坂越して仏の目と出逢う
独走者足音が追う登り坂
口止めが時効になったうまい酒
青い性冒險心を誘われる

佳句地10選 (前月号から)

森田熊生選

出世した男が仲間から消える
手応えがないまま歳が一つ増え
変化球投げても妻は笑うだけ
灯を消すと笑い話がほしくなる
傷つけぬ言葉探して過去を問う
古時計振り子を止めぬネジを巻く
酌きこぼす酒に嬉しいことがある
また同じとこで間違う母の歌
新鮮と温みを朝市からもらう
ポケットの中で騒いでいる小銭

冬葉
柳宏子
信治
頂留子
甘平
恭太
史好
健司
千代三
壮之助
好子
律子
恒明

鬼遊
のばら
さかえ
鬼焼
晋吾
白李
水客
五月
柳宏子
武庫坊

夫婦茶碗いづれ一つが残る日も
ころびばてれん残りの雪は柿の木に
釈迦の掌の中の縁を逃げられぬ
これも縁サテそれからの話です
苦勞した頃の縁を忘れない
お城への坂道がある石地藏
金積んでお蔵に入れたスキヤンダル
縁がないので真正面を見て歩く
大臣にも口止めきかぬことがあり
地獄まで誘う女に出逢わない
縁のない話エイスとN T T
灯油まだ今晚はある独り者
わかあゆ川柳会

春 蘭 作 二 郎 美 幸 凡 九 郎 浩 一 郎 萬 的 射 月 芳 白 兎 雄 次 郎 雀 踊 子 柳 伸 小 路 白 汀 報 翠 星 聖 子 世 似 鈴 江 英 子 ヒ テ 子 かつ 子 智 重 子 惠 美 子 藏 栄 は る み 清 泉 白 汀 熊 本 川 柳 会 有 働 芳 仙 報 幸 子 昭 代 俊 進

言い切つて終えれば何も残らない
親馬鹿が子を天才にして終い
演説の裏も知つてゐる胸のバラ
おなまはベットの名前たずねられ
逆光の涙は見逃すまいとする
裏方の汗には拍手届かない
打吹川柳会 奥谷 弘朗報
幾度の脱皮か話せる歳になり
日の丸に理屈はいらぬかしら右
化石から新人類の骨ぞろぞろ
貧しくて暮したときの美しさ
卓上花豪華に中味のない披露
海猫が夏のしらせを持つて来る
自画像をかくと案山子になってくる
自民党支持し不況に社を追われ
春一番の便りに一枚脱ぎ捨てる
思わずに口突いて出る感嘆詞
安定剂安易に人が飲む怖さ
人間をからかつて降る春の雪
先輩を思いへ理屈ゆずつとき
チビッ子の芸は大人をたじろがせ
粗大ゴシ勇氣を出して生きてやる
趣味の道友と握つた手が温い
氣力ある花でござんか赤く燃え
円満な夫婦で顔も似て見える
後を押す妻が頑張る氣にさせる
むらくも観桜句会 藤井 明朗報
もう一度まんざらでない水鏡
街へ来ていきなりピラをつかまされ
うす味で娘が氣遣う老いを知る
旅芸人風になる日の舞い納め

緑 アヤ子 宵 草 謹 爾 芳 仙 緑 朗 報 白 峰 柳 風 規 仔 紫 映 蛭 映 温 子 佳 女 晴 月 菊 枝 高 二 亮 代 吉 朗 梅 朗 節 子 孝 美 弘 朗 明 朗 報 緑 之 助 紫 香 雀 踊 子

四季のある国に暮して花愛す
愛は過去憎しみだけが残る胸
幕の古い舞台で今日も妻と舞う
鏡から背腰のばせと朝が出る
胸のうち明かして見たし花の酔い
人生を短く華麗に舞い終える
招かれて洋食氣になる老い二人
眠い時の父は仏の顔になる
胸奥に花の咲かない木が育つ
蝶に会う約束がある花の種
水鏡烏に黒い自負があり
苦勞した過去は語らぬ母の胸
この味だやっぱいいいようす味で
くやしき胸にたんで丸く住み
招かれて今日は嬉しい帯をしめ
ほんばりに浮いて舞うよう花の精
バーゲンの店員笑顔で客招く
うす味へ酒と味りんできかす味
うす味をすすめる嫁は看護婦さん
招くのをつつかけてたがうさ型
ままごとの客に招かれてガザの上
客招き心そわそわお台所
鏡面へ恋のポエムが咲いて散る
ひらひらと舞って蝶々ラブコール
札束が舞っているよな毛皮ショー
招く子があリ上京の荷がはずむ
肉親を招く新居に風がよか
うす味に馴れて醬油が長持ちし
しやがみ込む街の花屋の店先で
団体にうす味すぎる京料理

町 紅 たつ 苗 早 苗 房 子 義 良 義 良 峰 雪 青 湖 昭 二 桂 子 き み え 多 賀 子 よ し 子 武 衛 吉 野 富 子 ゆ う 子 千 里 み どり 千 郎 由 郎 八 重 子 な つ え 瑞 枝 三 喜 子 忠 三 竹 雪 巡 歩 ふ み 女 花 子

Gパンの舞妓が好きなたこ焼屋
うす味に愛の心の嫁の味
眠い目に妻が手を貸す膝枕
帯ぼんと叩いて鏡の中をぬけ
胸に棲む人ときどき語りあう
うす味が恋しくなつて旅終る
根氣よく鏡の前で抜く白髪
灰が舞うあれば国鉄の切符
眠い朝蛇口は知らぬことなのに
しのび逢う女が招く酒の味
花愛す娘ならお嫁にもらおうか
眠りたいただ眠りたいそれだけよ
春眠へ小鳥はとうに出動し
あの人の瞳が鏡の中にある
喜びを映しきれない三面鏡
招待状数を定める祝い鯛
年老いて眠い時代がうらやまし
街行けばワインドばかり覗く女
青い鳥求めた街にも風吹く
獅子舞が絵になる長閑なお正月
法悦へ舟をこぎ出す大般若
議事堂は眠いところであるらしい
教え子が招く恩師の丸い背な
舞い上る鶴に乗りたい雲の果て
春のどかつがいの蝶が舞っている
知事さんは変れど変らぬ花の街
満足感の鏡かと黄い
美しい朝の風に散る風に舞う
田舎街銀座通りがちゃんとあり
鈴の音に仁王も眠い花の雨
鏡台が素敵素敵とそそのかす

幸一 久代 代仕男 緑水 文子 文子 文子 勝子 克子 勝子 幸子 幸子 百代 三津江 和幸 延子 ヤス子 昭義 独仙 梅園 秀蔵 林蔵 日出子 舞吉 翠星 昭子 蚊声 三男 鶏生 弘朗 正朗 芳子

花びらが舞うてる中に女行く
Y・F・C川柳会 丸山よし津報
家具の跡畳に残し引越荷
癌の夫畳一帖持つてゆく
畳一目的のびた日ざしに花が散る
畳替え一番先に猫が寝た
大掃除除塵は男の手にまかせ
思わぬにへそくり見つける畳がえ
母を呼ぶ畳の部屋を増築す
川柳さきやま 臨田 米朝報
富士山に未練を残し孤児帰る
彼岸そこ未練がましく雪が降る
香煙へ未練たち切る弥陀の鐘
あの人の未練が綴る四季の詩
錆びついた鎌の未練を研いでみる
熱心な化粧に三面鏡が不思議がり
熱の子を祖母にあずけた百度石
減反が続きだんだん冷める熱
熱弁をふるって友を煙に巻き
ロボットの滅私奉公テストされ
三人三様それぞれ個性の出るテスト
テストない子供明るい春休み
芽を出した持病が春を戒める
芽を摘んだような気がして白い夜
春や憂し芽吹く音なき老いの鬱
芽が出ないまま大阪の月に老い
川柳塔唐津支部 久保 正敏報
二の舞を踏んで影から握手され
椿散る野鳥忍者の術を知る
船溜り噂はやはり沖のこと
偏西風黄砂がすむよ沖の島

明朗 豊平次 保子 山中 節子 房子 紅葉 よし津 米朝報 金之助 つや子 和子 靖子 エキオ 千代子 文平 法齊 可江 テル 静子 房子 富美 けう也 可住 正敏報 四郎 掬水 高明 朴竜

養老の水を供えて父の膳
凡人で火中の栗に縁がない
梵鐘の余韻の中に花が散り
海溝が動いて今日も震度4
家を買いたい老いて人生振り返る
美しく乱れて欲しい女と酌む
川柳大阪 山下みつる報
均等法僕にはメシが炊けません
二三ヶ所迷路が増えて新ホーム
空部屋を二つ残して子は果立つ
頂上が好きで男で傷だらけ
これお前背すじ伸ばせと春の風
恍惚の子約はしない寺参り
余部の長い歴史に大汚点
沈黙を金と信じて疑わず
浜寺の松栄光を秘めて生き
医者よりも南の風が腰に効く
南風ポケットベルも惚けている
南国の明るさ見舞いの籠に盛る
南極の富は掘らせぬ雪氷
委任状持参で大役持つて来る
委任状いたかくまでの低姿勢
紙オムツ二百円程の母性愛
添い遂げる委任状は妻が持ち
七夕の宇宙ロマンを飾る笹
豆博士我が家で作る宇宙船
宇宙見たいや人の争いバカみたい
逢いたい女天女のうしろから宇宙人
知らぬまに宇宙基地から背番号
宇宙より足元がため火山学
押出しの強さでもめ事委任され

旭恒 虹汀 久仁於 あき 香代子 正敏 重人 比呂志 喜醉 雅巢 希久志 もとみ しげお 金太 笑風 一介 本蔭棒 天平 柳弘 柳弘 鉄心 三千雄 遊心 魚住 英泉 哲流 虎醉吟

口紅の誤解とくのに苦勞する
静岡市川柳同好会

永倉

僕川報

醉舟

年金の暮しで銷好になり
逆境に友の手紙が胸を打つ
老妻の素直な返事氣にかかる
吉報を郵便で待つ日の長さ
誉められてそれから行儀崩せない
大胆に脱いで我が家のありがたさ
置炬燵夫婦で囲む指定席
相槌を打つと味方の顔になる
孫の絵が思ひの儘におどつて
旅の宿友の軒で寝付かれず
パン食が茶碗と箸を邪魔にする
つり銭が溜ると使う貯金箱
口に蜜腹に剣ある人が立ち
無意識に水と空気を吸って生き
目の保養だけで終った特売場
主婦の座を下りて多彩になった趣味
覚悟きめ来たら居心地悪くない
騙されたあの親切は異だった
川柳わかやま
堀端
三男報

孝平 孤秀 金吾 紀定 定次 やす たま たき きん 庚子 喜平 つね みつ かず 静代 千代 まつゑ 三男報 いわゑ 栄美子 雅子 スミ 湖風 佳秋 凡九郎 鬼遊 作二郎 幸

ひよつとこの面は内から濡れてくる
面打ちの膝の木屑はわが吐息
能面をとれば乾物屋のおやし
首を洗つて男の顔を取り戻す
いたわりを受けるかと男傷がつく
花粉症の男の影はうすうなる
猫舌の男と握手したくない
通り過ぎた男をおもつ亀の池
陽だまりに男の夢が乾してある
男冥利につきる言葉の走り書き
花活けて女は和解待つゆとり
何事もすんなり言える花の下
花散つて元の夫婦になつてゆく
仏壇の花長男が買つて来る
花便りとても逢いたい人がいる
街の娘に電話で知らず花見頃
花束をもらう手筈はできている
流れ星ながれて乱をひとつ生む
満天の星血縁を欲しがらぬ
星になるやさしい母の送り火よ
罪ひとつ冬の銀河へ押し流す
耳を洗つて愛を深める散りれんげ
川の激しさ川の大きき愛だろ
仔牛飼う少年の眼が光つて
子守唄があふれて泣き止まぬ
愛を盛る皿を一枚娘にもたす
艶が出るまでこれからの机拭く
魔術師のこれから龍を乗りまわす
これからの地図を二人で書き直す
これからの余生へ過去は斬り捨てる

紀久子 左久良 と金 武雄 登志代 忠雄 静生 たつお 信秋 水客 千万子 照子 月子 武助 英子 守 藤子 恵美子 芳朗 雀踊子 はつ絵 好啓 天笑 萬的 正子 裕美 道子 佳明 芳子 忠 狸村

これからは氣隨に生きてほしい父母
これからは注目されている祝辞
これからはあなたについて行く決め
これからは母のやまゐりによい氣候
これからは母々おるの縄梯子
これからの芸は女房に見せられぬ
これからは息子の空だ翔んでみろ
富田林富柳会二月句会 池
狙われるへソクリも無し平和なり
思い切りのをしほつて夢狙う
狙われているとは知らぬ金魚鉢
狙つても無理なポストと知る他人
老夫婦こころの窓に鳩を飼う
幸せを逃したくない二重窓
窓締めて多情多恨の兎小屋
目ざましが鳴つて私を連れ戻す
もういくら振つても鳴らぬ夫婦鈴
お向いの窓が氣になるシルエツト
もう消える鈍行に乗り窓を拭く
窓越しに手の届かない物ばかり
かしわ手を鳴らして神様振り向かせ
面影に胸が高鳴る似てはる
チンと鳴るレンジへ妻はこゝろ寝する
スキヤンル狙うフライデーパンチ浴び
合格を狙う受験へ夜が更ける
窓を開けると大きくなって行く私
海が鳴る父をうばつた北の海
胸の鳴るはるかな想い母想い
富田林富柳会二月句会 池
怒り事聞かす女の含み針
減税の裏に道あり風見鶏

白光子 白漢子 笑女 幸代 紀世 勇太 保 美津子 維久子 花梢 富美子 曲ん手 美緒 優 泰子 文次 莊次 富久一 正信 中勇 美稚 山久 文子 花子 森子 美房 岳人 森子報 曲ん手 正信

たつぷりの母乳泣いているミルク
あだ名から人間性を考える
待ち合せあだ名通りの顔で来る
同窓会あだ名で呼べぬ人もいる
たつぷりの湯舟に浸かる冬の旅
口が先たつぷりついで縄のれん
月の裏自由なうさぎ餅をつく
花束を捨てる楽屋は見せられぬ
たつぷりと何でもある世せちがらし
会釈してあだ名しか出ず四苦八苦
裏ばかり読んで世間を狭くする
サラリーマン表も裏もない暮し
泣きごとを言うてたつぷり溜めている
小食の膳になつぷり薬置く
裏の裏よんで世渡りうまい人
根廻しも裏も無用の無位無冠
予感どおりくじがはずれて平穩で
たつぷりとあると思つていた油断
星空をいつも裏切る私の瞳
裏話みんな鼠に聞かれてた
裏町の大家無口で貯めている
裏表乗り換えながら生きてます
たつぷりの愛が重荷となつてくる

大原川柳社

土居

耕花報

維久子 静枝 柳太 富美子 トシエ 義雄 文子 優 喜代 田中勇 伊庭勇 文次 富久一 山久 章久 美緒 泰子 森子 美房 岳人 凡九郎 花梢 直二 あすなろ 正子 はるみ 寿恵子 睦子 こふゆ

アタックをなぶる小憎い春の風
送り出す荷物は娘より二日前
指のない電話に指切りさせられる
押し絵から亡母蘇る嫁の手に
石橋を一番終りに父叩く
げんまんの小指が疼く過去を持つ
透かしてもガラスに明日は写らない
フクロウよ鳴くな亡母かと間違える
つまずいた小石が油断たしなめる
この辺でまわれ右する影法師
春一番うなりの音とやってくる
ドクターが今が峠と言うて去に
薬草を尋ね歩いて祖母達者
パンジーの苗に小さな春の詩
鉛筆があの日秘密知っている
タオル絞ることも苦手な娘にあきれ
伝えたい一言胸に温める
マイペース父のおんな靴の音
尼崎いくしま川柳会 上田 佳秋報
私大卒混って傘寿いたわられ
卒業式今日の息子がでかく見え
卒業へ賛辞惜しまぬ車椅子
卒業の仲間が保険のことで来る
卒業の何処で鐘が鳴っている
卒業証書よつぷり大人になる気分
役付の名刺ノルマを背負わされ
昇進へちよつとはにかみ出す名刺
肩書の名刺の中でする芝居
夫の名刺がちらちら覗く趣味の会
通訳にテンポのずれた笑い湧く
春に光る泉見ている石地蔵

敏子 美代子 たけよ 悦子 妻理 朝花 耕泉 智玉 辰江 宮子 やよい きしこ ゆくよ みすえ いさむ ひでの 佳秋報 美代子 ときお 園歩 白溪子 静夢 晴手 曲山 山久 定人 かず子 かすみ 萬的

桐の下駄四月の雨に母を恋う
湧き水のそくだけ雪のとけてゆく
甘酒を飲みすぎた孫足とられ
父帰る日待つてかい飯茶碗
風花へ道路工事のガードマン
寒牡丹男を軽く見ぬまよつに
屋根修理気かりなまよつ雨季に入る
雨の日の下界湖の水騒ぐ
妻の座に卒業がない割ぼう着
哲学をかじって雨の日は籠る
車椅子押して見に行く事故現場
卒業へ化粧講座の輝く瞳
好きやから飽きもしないで喧嘩する
上も下も見ればきりなしどこ見るの
卒業に父のレールが待つている
疑いをもたない妻はだませない
老人の鼻はメガネのすべり台
国鉄が無くなり鳩は旅に出る
カラスにも迎えてくれる森がある
気の強い女と暮らす吹き溜り
郷愁を誘う市場の露のとう
尼崎をはま川柳会 上田 佳秋報
匂うだけで膝が崩れる花の席
この春も同じ出番で花に酔つ
花の宴裏切り雨がぼつぽつと
裏切りもあるだらう耳を掃除する
指切りをした日女に責められる
裏切った女がいつも前に行く
決心し止めた煙草にまたも手が
決心をつけて一人の旅に出る
決心をつけて男は振り向かず

静江 はつ絵 良征 紫香 貞子 年代 伊升 杜影 柳蔵 保蔵 春子 風云児 正一 一郎 文夫 作郎 佳秋 牧郎 歌子 弘治 十四郎 江美 夢之助 定人 武庫坊 向西 よしつぐ いわを

決心へ今朝の茶柱信じよう

決心を鈍らせている子の笑顔

虎の子の預金利下げでまた目減り

いそいそと飲む会に行く飲めぬ父

近松の墓がさびしい雨の午後

遠目にもその人なりし踊り振り

両方の涙で終った甲子園

手鏡にうつる夫がだらしがない

三寒四温母の使いがまだ見えぬ

翠洋会

絶景を写真屋暮しの糧にする

気の遣い夫婦になれば合いもする

風景画いつか見たよな気がします

夢に見た風景に会うひとり旅

改札でブザーが鳴って通れない

八起きめを信じて後押す夫婦坂

夕暮の風景だっためぐりあい

風景へ臨時ニュースがまた入り

春愁の彩で見ている風景画

花見する人を遠くに畑仕事

車椅子名残り惜しんで通り抜け

泣いたあと一転舞台は花の山

胸明かし冗談でしよう電話切れ

投票所目が皿になる立会人

信号は青に子供の風景画

父と子の居る風景に鳩を描く

桜前線カラオケつれて北上す

志野焼の壺にこでまり揺れている

久びさに冗談もでる病み上がり

絵の中に時代おくれのばくがある

京都塔の会

松川

杜的報

鬼遊

善信

ママの入学式ではおまへんで

杜的

すみ

バーゲンで思わす買った不良品

敏正

生きたとは何んとしんといことだんな

章久

歌子

歳時記に全く合わぬ床の軸

白李

啓蟄へ生きる力が顔を出す

公一

貞吉

永かった孤児の笑顔に老いのいろ

英子

生きのびる戦いもする蟻の列

曲手

文夫

お喋りに夢中サンマが焦げている

風云児

障害があっても生きる子は立派

晴風

寅之助

寒暖へ春待つ会話の散歩道

達子

花粉症春のさきもけし感する

綾珠

敏秋

退職後校了という旅探す

和友

いい気候何か仕出かしそうな子ら

柳宏子

佳香

廻りあわせ損する役が適役で

幸村

北帰行 鶴が飛んだら温くなり

恒明

紫香

まだ少し女でいたい髪洗う

芳子

灰皿に深い思案が捨ててある

新造

牧郎

命ある日まであなたと戯れ言を

紅陽

思案する眼鏡はおでこの上に乗る

雀踊子

兼治郎

メンバーの中の一人が振る反旗

紫香

し尽した思案もやつと目途つかみ

久し

飛鳥

読みだせば親も夢中になるマンガ

実男

九木橋思案するから恐くなる

しんじ

萬里

終電車あくびあくびの客ばかり

巨詩

推薦の名刺に添えてある力

勝美

良江

紋切調話にあくびかみころす

美穂

力添え出来ぬがそつとしてあげる

文秋

東雲

初孫のあくびもくしゃみもたうれし

陽露子

男など掃く程あると力添え

慶三

為子

保育器であくびをのせて生きている

花代子

全身で憎まれ口を言うおんな

柳伸

春子

生欠伸不眠の夜の足が冷え

笛珠

非の打ちようもない程憎い出来上り

智恵子

美津枝

反感をあらわに欠伸かきさない

水客

憎いのはその気にさせた甘い口

頂留子

君子

辻説法売上税に花が咲き

葉子

愛の鞭憎い日もあり子の駄

喜風

満女

仇討ちまんじゅう売ってる鍵屋の辻

明代

道中もくせい川柳会

正坊報

文子

辻説法売上税に花が咲き

麗水

田中

喜風

さと美

敵も女もいない辻に風起こる

武庫坊

田中

喜風

照子

曲を曲がって廓言葉がころげてる

白溪子

田中

喜風

綾子

辻二つ曲がってそれから迷いだし

杜的

田中

喜風

楓子

辻曲がるとこで手を振るランドセル

求芽

田中

喜風

登志美

石の下こんなところに生きる虫

庸佑

田中

喜風

みつ子

生きてます春には春の帽子買っ

善信

田中

喜風

いつを

生きてます春には春の帽子買っ

善信

田中

喜風

鬼遊

生きてます春には春の帽子買っ

善信

田中

喜風

杜的報

生きてます春には春の帽子買っ

善信

田中

喜風

あこがれのバリ泥棒も掏摸もいる
 あこがれの雲に風船追いつけず
 うしろ姿があこがれた夜の川
 自画像へ少しあこがれ入れて書く
 あこがれの都会に疲れたかたつむり
 あこがれの都会に魚のいない川
 あこがれへ遠く冷たい敷布団
 化粧として時間に飢える共稼ぎ
 化粧した男の恋に嘘がある
 春彼岸今日は私の誕生日
 枯れ草の土に息づくふきのとう
 瘦我慢もうしない胃が痛むから
 双方に稼ぎがあつて離婚する
 日本人米寿白寿と洒落が好き
 口癖に俺は冬死ぬ風の花
 フルムーン分かちあえない傷をもつ
 すそ分けへ買い足しに出る春いちご
 こどもの絵と森は喝采ばかりする
 春やなあー鳥獣戯画も動き出す
 川柳塔まつえ四句会 恒松 紅柳報
 玉手箱愚痴一ぱい詰めて鍵をする
 物言えは唇寒し鍵をかけ
 鍵穴をそつとぞいた春の風
 証人が鍵を握つたままに逝き
 自閉児の心を開く鍵は妻がす
 家庭の和こころの鍵は妻がもつ
 合鍵を渡してくれる仲となる
 あけひろに心の鍵は使われぬ
 合鍵で開かぬ心のわだかまり
 智恵子抄鍵などいらぬ夫婦愛
 あの人襟に私の色を巻く

とおる 満喜 年代 子 風雲児 惠美子 萬の李 白美 さと美 よ志子 英子 勝一 紫香 俊作 秀男 花代子 如洲 杜的 紅柳報 静翁 玄艸 ノブ 笑円 昭二 芳子 愚童 友子 翠星 日出子 妻

衿足に見染めた愛の芽が生きる
 宮仕えの襟を終電車が崩す
 夜風して襟かき合はす花の下
 還暦の衿は赤色足して着る
 衿元が崩れ女の目が炎える
 衿あしに騙され男つて行く
 衿つけを済まし一服茶をすする
 戻り寒襟を立てる君を待つ
 衿あしへ一片二片散るさくら
 ひとすじの涙女傑も持っていた
 ひとすじに終身雇用を走らされ
 ひとすじの涙に過ぎた日を懺悔
 ひとすじの思い届かぬ花時計
 ひとすじに生きて世間にうとくなり
 ひとすじの流れ絵筆は春にする
 武骨な手農ひとすじに老いし父
 ひとすじになって未来に伸びる夢
 ひとすじのレール鈍行赤字線
 愛ひとすじそして孤独を噛みしめる
 この鼓動剃刀(そり)が瞼の下を這う
 企みもない散髪も春うらら
 さつぱりとさせた頭で風邪をひき
 散髪と医者が嫌いで酒が好き
 散髪屋手頃な昼の椅子に寝る
 散髪屋で一気に喋るストレスで
 パン口に遅刻しそうな靴をはく
 一切のパンが創つたメロドラマ
 子の夢を育ててパンの味を知り
 あんぱんの元祖税金甘くみる

蒼流 千代 秀子 満江 寿美子 静江 雪美 美治 嘉寿子 芳枝 鳳人 みえ 雄々 ちかし 正朗 登美也 代仕男 貢範 静恵 文子 緑之助 多賀子 きみえ 桂介 荒枝 瑞歩 巡吉 舞三 長子 壯樹

暗い過去思い出してるパンの耳
 ゲートボール嫌いなパンがうまかった
 ツツパリに母が手古するパンの耳
 川柳泉尾 吉川 寿美報
 ボケてても教育勅語さきり言う
 ホワイデー義理のお返し贈られる
 触れ太鼓なにわの空に雪が舞う
 ほかほかの肉饅頭冷めた立ち話
 枯山水僧侶素足で川を書き
 暖冬で二の字二の字も縁遠し
 冬から春バトンタッチの名残り雪
 洗濯物干す背に暖い春陽ざし
 悲しみを見つめて耐えた白い足袋
 どのランクにいても切ない親心
 のほほんの顔はいよいよ丸くなり
 喋る事ないが寄り添う老夫婦
 こうすればこうなる金という力
 バス停に並んだ手にはひなケーキ
 残業のバス停月に労われ
 バス停の屋台おでんの湯気恋し
 一段と美人揃いの月の宵
 春の宵相手がほいてく一人酒
 忘れたい傷が疼いてくる今宵
 コサージュを付けてドレスの七変化
 純白のドレス愛の鐘が鳴る
 吉日のドレス返してお茶にする
 女から母に戻ったドレス脱ぐ
 春の彩ドレスの裾が踊り出す
 ドレスアップ青春の手藝がよく弾む
 川柳はびきの 田中 隆二報
 怪我をした一人暮しの老いの愚痴
 与根一 鶴丸 叮紅 葉子 広子 トミ子 伴子 美南子 清子 和子 弘子 尚弘子 シマ子 はつ子 満州子 文子 美代子 素子 白水 光子 義一 淑子 シメ子 キヌ子 弘子 敏 昭子 美子 寿美 清子

凡人の傘寿こんなに祝われて
ワンスайд今日も女神に牛耳られ
今昔に嫁の立場を悟る日々
訳聞けばそれ程でない悩みごと
負け惜しみ聞えてならぬ電話口
退職金銀行綱引するような
拾い物忘れた頃に来る通知
手拍子が揃うて棟上げ春の唄
赤字でも中流意識捨てきれぬ
旧友に逢いたし光子河太郎
一服の煙草へ意見まとめられ
躰いた石をもいちど踏んでおく
チャルメラの音色がにじむ臘月
ロボットに人情を説く寅次郎
手造りの言葉一つで値が上がる
植木市春の手ざわりそつと見る
頑固者孫には目尻さげ通す
オープンビルのビルがお空を狭くする
風に凧もつてゆかれたあとの糸
青い目も市松も葬る人形塚
移された一番あとの重い風
まだ書ける筆を粗末に筆供養
寒がりでござますお戌さまのこと
口止めをせねば壊れる壺がある
背信へ夜の鏡が妥協する
赤字でも夕げに母の意地を見せ
影法師月も羨む二人連れ
飄々と雲道連れに山頭火
人形を連れて博多の女が来る
中国の孤児は信じる父祖の国
力こぶまだまだ野心あるらしい

蛙声 忠宏 淑子 志洋 末一 昭子 健三 繁男 重樹 美子 弘子 トミ子 隆昇 憲太郎 司優 白敏 水村 胡村 隆二 吐来 ダン吉 たけし 寿美 比沙湖 石橋義一 重人

寿きが続く返信春うらら
遠き日に信女と刻まれ姉二歳
迷信が荒稼ぎする大安日
信号が黄色でためらう隙ができ
引く糸を信じて風の空高く
三幸川柳教室 桜井 千秀報
どん底で爪先立ちして見えた春
接近を少しためらう長い爪
染められた爪にくらうが乗っている
一人前爪も揃って呱呱の声
マニキュアを拭いて女の未練断つ
あの人爪の垢なら呑んでみる
爪先が思案に余る勇み足
足の爪ヨガのポーズになって切り
ネイルフアッション飢餓には遠い国のこと
透明のテープにそつと繋かれる
八方美人両面テープのような人
西国一番一詠歌テープで聞かされる
透明のテープに汚れ染み出る
菜種梅雨般若心経のテープ聞く
作業着がテープカットを遠く見る
もう一度折返しそつとテープ切る
午前五時妻のテープが廻り出す
超音痴カラオケテープが熱を出し
スラブさめぬ距離に仏も鬼も住む
触れあえる位置で味わう疎外感
非情だが見事アップで捉えてる
買い物主婦へ政治が近くなる
近づけば逃げて行きそつとシャボン玉
近づいて嘘の涙もみてしまひ
断髪式介添役の目もつるみ

満洲子 広子 三千代 美代子 伴子 敬子 愛子 保子 孝子 晏昭 忠昭 茜 千香子 千秀 千枝子 幸子 美子 かなめ 布未子 正吉 百合子 みね 文子 靖子 鉄治 育子 和子 桂香 玉枝

鉄研ぎ今年の暮れは妻ひとり
良く切れる鉄切れないこの頭
未練断つ鉄求めて旅に出る
花鉄いつかは嫁に出す仕度
孫が来る当分の目見ぬ鉄
川柳藤井寺 赤木 和子報
老いねど旅は桜の咲く季節
四月馬鹿後でペロリと舌を出し
心配はすまい老後をケセラセラ
倦怠期妻の欠伸に妥協する
節つけて欠伸している旅帰り
断わりもせず台風やつてくる
上首尾と後を向いて舌を出す
落丁に似た人生にある不安
いいポーズ合格出来た春の顔
後始末心残りばかり余り
五百羅漢欠伸して居るだらう
同じ字が同じ形でない個性
ハンカチで欠伸を包む令夫人
ジパンの夫婦に朝の歌がある
欠伸嚙み殺して春の仁王門
やんわりと主人のせいにする電話
ネクタイも二人で結ぶ新婚さん
春彼岸善男善女スリもおり
お互いに過去には触れぬ再婚者
片咲きの椿が目立つ御堂筋
妥協してから言い訳をくり返す
ネクタイがゆるみ行儀が悪くなる
断られないよう先にする打診
肩落とす姿を見れば断れず
嫁ぐ娘の最後の雛を飾る父

静代 当行 隆高 智水庵 ときよし つかや 治子 須美 重樹 かな女 吸江 繁男 与呂志 三郎 美代子 志洋 本蔭棒 美房 祐二 正人 風来坊 秋園 末一 みのる 伴子 麻雄 和美

— 90 —

6 月 各 地 句 会 案 内

	日 / 時 及 び 題	会 場 と 投 句 先
尼 崎 いくしま	12日(金) 午後1時半より 錆びる・大胆・自由吟	サンシビック尼崎 阪神電車尼崎下車南西徒歩3分 〒661 尼崎市南清水字稲荷247-21 田渕定人 句会費 300円 投句料 60円切手 3枚
川 柳 わかやま	7日(日) 午後1時より カーテン・責める・紙	紀の国会館2F (県民文化会館西隣) 〒640 和歌山市駕町15 野村太茂津 句会費 300円 投句料 60円切手 3枚
西宮北口	8日(月) 午後1時より 台詞・染める・自由吟	西宮市中央公民館 阪急神戸線西宮北口駅南出口歩5分 〒661 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代 句会費 300円 投句料 60円切手 4枚
菜 の 花	10日(水) 夕6時より 線路・魔法・泣く・マダム	八尾神社境内西郷会館2階 近鉄大阪線八尾駅南西歩5分 〒581 八尾市弓削町南2-141 飯田悦郎
川 柳 塔 まつえ	13日(土) 午後1時半より) 母・マル優・腰	慈雲寺 松江市和田見町 〒690 松江市雑賀町1686 恒松町紅 句会費 300円 投句料 300円(60円切手可)
堺川柳会	13日(土) 午後1時半より ときめき・毒・友・泥	堺総合福祉会館 南海高野線堺東駅下車堺市役所西入ル 〒593 堺市堀上緑町2-9-2 河内天笑
もくせい 川 柳 会	15日(月) 午後1時より 化石・酒・気まま・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急宝塚線曽根下車東南歩5分 〒561 豊中市島江町1-3、5-801 田中正坊
高槻川柳 サークル 卯 の 花	18日(木) 午後1時より 贅沢・閉じる・自由吟	高槻市民会館402号室 阪急電鉄高槻下車歩5分 〒569 高槻市桜ヶ丘北町3-19 辻 白溪子 3周年記念句会につき投句料免除
南海電鉄 川 柳 会	18日(木) 夕6時より 梓・漆・グラス	南海会館ビル内南海電鉄本社ビル地下食堂 〒542 大阪市南区難波5丁目1番60号 南海電気鉄道(株)不動産管理部管理課 広井季雄 句会費 無料 投句料 60円切手 1枚
富 柳 会	18日(木) 午後1時より 雨期・嘘・梅干	富田林市中央公民館 〒584 富田林市南大伴353 池 森子
南 大 阪 川 柳 会	19日(金) 夕6時より 不況・向く・有能・ルーズ	寺田町高松会館 国鉄環状線寺田町裏駅南100米 〒544 大阪市生野区生野西1-5-2 金井文秋 句会費 500円 投句料 180円(郵券可)
川 柳 ねやがわ	21日(日) 午後12時より 中心・秘密・薬・自由吟	寝屋川市立総合センター4階 寝屋川市駅下車京阪バス総合センター前下車 〒572 寝屋川市春日町9-9 高田博泉 句会費 500円 投句料 60円切手 3枚
駒つなぎ 川 柳 会	22日(月) 夕6時より 告げる・氾濫・説得・寝相	寺田町高松会館 国鉄環状線寺田町駅南口下車 南へ1丁3筋目左へ駅より歩3分 〒545 大阪市阿倍野区天王寺町北1-3-11 津守柳伸
川 柳 東 大 阪	27日(土) 夕6時より 雨・珍しい・椅子・招く	東大阪市社会教育センター2階 近鉄布施駅北へ5分 長堂小学校隣 〒579 東大阪市新池島町1丁目4-14 齊藤光利 句会費 500円 投句料 60円切手 3枚

★特に記載なき場合 句会費 500円、投句料 300円(郵券可)、各題3句以内

原稿送り先(〆切・毎月20日 予め決定している場合は何ヵ月分でも結構です)

〒596 岸和田市荒木町1-29-1 宮園射月芳

●募 集●

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
★水煙抄欄の投句は一般誌友の方です。

八月号発表 (6月15日締切)

川柳塔 (10句)	西尾 栞 選
水煙抄 (10句)	黒川 紫香 選
愛染帖 (3句)	橘 高 薫風 選
課題吟 (各題5句以内)	
「盆」	小野 克枝 選
「闇」	林 荒介 選
「庭」	山根 いつを 選

★愛染帖・課題吟へは同人・誌友を限らず。
★用紙は川柳塔社柳箋を、使用ください。

九月号発表 (7月15日締切)

川柳塔 (10句)	西尾 栞 選
水煙抄 (10句)	黒川 紫香 選
愛染帖 (3句)	橘 高 薫風 選
課題吟 (各題5句以内)	
「責任」	安平次 弘道 選
「拾う」	浜本 久仁於 選
「隣」	高橋 千万子 選

6月の常任理事会は1日(月)

〒545 大阪市阿倍野区三木町二一〇一六
ウエムラ第2ビル202号室
発行所 川柳塔社
電話 (06) 691-6914 番
振替口座大阪 8-133326 八番

定価 五百円 (送料50円)
半年分 三千二百円 (送料共)
一年分 六千三百円 (送料共)
昭和六十二年五月二十五日印刷
昭和六十二年六月一日発行
編集兼 西尾 巖
印刷所 藤原童心社

本社6月句会

日時 六月八日(月) 午後六時
会場 メンズファッションセンター3階
東区内本町一―一 電06・941・1918
地下鉄谷町4丁目下車(2番出口)交差点西南角

兼題 「争う」 津守 柳伸 選
「檻」 堀端 三男 選
「器用」 金井 文秋 選
西田 柳宏子 選

席題 二題 当日発表 各題三句以内厳守

会費 五百円

★投句は柳箋(4cm×19cm)に一葉一句。
各葉毎に裏面に必ず氏名明記。
投句料 300円(60円切手5枚)同封のこと。

川 柳 塔 社

7月句会は路郎・葭乃・生々庵追悼
川柳大会です (詳細は表紙裏)

暑中広告受付

★一口 千円 (タテ7cm・ヨコ23cm)
本誌「柳界展望」の一段(二、五〇〇円)
(一頁)一萬二千五百円
★原稿締切・6月25日必着
★原稿及び送金先
〒581 八尾市中田二二二〇二
高杉鬼遊方

川柳塔社会計室

編集後記

栗原 隆

☆五月の連休は家族のサービスマンとなった。憲法記念日には、妻と奈良県五所・五条の寺を回わる。古い歴史を持つ山緒ある寺々に感銘したが、国民宿舎を覗いて、夏の勉強会に適していることを見届たり、何でも川柳に結びつけるのが習性となつてしまった。四日は二人の孫を連れて宝塚ファミリーランドで遊ぶ。子供たちを遊ばせた時から四半世紀を経て、まるで同じことを繰り返している自分をおかしく思った。こども

の日には神戸の中央球技場へ出向いて、甲南大学と学習院大学のアメリカンフットボールの定期戦を見る。アメフトの句を目指して五年ほどになるが、まだ一句ものにも出来ないでいる。☆近頃の世の中は何処かおかしい。それが川柳作品に顕著に現われて来た。

☆高野山の追悼川柳大会の前夜宿泊申し込みは、十日現在で七十名を越えた。担当者は受け入れに遺漏なきよう、参加者に納得して頂

ける大会を目指して準備を進めている。お申し込みまだの方は早速の手続きをお願いします。(薫)

は、宅地として高い値で売られ、買い主は、住んでみたくなる街／駅から歩いて数分／松造りの一戸建／銀行ローン可／等と、早速高級住宅区域に仕立ててしま

☆時の川柳社主幹の小松原爽介氏の句集「草根」は著者らしい題名だと思ふ。近鉄バッファローズのエイースで鳴らし、「ピッチャーは投げたらあかん」の名台詞を吐いた鈴木啓丞元選手の「草魂」を思い出させる。

また、麻生路郎先生の草の根よ僕も闘ふ草の根よ

求めている。聞くところによれば、コメの価格が今の半分か、それ以下になるらしい。消費者の一人として大変結構なことだが困ったことが一つある。

▼晴れたある日、そとが騒がしいので窓を開けると、園児の団が田圃におりて、れんげを摘んでいる。自然と遊ぶ園児の姿は、れんげの花とともに可憐で美しい。

は女子(めこ)、杓子は若子(じゃくし)がそれぞれナマツたもの、つまり女も子供も、誰れもかれも皆、という意味になるというのである。

☆高野山の追悼川柳大会の前夜宿泊申し込みは、十日現在で七十名を越えた。担当者は受け入れに遺漏なきよう、参加者に納得して頂

ける大会を目指して準備を進めている。お申し込みまだの方は早速の手続きをお願いします。(薫)

は、宅地として高い値で売られ、買い主は、住んでみたくなる街／駅から歩いて数分／松造りの一戸建／銀行ローン可／等と、早速高級住宅区域に仕立ててしま

▼晴れたある日、そとが騒がしいので窓を開けると、園児の団が田圃におりて、れんげを摘んでいる。自然と遊ぶ園児の姿は、れんげの花とともに可憐で美しい。

は女子(めこ)、杓子は若子(じゃくし)がそれぞれナマツたもの、つまり女も子供も、誰れもかれも皆、という意味になるというのである。

☆高野山の追悼川柳大会の前夜宿泊申し込みは、十日現在で七十名を越えた。担当者は受け入れに遺漏なきよう、参加者に納得して頂

ける大会を目指して準備を進めている。お申し込みまだの方は早速の手続きをお願いします。(薫)

は、宅地として高い値で売られ、買い主は、住んでみたくなる街／駅から歩いて数分／松造りの一戸建／銀行ローン可／等と、早速高級住宅区域に仕立ててしま

▼晴れたある日、そとが騒がしいので窓を開けると、園児の団が田圃におりて、れんげを摘んでいる。自然と遊ぶ園児の姿は、れんげの花とともに可憐で美しい。

は女子(めこ)、杓子は若子(じゃくし)がそれぞれナマツたもの、つまり女も子供も、誰れもかれも皆、という意味になるというのである。

☆高野山の追悼川柳大会の前夜宿泊申し込みは、十日現在で七十名を越えた。担当者は受け入れに遺漏なきよう、参加者に納得して頂

ける大会を目指して準備を進めている。お申し込みまだの方は早速の手続きをお願いします。(薫)

は、宅地として高い値で売られ、買い主は、住んでみたくなる街／駅から歩いて数分／松造りの一戸建／銀行ローン可／等と、早速高級住宅区域に仕立ててしま

▼晴れたある日、そとが騒がしいので窓を開けると、園児の団が田圃におりて、れんげを摘んでいる。自然と遊ぶ園児の姿は、れんげの花とともに可憐で美しい。

は女子(めこ)、杓子は若子(じゃくし)がそれぞれナマツたもの、つまり女も子供も、誰れもかれも皆、という意味になるというのである。

NEW FORMAL COLLECTION



泣いて笑って……
夜を通り過ぎたら
また陽がのぼっていた。
男のロマンと
フオーマルと。

OSK JEFF
ORIGINAL DESIGN

株式会社 **オースケ**

〒540 大阪市東区南新町 1-13
☎ 06(941) 8 0 1 5

5つの個性・5つの色味!!

アイスクャンデー

ミルク・アズキ・パイン・チョコ・宇治金時



なんば戎橋筋本店
なんば高島屋百貨店
泉北高島屋百貨店
京都高島屋百貨店
阪神百貨店
松坂屋百貨店
サトウ百貨店
京阪モール店

サンストア中之島店
サンストア淀橋店
アベノ近鉄百貨店
上本町近鉄百貨店
東大阪近鉄百貨店
奈良近鉄百貨店
京都近鉄百貨店

なんば新川店
虹のまち店
ドーチ力店
南海難波駅店
国鉄大阪駅店
梅田大丸百貨店
堺東店



大 阪 ・ なん ば



TEL 641-0551